Book in Book **EXCLUSIVE INTERVIEW with YOSHIKI**

METAL HAMMER JAPAN

メタルハマー・ジャパン
第9号

Vol.9

キーボードが織りなす
美旋律メタルの調べ

THE 50 BEST ALBUMS OF 2021
から考察する
日英メタル・ミュージックの同異点

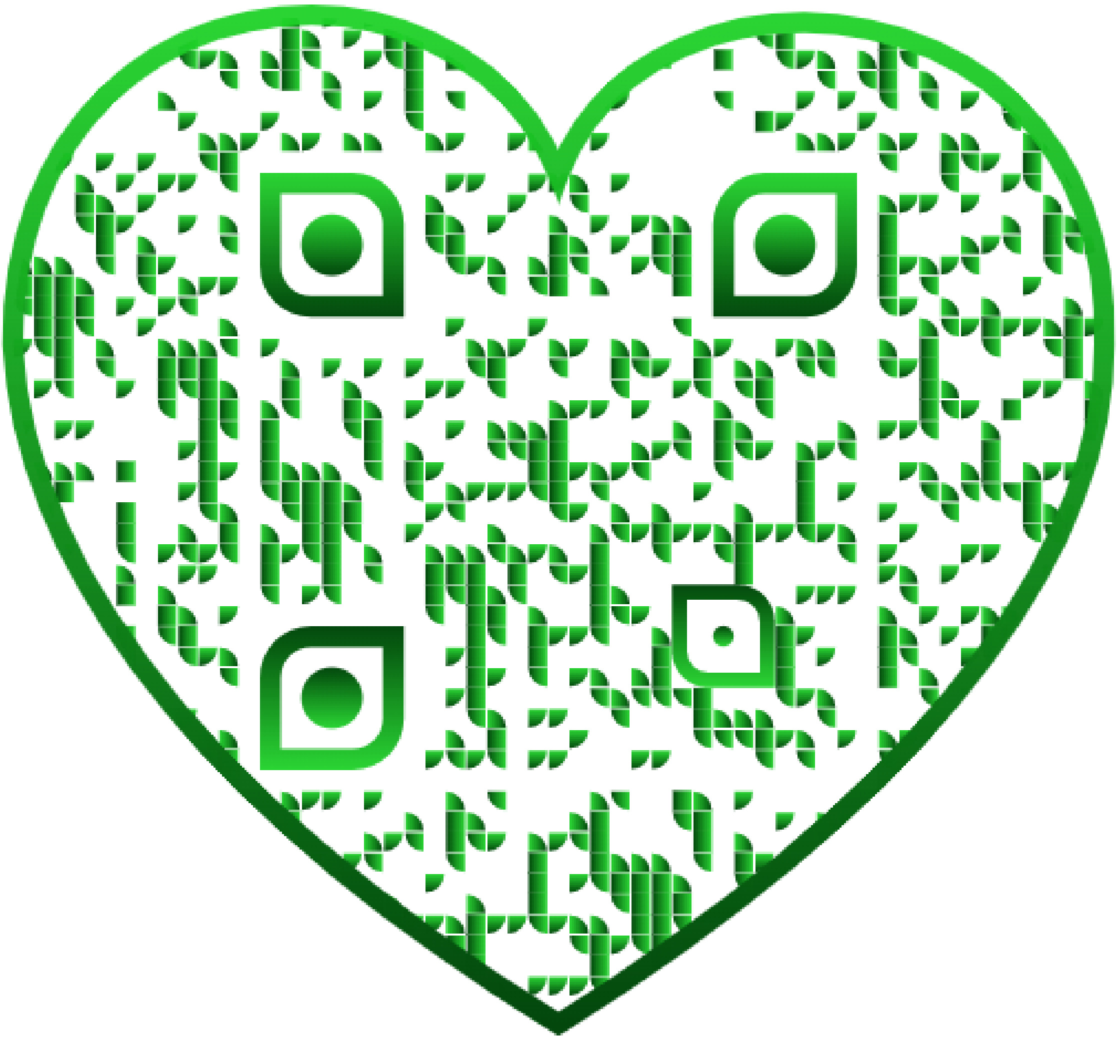
IRON MAIDEN

『魔力の刻印』と1982年のヘヴィメタル

ROB HALFORD
SEPULTURA
VOIVOD
STEVE VAI
OUTRAGE
CROSSFAITH
NEMOPHILA
SANAE TAKAICHI

Special Feature
YOSHIKI

Rittor Music Mook



METAL HAMMER JAPAN

METAL HAMMER JAPAN

[Vol.1] ～ [Vol.8] 好評発売中！

お求めは全国の書店・webサイトにて

全号共通価格：1,650 円（本体 1,500 円＋税 10%）

[Vol.1]

Special Feature **オジー・オズボーン**

○フィリップ・H・アンセルモ○BABYMETAL○KOЯN○エヴァネッセンス&ウィズイン・テンプテーション

[Vol.2]

Special Feature **ドリーム・シアター**

○メシュガー○メガデス○キング・ダイアモンド○ミルクル○コード・オレンジ○ディジー・ミズ・リジー

[Vol.3]

Special Feature **アイアン・メイデン**

○ジューダス・プリースト○ラム・オブ・ゴッド○ペリー・トゥモロー○メイク・ゼム・サファー○アーチ・エネミー

[Vol.4]

Special Feature **BABYMETAL**

○ブラック・サバス○カーカス○ナパーム・デス○ブリング・ミー・ザ・ホライズン○水野真紀

[Vol.5]

Special Feature **エヴァネッセンス**

追悼 **アレキシ・ライホ**　○フィニッシュ・メタルの血統○女性シンガー飛躍のヒストリー

BAND MAID／ハロウィン／プリティー・レックレス／ゴースト／エイリアン・ウェポンリー／ヘイトブリード／LOVEBITES／聖飢魔Ⅱ／谷原章介

...and More!

[Vol.6]

Special Feature **アグレッシブでいこうぜ！ フィリップ・H・アンセルモ／ゲイリー・ホルト**

○ハロウィン／アンディ・デリス×マイケル・キスク

○アイアン・メイデン『キラーズ』の内側○グレイテスト・ソングス TOP100 GOJIRA／聖飢魔Ⅱ／ポール・ギルバート／ラム・オブ・ゴッド／システム・オブ・ア・ダウン／FUTURE FOUNDATION

...and More!

[Vol.7]

Special Feature **スリップノット『アイオワ』20年目の超激** 追悼 **ジョーイ・ジョーディソン**

○アイアン・メイデン／ブルース・ディッキンソン×ヤニック・ガーズ

○BABYMETAL～英国が見た彼女たちの 10 年 イングヴェイ・マルムスティーン／聖飢魔Ⅱ／Mary's Blood／人間椅子／オーペス／レイザーラモン RG

...and More!

[Vol.8]

Special Feature **ラウドネス 40 年目の大和魂**

○メタリカ○NEMOPHILA○PATA × 吉田 "HALLY" 良文○筋肉少女帯○2022 年、来日ライヴは実現するのか!?

オジー・オズボーン／ Damian Hamada's Creatures ／ドリーム・シアター／ヴォルビート／ハイルング／メイヘム ...and More!

[Vol.10]は 2022年6月 発売予定！

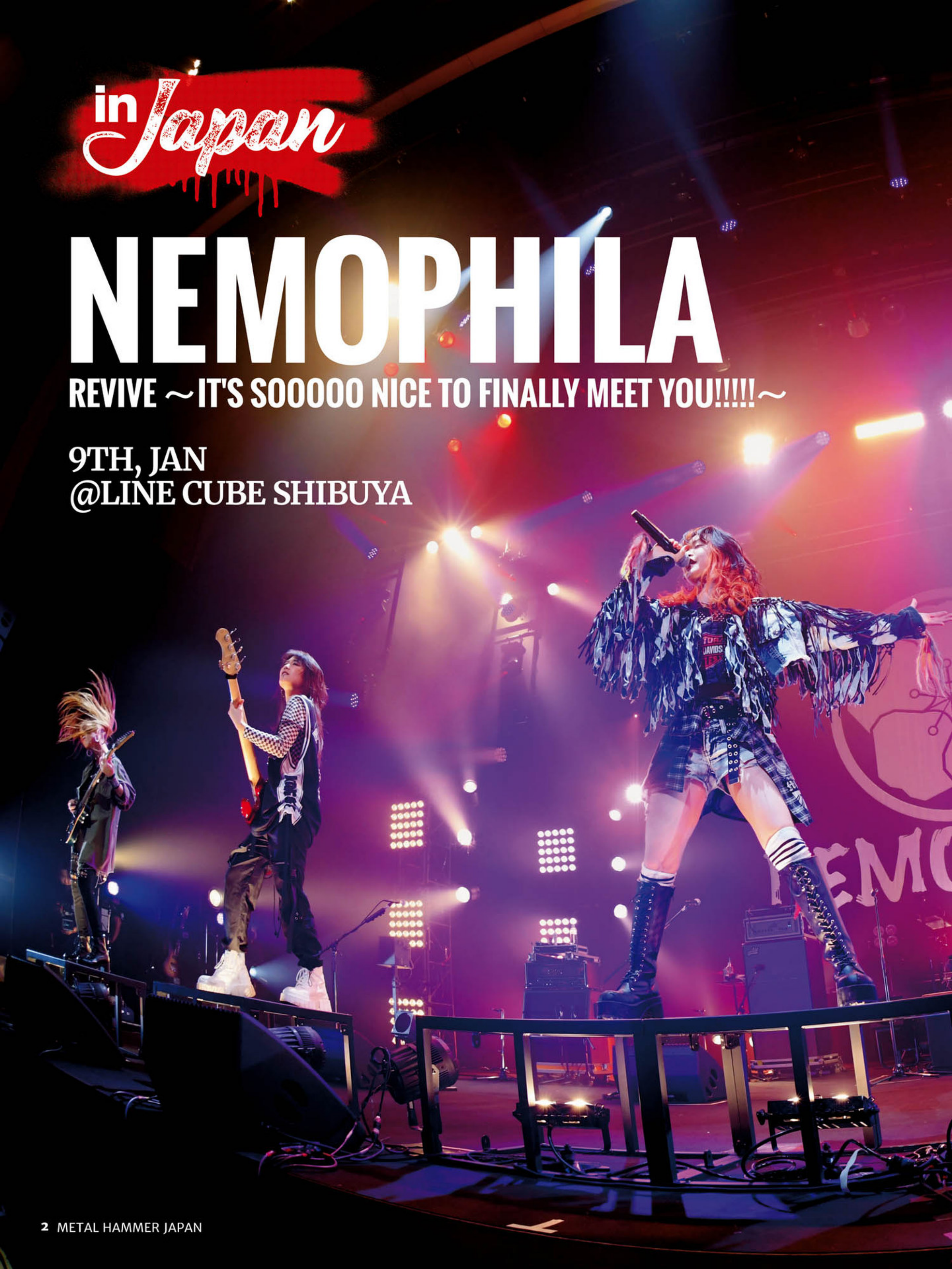
□編集部からの叫び！
日々のオフィシャル Twitter はこちら
>> @MetalHammer_Jp

in Japan

NEMOPHILA

REVIVE ～IT'S SOOOOO NICE TO FINALLY MEET YOU!!!!!～

9TH, JAN
@LINE CUBE SHIBUYA



SETLIST

1.鬼灯
2.雷霆 -RAITEI-
3. SORAI
4. NIGHT FLIGHT
5.BREAKING OUT
6.REVIVE
7.BLOOMING
8.FIGHTER
9.ROLLIN'ROLLIN'
10.HYPNOSIS
11.GAME OVER
12.CREATURE
13.MONSTERS
14.CHANGE THE WORLD
15.DISSENSION
16.OIRAN

ENCORE

17.LIFE

THE FLOWER HAS BLOOMED... WHAT IS GOING TO HAPPEN NEXT!?

GO TO ARTICLE ON P.102

CONT

From UK

P.06

IRON MAIDEN

『魔力の刻印』と1982年のヘヴィメタル

アイアン・メイデンに名盤は数あれど、最も衝撃的かつ後世への大きな影響を持った作品と言えば、1982年3月にリリースされた3rdアルバム『魔力の刻印』だと言えるだろう。発売からちょうど40年を迎えた今回は、ミュージシャン＆関係者の言葉から、改めて本作の重要性を考えていこう。

また同年にはほかにもさまざまな名メタル・アルバムが発売されており、作品や各バンドの動きとともに、1982年がヘヴィメタル・シーンにとってどのような1年だったのかも振り返ってみたい！

◎特集①

P.73

キーボードが織りなす美旋律メタルの調べ with YUHKI

ヘヴィなギター・リフや怒涛のドラムだけがメタルの必須要素にあらず。そこに鍵盤によるメロディが加わることで、楽曲はより色鮮やかに昇華していくのだ！　時代やジャンルの違いによるキーボードの特徴を知ることで、楽曲をより楽しめるようになるだろう。後半はシーン切っての奏者YUHKIに、プレイヤーならではの意見も聞かせてもらったぞ。

Book in Book

P.49

YOSHIKI

～過激と美麗の先に

長いロック史に於いて、YOSHIKIほど過激に、そして美しく音楽を創造してきた人物がいるだろうか。ハードロック／ヘヴィメタルをバックボーンに、ドラミングでは誰よりもアグレッシブなパフォーマンスを魅せ、ピアノにて絶世の美旋律を奏でる。

現在は米国を基盤にワールドワイドな活躍を見せているYOSHIKIだが、先の緊急帰国のタイミングにて単独取材が実現。

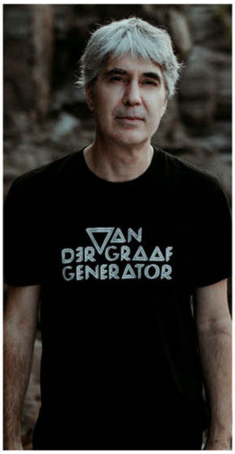
そこで語られたのは、コロナ禍における音楽制作時の心境や待望のソロ作品についてなど、この機会でしか聞けない貴重な話題ばかり。

“激と麗”、その極限を追求するYOSHIKIの、心からの声に耳を傾けてほしい。

P.30

ヘヴィの流儀 #6

VOIVOD



毎号、メタル・ミュージシャンが持つ“ヘヴィさ”について語ってもらう本連載。今回は初のドラマーとなる、ヴォイヴォドのミシェル“アウェイ”ランジュヴァンが登場だ。スラッシュ・メタル・シーンを出自としつつ、今も唯一無二の世界観を持ち続けているアウェイの“ヘヴィの流儀”は、最新作『シンクロ・アナーキー』でも体現されている。

ENTS

The Documentary ①

ROB HALFORD

―告白―

From UK P.18

50周年を迎えたジューダス・プリーストより、ヘヴィメタル・シンガーの象徴であるロブ・ハルフォードが見参! バンド脱退から再加入についてはもちろん、同性愛についてカミング・アウトした意味までもを赤裸々に語る、心からの"告白"だ。

P.36

OUTRAGE

デビュー35周年を迎えたアウトレイジだが、なんと今春には、自らを題材にした映画を公開する。しかも音楽系ドキュメンタリーではなく、青春モノ……!? オーケストラとの共演も決定し、まだまだ挑戦をし続ける丹下真也のバイタリティの源を探る。

SEPULTURA

From UK P.24 The Documentary ②

マックスの"拒絶"と"抵抗"

セパルトゥラにとってはもとより、以降のメタル・スタイルにも大きな影響を与えたアルバム『ケイオスA.D.』。同作の開幕を告げる「リフューズ/レジスト」は今もってグルーヴ・メタルのアンセムのひとつであり、バンドの代表曲となっている。同作が生まれた瞬間を、マックス・カヴァレラが振り返る。

STEVE VAI

From UK P.97

実に10年ぶりとなる描き下ろしインスト作『インヴァイオレット』をリリースした鬼才、スティーヴ・ヴァイ。本作は、これまでにないほどライヴを意識したアルバムでもあったという。彼の意識をそこへと向かわせた理由とは!?

楽器探しのアシスト・メディア デジマート マガジン

CROSSFAITH

meets デノン P.42

ラッパーのralphを迎えた新作「Gimme Danger feat. ralph」は、よりライヴ感の高まった漢の心をたぎらせる一曲である。なにせ、『グラップラー刃牙』とのコラボでもあるのだから! 後半では、老舗音響メーカー[デノン]の最新ワイヤレス・イヤホンを、Koie & Teruがじっくりとチェック♪

THE 50 BEST ALBUMS OF 2021

から考察する 日英メタル・ミュージック・ムーブメントの同異点

◎特集② P.84

今回も発表された、英『METAL HAMMER』チームが制作する"2021年リリース・アルバムTOP50"。欧州での最新ブームが見えてくる本ランキングを、日本的目線で考察。昨年はアイアン・メイデンの『戦術』を筆頭に、大物のリリースもあったが、果たして日英での流行りの違いや感覚の差とは……いかに!?

NEMOPHILA

P.102

昨年12月に1stフル・アルバムをリリースし、1月には有観客ワンマン・ライヴも成功させたNEMOPHILA。次代のメタル・シーンを彩る彼女たちは、今後の展開についてどのようなヴィジョンを見据えているのか? 今回は< SAKI×むらたたむ >、< mayu×葉月×ハラグチサン >という対談&鼎談にて、それぞれのキャリアから感じた想いを語り合う!

P.66

LET'S TALK METAL

高市早苗

衆議院議員であり、現在は自民党・政務調査会長を務める高市議員も、ハードなサウンドを愛聴する人物のひとり。"音楽には、宗教も政治も関与せず"の合言葉のもと、高市議員の音楽的趣味、そして政治とメタルがともに抱える問題について熱く討論!

..and more!

STARS' WORDS P.96
NEW NOISE P.116
DISC REVIEWS P.120
METAL NEW GEAR P.124

『魔力の刻印』と1982年のヘヴィメタル

IRON MAIDEN
THE NUMBER OF THE BEAST 40TH ANNIV.

アイアン・メイデンの……ひいてはヘヴィメタル・ミュージックを代表するアルバムと言っていいだろう、1982年3月にリリースされた『魔力の刻印』。ブルース・ディッキンソン時代の開幕作であり、その後メタル・シーンに携わるさまざまな人間に多大なる影響を与えた一作だ。

発売から40年、その威光は陰るところなく、今もって多くのメタル・ファンから愛されている本アルバム。本号巻頭特集では、そんな『魔力の刻印』に魅せられたミュージシャン、業界の主要関係者が語る“感化の言葉”によって、その重要性を改めて噛みしめていきたいと思う。いかに時代が進み変わろうとも、変わらぬ魅力が存在することを、本作はまた教えてもくれているのだ。

また特集後半からは、本作発売年である1982年のメタル界にスポットライトを当て、そのときシーンがどのように動いていったのかも再確認していこう。過去を知ることで見えてくる未来もあるのである。

『魔力の刻印』
ワーナー
WPCR-18143（スタジオ・コレクション・リマスタード）
WPCR-18145（コレクターズ・エディション／フィギュア付属）
※同作40周年を記念したリマスター音源カセット（画像）が輸入仕様で3月18日に発売！

Text by Dom Lawson
Interpretation by Mirai Kawashima
Original by『METAL HAMMER』358

IRON MAIDEN
The Number of The Beast

アイアン・メイデンのデビュー・シングル（「ランニング・フリー」／1980年2月）のB面が、「Burning Ambition」（＝燃えたぎる野心）というタイトルなのは、偶然ではなかった。

40年前、誕生しつつあった“ニュー・ウェイブ・オブ・ブリティッシュ・ヘヴィメタル”に燃料を注いでいたバンドの大半とは対照的に、ほかならぬ世界征服を頭に描いていたスティーヴ・ハリスとその仲間たちには、バンドとしてのヴィジョンと集中力、献身、そして規律があった。何年にも渡る精力的なライヴ活動ののち、ロンドン出身の彼らは2枚のアルバム――『鋼鉄の処女』（1980年）と『キラーズ』（1981年）――で確実に、そして急激に注目を浴びた。印象深いアイコニックなエディを中心に据えたアートワークもまた、人々の興味をそそった。

しかし残念ながら、よく練られた計画というものはほとんどの場合失敗するものだ。メイデンにおいても『キラーズ』のUSツアーが終わりに差しかかる頃、不思議な力を持つフロントマン、ポール・ディアノは、バンドがトレードマークとしてきたハイ・クオリティなパフォーマンスをするよりも、コカインや酒でヘロヘロになることに興味があるということが明らかになってしまった。

そしてツアーの直後ポールはクビになり、極めて重要な3rdアルバムのレコーディングが薄っすらと見えていた“地球上で最もホットなロック・バンド”のひとつは、突如ふさわしい後任を探さなくてはならなくなった。そして……ご存知だとは思うが……彼らはその後任者を見つけることとなった。

†

1981年8月、《レディング・フェスティヴァル》のバック・ステージで、メイデンのマネージャー、ロッド・スモールウッドとミーティングをした数週間後、間もなくサムソンを抜けることになるヴォーカリスト、ブルース・ディッキンソンはオーディションに呼ばれる。そして当然のことながら、あの歌声の持ち主であるから、すぐに採用となった。

秘密兵器を得て、苦労して手に入れた“勢いの波”に乗っていたアイアン・メイデンは、マーティン・バーチをプロデューサーに迎え、すべてを変えてしまうことになるアルバム『魔力の刻印』をレコーディングするため、ロンドンの［バッテリー・スタジオ］に入っていった。

画期的なカバー・アートから、万人に愛される音楽的内容に至るまで、アイアン・メイデンの3rdアルバムは、間違いなくヘヴィメタルというジャンルの形成期における決定盤のひとつである。

そして、そのリリースに先立つ1982年2月、彼らはシングル「誇り高き戦い」をリリース。ブルース・ディッキンソンの信じられない歌声を世界にお披露目したのだった。滑稽だが素晴らしい、西部開拓時代をテーマとしたミュージック・ビデオもあり、当然このシングルはあっという間にUKトップ10入り。即座にアンセムになった「誇り高き戦い」は、アイアン・メイデンが大きなメンバー・チェンジをうまく切り抜けただけではなく、以前よりも自信を持ったバンドとして生まれ変わったことを裏づけるに充分な魅力があった。

1ヵ月後、満を持してリリースされた『魔力の刻印』は、またたく間にUKアルバム・チャート1位を獲得。一方ロサンゼルスでは、若き日のブライアン・スレイゲル（彼は生涯に渡るアイアン・メイデン・マニアにして、［メタル・ブレイド・レコード］のオーナーだ）は、ズバリ地球上で最も幸せな男だった。

“メイデンはすでに一番好きなバンドだったから、シンガーを変えたときは興味深かったよ。「うーん、どんな感じになるだろう？」ってね”とブラインは振り返る。***“だけど、サムソンのことは知っていたから、ブルースはとてもうまくやるだろうとも思っていた。それでレコードを手に入れてね。最初に聴いたときから、ただただブッ飛ばされたね。『魔力の刻印』は俺にとって、今でも完璧なヘヴィメタルのレコードさ。すべてが完璧。サウンドも完璧、曲も完璧、歌詞も完璧。究極のヘヴィメタルのレコードで、すべての条件を満たしていもの。ずっと聴き続けたのを覚えているさ。何度も何度も繰り返し……少なくとも数週間ね。完全にあのアルバムに取り憑かれてしまったんだ”***。

“IT WAS BRUCE’S FIRST ALBUM... WHAT A WAY TO INTRODUCE YOURSELF!”

DANI FILTH, CRADLE OF FILTH

あれはブルースの最初のアルバムだった……何て自己紹介の仕方だったんだ！

――ダニ・フィルス

イギリス征服はすでに成し遂げられそうであった一方、『魔力の刻印』は、アイアン・メイデンがほかのどこのエリアでも……特にアメリカにおいて、止めようもない力となることを確実にした。

「吸血鬼伝説」や「アカシア・アベニュー22」のようなとても素晴らしい曲のおかげだけではなく、ブルース・ディッキンソンが非常に強い力を持っているという事実によって、『魔力の刻印』は、世界基準の音楽になろうとしていたヘヴィメタル・シーンに必要な要素そのものともなっていった。アイアン・メイデンはすでに大規模なアメリカ・ツアーも行ない、より大きく、より良い活動への準備を済ませてはいたが、『魔力の刻印』はそのスピードをさらに加速させるものだったのだ。

“彼らの成功はあっという間だった”と、ブライアン・スレイゲルは言う。***“興味深かったね。1981年に彼らを観にいったときは、ジューダス・プリーストのオープニングだった。ヒューストンまで飛行機で行ったんだけど、彼らのことは誰もロクに知らなかったよ。ただ間違いなくアンダーグラウンドのバズがあって、アメリカでもメタル・シーンが始まろうとしていた。その頃には、メタリカがアンダーグラウンドのサーキットを回っていた。だけど、『魔力の刻印』が出***

［1982 年のアイアン・メイデン］スティーヴ・ハリス、クライヴ・バー、エイドリアン・スミス、ブルース・ディッキンソン、デイヴ・マーレイ（左下から時計回りに）。

ると、最初は悪くないという感じで、それからあっという間に加速していったことを覚えているよ。このアルバムのツアーのために戻って来る頃には、彼らはすでにいくつかのアリーナでヘッドライナーを務めていたから"。

『魔力の刻印』がさまざまな世代のメタル・ファンやミュージシャンたちに与えたインパクトは、評価してもしきれないものだろう。

全８曲、無類の壮大さを誇る40分間により、自らのサウンドを定義したアイアン・メイデンの3rdアルバムは、完璧なタイミングで登場した。ジャンルとしてハズみがついていたヘヴィメタルは、世界中にそのゴスペルを広めるための新たな旗手を必要としていたのだ。

美学的観点からも、『魔力の刻印』は1982年のレコード・ショップの棚に並んでいたどんな作品よりもイカしていて、カッコよくて、エキサイティングに見えた。『トップ・オブ・ザ・ポップス』で放映された「誇り高き戦い」のビデオに心動かされなかった者も、デレク・リグの壮大なアートワークにはヤラれたものだ。ただし、アメリカのヒステリックな宗教的人々の反応は芳しくなかった。彼らは"アイアン・メイデンはサタニストである"と公然と非難。"自分たちが想像するオカルト的なアルバムの中身"に抗議し、大量のLPを焼きもした。だが、これらの人々による愚かな行動は、さらなる宣伝としてメイデンに手を貸しただけだった。まったく見事な仕業である。

"THE INFLUENCE OF *THE NUMBER OF THE BEAST* ON METALCORE IS UNDENIABLE"

SAMMY URWIN, EMPLOYED TO SERVE

『魔力の刻印』のメタルコアへの影響は明白だよ。

——サミー・アーウィン

あれから40年、『魔力の刻印』の影響は現代ヘヴィ・ミュージックのあらゆるところで聴くことができる。このレコードからの影響を口にしない著名なメタル・ミュージシャンを挙げるほうが、手っ取り早いかもしれない。

音楽的にもヴィジュアル的にも、わずか

ながら、しかし間違いなくアイアン・メイデンの影響を受けているクレイドル・オブ・フィルスは、1998年に「審判の日」をカバーすることで、メイデン支持を明確にした。ダニ・フィルスが説明するように、『魔力の刻印』は80年代のメタル・キッズのコレクションに欠かせないものだったのだ。

“あの頃ウールワース（※スーパーマーケット）によく行っていた。たくさんの安いアルバムが売っていたからね。どういうわけか『キラーズ』、『魔力の刻印』、『頭脳改革』がすべて3.49ポンドで売られていたから、親父が1回につき1枚ずつ買ってくれたんだ！”とダニは笑う。***“最初に手にしたのが『魔力の刻印』だったと思う。完全なるゲーム・チェンジャーだったよ。いくつかの点で、かなり論争を引き起こすものだった。ある意味、彼らのルーツから離れていたし。最初の2枚には……おもにポール・ディアノのおかげで、パンクっぽいエッジがあったからね。だけど、これはブルースの最初のアルバムで、何という自己紹介の仕方……（ブルース風のファルセットで）「Invaaaaaders～！♪」って。ハハハ！最高だよ。あの1曲目を初めて聴いたとき、みんなはどう思ったんだろうな。ブルースの高音の叫び声は別格さ。そしてそれから「審判の日」。あれは明らかにこのレコードで一番の曲だよ”***。

しばしば最高のヘヴィメタル楽曲のひとつとして名を挙げられる『魔力の刻印』のエピックなクロージング・ナンバー「審判の日」は、間違いなくヘヴィメタルの根底となるものである。クレイドル・オブ・フィルスによる毒のある演奏以外のほかにも、マシーン・ヘッド、ドリーム・シアターといった大物から、ドゥームの伝説SOLITUDE AETURNUS、アメリカのメタルコア、エスケイプ・ザ・フェイトらがこの曲をカバーしている。

“演奏するにしても、本当に素晴らしい曲だ”と、ダニはニヤリと笑う。***“ヴォーカリストにはたくさんの余地がある。本当にメロディックだし。有罪判決を受けて、絞首刑台を目の前にした男についてのストーリー・ラインも素晴らしい。本当に盛り上がっていく曲さ。悲劇的でもあるし、レコードのエンディングとして完璧だ。ほかの曲であのアルバムは終われないよ”***。

“俺に言わせれば、「審判の日」は史上最高の曲だよ！”とブライアン・スレイゲルは言い切る。***“すべてが完璧。歌詞の中身も本当にイカしている。まるで絞首刑を待っている、あの男になったみたいな気持ちになるよ。ソイツのフィーリング、感情がわかるんだ。歌も素晴らしいね。ギター・ソロも信じられないほどさ。エイドリアン（スミス）とデイヴ（マーレイ）は、史上最も過小評価されているギター・コンビだろう。まったく正当に評価されていない。それはともかく、あれは文字どおり完璧なヘヴィメタルの曲さ。変えるべきところなんてひとつもない。今でも聴くたびに鳥肌が立つよ”***。

『魔力の刻印』のリリース後、アイアン・メイデンは80年代の残りを“誰も止めることのできない征服者”として過ごした。彼らは、オールドスクールなメタルが商業的に脆弱な状態であった90年代ですら、

何とか切り抜けたのだから。

『魔力の刻印』の影響、そしてそれが刻みつけたメイデンのクラシックなサウンドが否定されることはなく、21世紀に入ると、バンド自身の、そして彼らが1982年に投げかけたヘヴィメタルのテンプレートの人気が復活。アーチ・エネミー、トリヴィアム、そしてアモン・アマースといった現在の古典主義者たちからメタルコア・シーン全体に至るまで、メイデンの音楽的な影響は、今日のヘヴィ・ミュージック・シーンの至るところに刻まれている。

"ああ、ものすごいよ、彼らの影響は本当に大きい"と、EMPLOYED TO SERVEのサミー・アーウィンは言う。***"メイデンはおもしろいね。彼らははみだしモノみたいに思えるんだ……特にハードコア・シーンではね。みんなサバスとプリーストは大好きだけど、メイデンは3バンドのなかではマーマイトみたいなものさ（※marmite／イギリスの発酵食品で、人により好き嫌いが分かれるもので、メイデンも聴く人を選ぶということ）。でも、彼らはメタルコアにとても大きな影響を与えたよ。PRAYER FOR CLEANSINGからアンアース、ダーケスト・アワーに至るまで、『魔力の刻印』のようなレコードからの影響は明白だよ。俺はメイデンのウサギの穴（※『不思議の国のアリス』を引用して）にさらに深く入って、少々病みつきになっていると思うな"***。

音楽的レベルで影響力があるというだけでなく、『魔力の刻印』は熱心なメタルヘッズにとって明快な必携のサウンドトラックであり、ヘヴィ・ミュージック・カルチャーの重要なパートになっている。事実、このアルバムはヘヴィメタルというルーツを超越し、より広くメインストリームの人々の目に留まるようになった。

サミーはそれをこう説明する。***"馬鹿馬鹿しく聞こえるかもしれないけど、『トニー・ホーク』のゲームがメタルコア世代である俺の音楽的テイストに大きな影響を与えたんだ。「魔力の刻印」は『トニー・ホーク プロ・スケーター4』に入っていて、俺はいつもプレイしていたから、あの曲は俺の頭のなかに染み込んでいるんだ。俺にとって特別なものなんだよ。若い頃はスリップノットやリンプ・ビズキットなんかを聴いていて、それらはみんな派手でエキサイティングで……だけど耳が肥えてくると、もっとプログレッシブなものが好きになってくるんだ。『魔力の刻印』のようなレコードには、開けるべき錠がもっとたくさんある。メイデンは、ときが経っても喜びが色褪せない贈り物なのさ"***。

一部の人間に年を感じさせることは別として、『魔力の刻印』の40周年は明らかに祝うに値するものだ。史上最高のバンドのひとつが本領を発揮し、今日我々が知る確固たるヒーローへと変貌していく瞬間であった。本作は"完璧なタイミングにリリースされた、完璧なヘヴィメタル・バンドによる、完璧なアルバム"だったのだ。

"あのアルバムは、俺がメタルというものに本当に入れあげているときにリリースされたんだ"と、ブライアン・スレイゲルは結論づける。***"自分のレコード会社を立ち上げていた俺の人生にとって、極めて重要なポイントだった。あれで残りの人生何をするのか決めたようなものだから！　メイデンのおかげで、みんなに素晴らしい音楽を聴いてもらうためなら何でもしようという気にさせられた。俺にとって『魔力の刻印』がこんなにも感動的ならば、ほかのみんなにも聴かせるべきだと思ったんだ。あんなにも素晴らしいものは聴いたことがなかったし、人生を変えられる経験だったから"***。

BEAST MODE 『魔力の刻印』全曲解説と、それらをカバーした主要なバンド

◎「侵略者」／「Invaders」
「侵略者」は、本物の空襲警報ように叫ぶニュー・シンガーを前面に据えた、猛烈なスピードの爆発的なオープニング・トラック。新しいフロントマンについて疑いの目があったファンは、すでにいなくなっていた。
▶カバーしたバンド：CANDIRIA

◎「吸血鬼伝説」／「Children Of The Damned」
メイデン史上に残る名曲。雰囲気たっぷりで壮大。「吸血鬼伝説」は物悲しく美しい訓話として始まり、頭蓋骨を震わせるラスト・スパートと、あっと驚くクレッシェンドで終わる。今なお息を飲まされる曲だ。
▶カバーしたバンド：セリオン

◎「ザ・プリズナー」／「Prisoner」
同名の60年代テレビ番組に基づく「ザ・プリズナー」は、俳優パトリック・マクグーハンによる古びることのない反逆の叫び声（"I am not a number, I am a free man!"＝俺は数字じゃない。俺は自由な人間だ！）で始まり、そしてエピックで雷鳴のようなヘヴィメタルとなる。

◎「アカシア・アヴェニュー22」／「22 Acacia Avenue」
「娼婦シャーロット」の続篇である、この裏通りの性風俗産業への賛歌は、メイデンの最も偉大なる、そして最も雷鳴のようなディープ・カット（※シングルでもなく、ライヴでもあまり演奏されない曲のこと）のひとつ。彼女たちの状況をしっかりと記した歌詞は、今もってサビてはいない。
▶カバーしたバンド：ダーク・トランキリティ

◎「魔力の刻印」／「The Number Of The Beast」
あの不気味なイントロ、あの少々普通でないオープニング・リフ、あのサビ。「魔力の刻印」は、欠点のない傑作だ。『オーメン2／ダミアン』を観たあとに、スティーヴ・ハリスが見た悪夢にインスパイアされたこの曲は、最もヘヴィなヒット・シングルのひとつ。
▶カバーしたバンド：クリエイター

◎「誇り高き戦い」／「Run To The Hills」
メイデンは常に偉大なるストーリーテラーであり、「誇り高き戦い」は初期の彼らによる最高の物語である。抜け目なく、"カウボーイ対インディアン"という論争のどちらの味方をすることもないこのトップ10ヒット曲は、メタル界の王冠にはめられた宝石と言えるだろう。
▶カバーしたバンド：HELLSONGS

◎「暗黒の街」／「Gangland」
『魔力の刻印』唯一の弱点として広く認識されている「暗黒の街」だが、それでもイカしているし、偉大なる故クライヴ・バーよる、類まれなるドラミングは目も眩むような見せ場にもなっている。そもそも、ギャングについての歌というのがイケている。
▶カバーしたバンド：ドリーム・シアター

◎「審判の日」／「Hallowed Be Thy Name」
"すべてのアルバム・クローザーの母"「審判の日」は、あっという間に名曲として認められ、数十年に渡ってメイデンのライヴでプレイされ続けている。もし君が独房にいて、処刑を待っているとしたら、これ以外に聴きたい曲などあるだろうか？
▶カバーしたバンド：クレイドル・オブ・フィルス、マシーン・ヘッド

Let's Go 40 Years Back!

1982年、ヘヴィメタル・シーンにはどのような変動があったのか!?

文：竹内伸一

Profile
某音楽専門誌の編集部勤務を経てフリーのライター／編集者に。メタル関連では《ラウドパーク》の公式パンフレットの制作などに携わる。『魔力の刻印』はリアルタイムで体験しましたが、子供には少々難しく、1982年当時の愛聴盤はガール『ウェイステッド・ユース』でした。

アイアン・メイデンがのちの大名盤『魔力の刻印』をリリースした1982年、その周辺ではいったいどのような動きがあったのか。ニュー・ウェイブ・オブ・ブリティッシュ・ヘヴィメタル旋風も陰りを見せ、逆にLAメタル爆発前夜とも言える同年は、その波が混じり合う、ヘヴィメタル・ミュージックにとってなんとも刺激的な年だったのではないだろうか。今から40年前のメタル・シーンにタイムスリップしてみよう。

NWOBHMが終息するなか活路はアメリカに

ヘヴィメタルの金字塔とも言える名作『魔力の刻印』がリリースされた1982年。そのとき、そこでは何が起きていたのか。本稿では1982年のヘヴィメタル・シーンを振り返っていきたい。

まずは、1982年に至るまでのヘヴィメタルの動きを押さえておこう。本誌Vol.6では、アイアン・メイデン『キラーズ』の発売40周年にまつわる特集に関連して、1981年のメタル・シーンを回顧した記事を掲載しているので、改めて一読していただけるとありがたいが、かいつまんで言えば、アイアン・メイデン、サクソン、エンジェル・ウィッチなどの登場で1979年頃からイギリスで盛り上がりを見せていた“New Wave of British Heavy Metal（NWOBHM）”と呼ばれるムーブメントが、本国ではやや沈静化。その一方で、レインボー、オジー・オズボーン、デフ・レパードなど、イギリスから市場の大きなアメリカへと打って出るバンドが現われ始め、NWOBHMがアメリカへ伝播していく。

また、日本のラウドネス、フランスのワーニングなど、NWOBHMに触発された若きバンドが、世界各国から産声を上げ、来るべき世界的なメタル・ムーブメントへの下地を作った……それが1981年だった。そして、1982年もその流れは変わらない。

イギリスで『KERRANG!』誌を立ち上げたジェフ・バートンは、NWOBHMをサポートした人物として知られる。彼は“NWOBHMは金になる”と目をつけたレコード会社が、“実力の有無は二の次で、とにかくメタル・バンドを次々とデビューさせていた”状況を目の当たりにし、“1981年でNWOBHMは終わった”と宣言したと言われている。

グラム・ロックもパンクも、同じような状況を迎えてムーブメントは終息していったが、1981年あたりから新たにデビューするNWOBHMバンドは、いわゆるB級（そこがまた熱心な愛好家には魅力なのだが）の雰囲気をたたえているパターンが増え、それ故に活動期間が短命なバンドも多く、メイデンやデフ・レパードなど、のちにレジェンドとなるバンドが続々と登場した1980年に比べれば、やや見劣りするのは否めないだろう。

加えて、NWOBHMムーブメントを支えたバンドや、NWOBHMを契機に改めて脚光を浴びたベテラン勢にトラブルが続出。ガールは解散、アイアン・メイデン、デフ・レパード、サクソン、ブラック・サバス、ホワイトスネイクなどでメンバー・チェンジが相次ぐ。

なかでもマイケル・シェンカー・グルー

プは、元レインボーのグラハム・ボネットの加入が発表されるが、リーダーのマイケル・シェンカーに並ぶ人気を誇ったドラムのコージー・パウエルが入れ違いで脱退。後任にテッド・マッケンナを迎えて、なんとかアルバム『黙示録』を完成させるも、リリースを待たずにグラハムが脱退し、発売後のライヴは前任のゲイリー・バーデンを呼び戻して敢行するというゴタゴタぶりだった。さらに、オジー・オズボーンには、アメリカ・ツアー中に飛行機事故でギタリストのランディ・ローズを失うという悲劇も起こっている。これらの音楽以外の要因も、ブームの終息を予兆していたのではないだろうか。

オジーのように、英国である程度の成功を収めたバンドが、アメリカへ積極的に打って出ていたもの1981年と同様。前年、ジョー・リン・ターナーを迎えたアルバム『アイ・サレンダー』でよりアメリカ市場を意識したキャッチーなサウンドへと舵を切ったレインボーは、ジョーをフィーチャーした第2弾『闇からの一撃』をリリース。全英では前作の3位から5位へと最高位を落としたが、全米では50位から30位へと上昇。AOR風の甘いメロディを持つシングル「ストーン・コールド」は、全米40位へとチャート・インを果たし、リッチー・ブラックモアが目論んだ全米制覇は、ある一定の成果を上げたと言える。

▲1982年のメタル界を最も悲しませたニュースは、3月19日に起きたランディ・ローズの死亡事故にほかならない。以降のメタル・シーンの変化にも、少なからず影響があったと言えるだろう。

また、ジューダス・プリーストの『復讐の叫び』は17位、メイデンの『魔力の刻印』は33位と、精力的なツアーの成果も相まって過去最高のチャート・アクションを獲得しているアルバムも少なくはない。

英国勢に刺激を受け
新たなメタルが萌芽

さて、英国勢が続々と進出してきたアメリカはどうだったのか。

アメリカでは1983年にモトリー・クルー、クワイエット・ライオット、ラットなどが頭角を現わし、好セールスを記録したことで、一躍メタル・ブームが到来。やがて世界を巻き込み80年代の音楽シーンを席巻することとなる。その前年の82年は、英国勢のアメリカ進出によってヘヴィメタルを受け入れる土壌が培われ、1983年のビッグバンへ向けて力を蓄えていた状況だったと言えるだろう。

もちろん、自国のメタルバンドも登場し始めており、モトリー・クルーは前年に自主レーベルからリリースした『華麗なる激情』を、ロイ・トーマス・ベイカーがリミックス。メジャー・レーベルから再発している。ランディ・ローズの代役としてオジーのツアーに参加したブラッド・ギルスを擁することで一躍注目を集めたナイト・レンジャーは、アルバム『ドーン・パトロール』でデビュー。アルバムは全米40位、シングル・カットされた「ドント・テル・ミー・ユー・ラヴ・ミー」も全米40位といずれもヒッ

Records of 1982 1982年リリースのメタル的重要作をピックアップ！

『激烈リフ軍団』（3月）
◎タンク

エディ・クラークがプロデュースした1stアルバム。民族音楽風の導入部で昂揚感を煽ると、あとは一気に猛々しいロックンロールで突き進む。さまにモーターヘッド直系の勇ましさ。10月には2作目『反逆の戦士』も発表。

『蠍魔宮～ブラックアウト』（3月）
◎スコーピオンズ

前々作あたりからの北米市場を意識した音楽的志向がこの9thで結実。強靭なリフを軸にスピード感を保ちながら、哀愁を帯びたバラードやキャッチーな側面も見せ、隙のないメタル・アルバムを作りあげた。全米10位。

『メタル・オン・メタル』（4月）
◎アンヴィル

カナダの4人組（当時）の2ndアルバム。前作で披露したNWOBHMの影響を思わせる疾走するサウンドが進化。硬軟織り交ぜながら鋭利なリフを刻む場面などはスラッシュ・メタルにも通じ、彼らの先見性が垣間見える。

▲ランディの代演としてオジーを支えたブラッド・ギルス擁するナイト・レンジャーは、同年『ドーン・パトロール』でデビュー。"派手なツイン・ギター"も、80年代メタルの特徴である。

トを記録している。

70年代から活動を続けるニューヨークのトゥイステッド・シスターは、『アンダー・ザ・ブレイド』でメジャー・デビュー。"LAメタル"を先取りしたかのようなド派手な出で立ちで注目を集めた。また、ヴァン・ヘイレンの『ダイヴァー・ダウン』は全米3位と過去最高を記録し、健在ぶりをアピール。キッスも『暗黒の神話』でメタリックなサウンドに挑戦している。

もうひとつ、アメリカのメタルの動向で特筆すべきものがある。『メタル・マサカー』のリリースだ。これは、同年に設立されたメタル専門レーベル［メタル・ブレイド］のコンピレーション・アルバムだが、ロン・キール率いるスティーラー（のちにインヴェイ・マルムスティーンが参加したことでもお馴染み）、ラットといったLAメタルの中心となるバンドから、スラッシュ・メタルの旗手となり、やがてアメリカを代表するロック・バンドとなるメタリカの初音源までを収録しており、時代を先取りした興味深い一枚となっている。

ラウドネスの活躍に日本メタル・シーンが急激に活況

ここまで海外勢の動きを見てきたが、日本のメタル・シーンの動向にも触れておこう。

1981年11月にラウドネスが華々しくデビューしたことで、ドメスティックなメタル・バンドへの期待がにわかに高まり、1982年1月にはY&Tをゲストに迎えたメタル・イベント《JAPAN HEAVY METAL FESTIVAL》が開催。ラウドネス、5X、ピンク・クラウド、そしてデビュー前のアースシェイカーが共演した。10月には《関西ヘヴィメタル東京殴り込みギグ》も開催される。のちのジャパニーズ・ヘヴィメタル・ムーブメントを牽引する44マグナムとマリノが新宿ロフトでライヴを行ない、大盛況となった。

リリースも活気づき、70年代から活躍するカルメン・マキを擁する5Xは『HUMAN TARGET』、ヘヴィ・メタル・アーミーから改名したイースタン・オービットは『フューチャー・フォース』をリリース。もちろんシーンの火付け役となったラウドネスの躍進も目覚ましく、前作よりわずか8ヶ月で2ndアルバム『戦慄の奇蹟〜 DEVIL SOLDIER』を発表。高崎晃はそれに先駆けて5月にはソロ・アルバム『ジャガーの牙〜 TUSK OF JAGUAR』を、高崎がプロデュースを手掛け、ラウドネスが演奏でも参加した本城未沙子のデビュー・アルバム『魔女伝説〜 MESSIAH'S BLESSING』は12月にリリースされている。

もう一方の雄とも言えるバウワウも活況。4月に『エイジアン・ボルケイノ』をリリースすると、7月にはスイスの《モントルー・ジャズ・フェスティバル》に出演。そのままイギリスに渡り、レコーディングと《レディング・フェスティヴァル》への出演を実現させる。そこでは、アンコールが鳴りやまないほどの喝采を受け、その実力の高さを証明してみせる。また、録音した音源は、9月に『ワーニング・フロム・スターダスト』、10月に山本恭司のソロ・アルバム『エレクトリック・シネマ』として発売するという量産ぶりだった。

日本でも1983年にはジャパニーズ・ヘヴィメタル・ムーブメントを牽引するバンドが続々とデビューするが、アメリカ同様に大ブームの下地が作られたのが1982年だったと言えるだろう。

『ワイプド・アウト』（6月）
◎レイヴン

NWOBHMを代表するバンドのひとつ、レイヴンの2ndアルバム。"最もラウドで最も速い"がコンセプトだが、まさにそのとおりのサウンドを荒々しく鳴らし、世界中の熱心なメタル・ヘッズを虜にした。スラッシュ・メタルへの影響も大。

『メタル・マサカー』（6月）
◎V.A.

メタル・ブレイドのコンピ盤。ビッチ、マリス、シリス・アンゴルなど9組が参加。2ndプレスではスティーラー、ラットがはずれてブラック&ブルーに差し代わり、メタリカの「ヒット・ザ・ライツ」も別テイクに。第2弾も同年発表。

『復讐の叫び』（7月）
◎ジューダス・プリースト

ポップな面が際立った前作から軌道修正。2本のギターがエッジの効いたリフを刻み、メタリックなサウンドを徹頭徹尾鳴らす。序曲「ヘリオン」で幕を開け、矢継ぎ早に曲が連なる緊張感みなぎる構成も見事。全英11位・全米17位。

Column　その10年後、20年後のメタル・シーンは……？

■1992年のヘヴィメタル・シーン

1991年9月にニルヴァーナの『ネヴァーマインド』がリリースされると、時代の空気は一変。80年代に華美なルックスと狂騒的なサウンドで栄華を極めたヘヴィメタルは時代遅れと見なされ、ダメージ・ジーンズとネルシャツでヘヴィかつ退廃的なサウンドを鳴らすグランジがロックの主役を奪う。1992年には、モトリー・クルーからヴィンス・ニールが解雇され、ラットは解散。時代の移り変わりを思わせるトピックもあり、メタルの勢いは衰えていくことになってしまう。

しかし、そこで終わらないのもメタルのすごさ。1992年には次代の息吹とも言える作品が登場し、以降の新しいメタル・シーンを形作っていくこととなる。超絶技巧でプログレッシブ・ロックの開祖となったドリーム・シアター『イメージズ・アンド・ワーズ』、凶暴なリフ&リズムと咆哮するヴォーカルがスラッシュ・メタルの進化を示したパンテラ『俗悪』などは、単に同年の名作というだけではなく、メタル史においても重要な作品だ。なお、日本ではイングヴェイ・マルムスティーン『ファイアー・アンド・アイス』がオリコン1位を獲得している。

■2002年のヘヴィメタル・シーン

90年代末からメロディック・デス・メタルが北米でも受け入れられ始め、また、2001年にはスリップノット『アイオワ』が全世界的なヒットを記録。欧州や日本では90年代も根強い人気を保っていたヘヴィメタルだが、2002年には北米での復権の兆しも見えてきた。

そんななか、90年代の米メタルを支えたKORNの『アンタッチャブルズ』が全米2位・全英4位と健闘。イン・フレイムス『リルート・トゥ・リメイン』、ソイルワーク『ナチュラル・ボーン・ケイオス』など、北欧勢も充実作を続々と発表し、北米でも好評を得た。また北欧メロデスに影響を受け、アメリカからもメタリックなバンドが台頭。この年には、キルスウィッチ・エンゲイジ『アライヴ・オア・ジャスト・ブリージング』、オール・ザット・リメインズ『ビハインド・サイレンス・アンド・ソリチュード』などが生まれている。

日本では前年に続き、メタル・フェス《BEAST FEAST 2002》が開催され、オリジナル・メンバーによるスレイヤー、ソウルフライ、モーターヘッド、アーチ・エネミー、イン・フレイムス、ユナイテッド、SUNS OWL などが共演を果たした。

『イメージズ・アンド・ワーズ』
ドリーム・シアター

□1992年代表作

『俗悪』
パンテラ

『アンタッチャブルズ』
KORN

□2002年代表作

『アライヴ・オア・ジャスト・ブリージング』
キルスウィッチ・エンゲイジ

NWOBHMとメタル"ビッグバン"の狭間で生まれた金字塔

さて、英国ではNWOBHMが終焉を迎えつつあった一方で、世界的にはメタルの大ブームの予兆が見えた1982年は、もうひとつ特筆すべきトピックがある。それはメタル史に残る名作が数多く生まれたこと。その筆頭が、今回の主役、アイアン・メイデンの『魔力の刻印』であることは言うまでもない。

NWOBHMの旗手として華々しくデビューを飾り、時代の兆児となったアイアン・メイデンだが、好事魔多し。1981年秋にはドラッグ禍によりポール・ディアノが脱退。彼のパンキッシュで吐き捨てるような歌唱は、ほかとは一線を画するもので、バンドのひとつの個性となっていただけにポールの離脱は大きな痛手だったはずだが、サムソンからブルース・ディッキンソンをヘッドハントすることで、バンドを新生。力強くも伸びやかに歌い上げるシンガーを得たことで、その音楽性も広がり、激しさに加えて劇的な展開も見せるようになった。

なかでもアルバムを締めくくる「審判の日」は7分を超える大作で、印象的なパートが次々と飛び出すめくるめく展開を見せるな

『華麗なる激情』(8月)
◎モトリー・クルー

前年発表の自主制作盤をロイ・トーマス・ベイカーがリミックス。一部ヴォーカルも差替えたメジャー・デビュー作だ（収録曲と曲順も異なる）。キャッチーなメロディを持つグラマラスなロックンロールは、LAメタルの幕開けを告げた。

『偽りの時』(9月)
◎ダイアモンド・ヘッド

メジャーからリリースされた2ndアルバム。前作で見られたスピード感は希薄になり、ミディアム〜スロー・テンポでヘヴィなサウンドを鳴らす。ブルースの要素も散見され、NWOBHM勢のなかでは異色の存在感を示す。全英24位。

『ネザーランドの神話』(9月)
◎ヴァンデンバーグ

エイドリアン・ヴァンデンバーグ率いるオランダの4人組。デビュー作にして全米や日本でも発売され、翌年全米65位を記録した。シングルのバラード「バーニング・ハート」も39位に。王道を行くハードロックが熱い。

◀▲素行不良でアイアン・メイデンを去ることになったポール・ディアノ（左）と、サムソンから劇的な移籍を果たすブルース・ディッキンソン（右）。彼らがこのまま同バンドで活動していたら……メイデンもブルースも大ブレイクとはいかなかったか！？

か、流麗なツイン・ギターが激しさに彩を加え、ブルースが雄々しく歌い上げ大団円を迎える。のちのプログレッシブ・メタルにも通じるこのドラマチックで濃密な名曲が、本作を象徴しているように思う。

今号でインタビューを掲載（P.36）しているアウトレイジの丹下眞也は、リアルタイムで本作を体験した世代だが“ブルースの＜声＞を得たことでスケールが増し、NWOBHMというレッテルは完全に必要ではなくなった。よりメジャーな存在感を放つバンドになったように感じました。何より、それまでとは異なる新しい音楽を作り出していて、本作でアイアン・メイデンというジャンルを確立したように思います”と評してくれた。まさにその言葉どおり、アイアン・メイデンの世界観を確立した一枚と言える。

激しいサウンドと流麗なギター、力強いヴォーカルが織り成すその音楽世界は、以後のヘヴィメタルの典型にもなっている。後続への影響という意味では、クレイドル・オブ・フィルス、セリオン、マシーン・ヘッド、アイスド・アース、ズワンなどが本作の収録曲をカバー。ブラック・メタルからオルタナティブ・ロックのバンドまでもが取り上げている事実が、その影響力の高さを示しているのではないだろうか。ちなみにドリーム・シアターに至っては、本作をライヴで丸々カバーしている。

本国イギリスでは初のチャート１位に輝き、全米でも33位と健闘を見せ、アイアン・メイデン（ひいてはヘヴィメタル）の存在を世界に、そして熱心なファン以外にも示したことも、本作の大きな意義だろう。

『魔力の刻印』のほかにも1982年の名作を挙げておこう。ジューダス・プリーストの『復讐の叫び』、ダイアモンド・ヘッド『偽りの時』、タンク『激烈リフ軍団』、レイヴン『ワイプド・アウト』、ヴェノム『ブラック・メタル』などは、やはり後続のバンドにさまざまな影響を与えた名作として押さえておきたい。

加えて、1981年に多くのメタル・バンドが誕生した英米以外の地域からも、1982年はメタルの名作が続々登場。タイトなサウンドで全米10位を記録したドイツのスコーピオンズ『蠍魔宮～ブラックアウト』がその代表だが、ほかにもドイツのアクセプト『レストレス・アンド・ワイルド』、カナダのアンヴィル『メタル・オン・メタル』、オランダのヴァンデンバーグ『ネザーランドの神話』、スイスのクロークス『悪徳のメタル軍団』、スウェーデンのヘヴィ・ロード『白夜伝説』なども、今なお多くのメタル・ファンに愛され続ける好盤だ。

†

NWOBHMの狂騒は一段落したが、それを乗り越えたバンドたちが充実したメタル・アルバムを続々と発表したことが、翌年以降のメタル・ブームの呼び水となった……そう考えると、1982年はヘヴィメタルのスゴさや素晴らしさを全世界に認知させた１年だったと言えるのかもしれない。

ともかく、これらの名盤が生まれたというだけでも、1982年はヘヴィメタルにとって重要な１年だったと言えるだろう。

1982年は、ヘヴィメタルのスゴさを全世界に認知させた1年だった！

『レストレス・アンド・ワイルド』（10月）
◎アクセプト

ドイツのアクセプトの4thアルバム。前作で見せたヘヴィ＆スピード路線を推し進め、さらに強靭なサウンドを作りあげる。ツーバスが疾走し、ハイ・トーン・ヴォーカルが切り込むタイトル曲は、スピード・メタルの原点。

『暗黒の神話』（10月）
◎キッス

ヴィニー・ヴィンセントらを迎えてハードなサウンドへ回帰（契約問題からジャケットはエース・フレイリー）。ディスコ、AORなど、常にトレンドを意識してきた彼らがメタルへ舵を切った事実が、メタル時代到来を物語る

『ブラック・メタル』（11月）
◎ヴェノム

前作で示した速さと荒々しさを兼ね備えたサウンドが、この2ndではさらに凶暴に。その音楽性はのちのスラッシュやデス・メタルに、サタニックな世界観はのちのブラック・メタル（そのジャンル名も本作から）に受け継がれる。

The latest article from UK

Text by Stephen Hill
Interpretation by Tommy Morly
Original by 〘METAL HAMMER〙 357

ROB HALFORD

─ 告白 ─

　ヘヴィメタルを作り上げた"ゴッド"、ジューダス・プリースト。そのフロントマンであるロブ・ハルフォードの存在は、そのままヘヴィメタルの象徴とも言えるだろう。
　今回のインタビューでは、その長き歴史のなかで起きた重要なシーンについて、ロブ自身がじっくりと、そしてときに熱を帯びながら語ってくれた。バンド脱退から復帰についてはもちろん、同性愛のカミング・アウトも赤裸々に話してくれており、ほかではなかなか聞くことができない告白となっている。ぜひ彼のキャリアを思い起こしながら、それぞれの話題に耳を傾けてほしい。

ヘヴィメタル界にはアイコン的な存在が大勢いるが、メタル・ゴッドはひとりしかいない。

50年にも及ぶキャリアを通じ、歴史上最も重要で影響力のあるメタル・バンドにして自身が最も愛するバンド、ジューダス・プリーストのフロントマンをロブ・ハルフォードは務めてきた。そしてほぼ彼自身の力によって、このジャンルのヴィジュアル・イメージとサウンドが作り上げられてきた。

ウェスト・ミッドランズのウォルサール近郊の住宅団地で育った幼少期以降、メタルへの愛と情熱が果てることは一切なかった。彼は“私はメタル・シンガーで、それこそ私の生き方だ”と、アメリカの自宅から落ち着いた口調で語り始める。

“ステージで威勢よく歌ったとき、自分が長きに渡り世界一大好きなバンドのシンガーとしてやってこられたことを心からありがたく思うと同時に、恐縮してもしまってね”と笑みをこぼす。これまでに貢献してきたさまざまな功績だけでなく、こういったアティチュードこそがロブをスターにさせているのだ。

〜†〜

▶サットン・コールドフィールドの住宅団地での、あなたの幼少期はどのようなものだったのでしょうか？

あれは特別な時代だったよ。世界は第二次世界大戦から立ち直ろうとしていて、ああいった新しい住宅団地は英国の希望と華やかさを象徴していた。幸運なことに私の家族はウォルサール近郊のビーチデイル・エステート内にあったカルヴィン・ロードの38番に入居することができて、当時の誰もが迎えようとしていた新たな生活を手にしていた。

学校に通うようになり、ティーンエイジャーになると音楽に夢中になって、若者として最高の時間を過ごしていたね。しかし歳を重ねていくと普段の生活圏の外に目がいくようになり、私の心は早くもほかのことへと定まっていった。ウォルサールは愛していたけど、自国のもっとほかの場所を見たくなったのさ。当時はロンドンに行くなんてことは、それこそ、いち大イベントだったからね！

〜†〜

▶あなたが初めてインスパイアされた音楽とは？

私を揺るがしてくれた初めての音楽は、叔母のパットがくれたレコード・プレイヤーと数枚のレコードによるものだった。エルヴィス、ビル・ヘイリー・アンド・ザ・コメッツといった音楽を聴いて、“なんてことだ！　一体これは何なんだ！？”と思ったのを覚えているよ。頭が吹き飛ぶような気持になったからね。音楽にはこういった力があるってことに初めて気がついたんだ。

それからの私は、ザ・ビートルズ、ストーンズ、ザ・フーといった偉大なバンドたちを聴いて育っていったよ。当時、音楽はラウドになり続けていく頃だったので、あの頃に音楽に夢中になれたのは素晴らしいことだったさ。

そして“ヘヴィネス”というものが始まろうとしていた。私は《ワイト島フェスティバル》（1970年）でジミ・ヘンドリックスが大音量でリフをプレイするのを目撃し、それだけですでに充分だった。運命が私を呼んでいることに気がついたんだ。

当時、自分たちが作っていたサウンドは充分に個性的で、それによって、ほかのどのバンドからも大きく離れた存在となっていたこともわかっていたよ。“ジューダス・プリーストってバンドがいる。彼らはスクリームするようなヴォーカルと畳みかけるリフで、今までに聴いたことのないような音楽をやっているぞ”と、あちこちで言われていたからさ。そしてこれは、我々のイメージができあがる以前から言われてきたことでもあるんだ。

〜†〜

▶1980年は、メタルにとって信じられないような1年となりました。プリーストは『ブリティッシュ・スティール』をリリースし、ほかにも『エース・オブ・スペイズ』、『鋼鉄の処女』、『バック・イン・ブラック』、『ヘヴン＆ヘル』、『ブリザード・オブ・オズ〜血塗られた英雄伝説』といった、このジャンルでのクラシックとなる作品が数多く発表されました。あの年はあなたにとってどんな1年でしたか？

“I’VE NEVER LISTENED TO THE TIM OWENS JUDAS PRIEST ALBUMS”

ティム・オーウェンズが歌うジューダス・プリーストのアルバムを、私は一度も聴いたことがない。

〜†〜

▶プリーストが始まった頃、“ヘヴィメタル”という言葉は音楽用語としては捉えられてはいなかったと思います。メタルの黎明期は、あなたにとってどのようなものでしたか？

私たちが最初に行なったのは、この“ヘヴィメタル”という言葉を広めていくことだった。インタビューを受けるたびに“自分たちはヘヴィメタル・バンドだ”と答えてきたからね。私たちには、比べたり、判断したり、参考にするようなものなんてほとんどなかったんだ。しかし、自分たちが手にした楽器を使って研鑽しながら、自分たちが何者であるかを示す必要があった。そして、自分のキャラクターを見つけることはとても重要なことでもあって。

かなりエキサイティングだったよ。80年代は退廃の10年間だったけど、ジューダス・プリーストからモトリー・クルーまで、さまざまなヘヴィメタルが入り混じったアメイジングな時代でもあった。

ひとつの基準となるようなアルバムを作ったことは、私たちにとって大きな瞬間でもあり、今でもあのアルバムは飛び抜けていると思う。あれと同じようなアルバムを作ったことはないし、それはこれからもそうだろう。産業そのものが大きく変化しようとしていたとも言えるね。アメリカだけで、最初の一週間で50万枚も売ったんだから！　多くの人にとって景気が良くなっていたこともあって、どのライヴも売り切れ、Tシャツやレコード、カセットも売れまくりさ。どこを取ってもクレイジーな空気で溢れていたね。

〜†〜

▶1985年に開催された《ライヴ・エイド》は、一生に一度のイベントだったと思います。ロンドンとフィラデルフィアでコンサートが同時に行なわれ、プリーストとサバスのみがメタルを代表する当日の出演者でした。

そして私たちは、ともにフィラデルフィアでプレイをしてね！　とても皮肉なことだったとは思わないかい？　あの日、ウェンブリーにはメタル・バンドがいなかったんだ。なんて狂った状況だろう！

ビル・カービッシュリーが私たちのマネージメントを行なっていて、彼ら（※ライヴ・エイド主催側）はザ・フーの出演を求めていた。ビルは"わかったが、ジューダス・プリーストも出演させるんだ"と交渉してね。ボブ・ゲルドフ（※ブームタウン・ラッツのvoで企画の中心人物）は私たちのことを知っていたから、これはまったく問題なかったよ。しかし、イギリスを代表するヘヴィメタルの二大巨頭バンドがアメリカのスタジアムでプレイし、世界中に放送されるというのは、メタルにとって大きな通過点になったと思う。私たちは多くのお茶の間で初めて目にされることになったんだからさ！

当日、私は最前列あたりで客たちと一緒にほとんどの時間を費やし、ヘッドバンギングやスクリームをしていたよ。"マドンナ！　ミック！　プラント！　ジミー！"といった具合で、次から次へと大物たちが出演していってね。あれは本当に一生に一度のイベントで、そこに私はいたんだから。信じられるかい？　私はあそこにいたんだよ！

〜†〜

▶1992年にプリーストを離れたときは、どんな気持ちだったのでしょう？

その前に断っておきたいんだが、このバンドを離れたシンガーは私が最初じゃないんだよ。私はこれをLSD、すなわち"Lead Singer's Disease（リード・シンガー病）"と呼んでいる。これはコミュニケーションの不一致による典型的なケースだと、私は常に主張しなければならなかった。

『ペインキラー』（1990年）のツアーのあとの私たちは疲れ切っており、死んだ犬のようだった。ただ、その何年も前から私はバンドから離れ何かほかのことにトライしたいと伝えてきたし、バンドのみんなもそ

"NANCY CARTWRIGHT TOLD ME SHE WAS A PRIEST FAN, IN BART'S VOICE!"

ナンシー・カートライトはバートの声で、"プリーストのファンだ"と伝えてくれたんだよ！

れについて"幸運を祈る"と言って送り出してくれたよ。これはズルい行動でもなければ、予想外でもなく、自然な流れのなかで起こったことなんだ。

〜†〜

▶バンドから離れていた期間にも、あなたはグレイトな音楽を作り続けていました。

そうだと思うね。私はファイトとハルフォードをやっていて、それがプリーストに戻るための架け橋になってくれたと思っている。

私はあの頃、新しいことにトライするための時間を使えていたと思うし、それは自分の人生にとって充実した時間でもあった。自分が生きるうえで本当に必要なものが何なのかを整理し、その答えがプリーストだったんだよ。

そして作家としての自分の技量について、深く知ることもできた。私は『ウォー・オブ・ワーズ』（1993 年）の作曲やデモ制作のすべてを行ない、アルバム契約を獲得して世界を数回周ることとなった。あの頃のことを振り返ると、好意的な思い出ばかりがよみがえるよ。

〜†〜

▶ティム"リッパー"オーウェンズが加入してからのプリーストの楽曲を聴くことは？

その質問を私にしてくれたことはクールで、お答えするのはとても光栄なことだ。

私は『ジャギュレイター』（1997 年）を聴いたことがないし、『デモリッション』（2001 年）も聴いていない。意図的に避けてきたわけではなくて、実のところ私はバンドにいなかったからだ。ティムはグレイトなシンガーで私の良き友人のひとりだが、当時の私の生活のなかではプリーストに惹かれることはなかったんだよ。

〜†〜

▶ちょうどこの時期に、あなたは（同性愛者であることを）カミング・アウトしました。自身の性的嗜好について気づくようになったのはいつ頃のことだったんでしょうか？

最も古い記憶は小さな子供の頃で、それが具体的にいつだったのかはわからないが、まだ 10 代にすらなっていないと思う。男友達と一緒にいることが快適で、惹かれていくようになっていって。そして次第にそれがどういうことなのかを理解するために、男の子だけではなく、女の子たちとも遊んでみるようになって。

当時っていうのは悲しいことに、同性愛の若者にとって難しい時代でもあってね。まだそういったクラブもなく、唯一行為に及べるトイレの個室にふたりで入ろうものなら、逮捕され投獄されてしまっていたから。国際ニュース番組ではあさましい出来事として紹介されるわけで、私は自問するようになった。

人々に"お前は檻のなかに入るべきだ"と言われると、"一体、俺はどうなっているんだ？　俺はフリークなのか？"と思い始めるようになってね。若者としてはとても悩まされることだった。そういったすべてのことを扱っていかなくてはならなかったんだから。

〜†〜

▶年齢を重ねるに連れて、そのことについてどう対処していったのですか？

バンドのなかでも、私の私生活のそういった面はプレスに出さないように要請していた。それはバンドの名声に傷をつけたくなかったからで。

私は大人になってもそういった生き方を続け、（1998 年に）やっと MTV ですべてを棄て去るようにカミング・アウトして世の中に知られることとなったんだよ。君がこの質問をしてくれたのはとてもクールで、つい先日には《カミング・アウト・デー》

を迎えたばかりだし、それまでの規範から一歩踏み出して自分の人生を生きてみることは素晴らしいことなんだ。

〜†〜

▶以前と比べて、メタルは開放的になってきたと感じることはありますか？

そうだね。私たちは開放的で、誰に対してもオープンであり続けてきた。メタルが生まれたときは恵まれた状況とは言えなくて、"こんなの最低だ、本物の音楽とは言えない！"と言われ続けてきたものさ。だから私たちはこのコミュニティ一丸となり、自分たちの音楽を守ってきたよ。

こういったことは、実は多くのことにも言えるもので、いかなる宗教・人種・性別であっても、私たちは自分の人生を自由に生きていいってことなんだから。

この件について私はこれからもずっと発信し続けるつもりだよ。若いゲイのメタルヘッズが自身のアイデンティティを探すことは大切だと思っているし、誰にも平等であって然るべきで、我々にはその権利があるんだからね。

〜†〜

▶多くの人たちにインスピレーションを与え続けてきたことは、あなたにとっても誇りなのでは？

私は"アッチの世界"のスポークスマンになったことはないが、ただ自分の職務を果たしていて、たまたま自己の行動が言動以上に何かを語ることがあるということなんだろう。

昔ロシアでステージに上がったとき、迫害を受けてきた多くの人々を前にしたこともあって、自分が何か特別なものを伝えられたような気がしたよ。ロシアに限らず、もっと差別が顕在化していた国でも同様のことが起きた。私よりも明快に何かを伝えてきた人だってたくさんいるんだろうけど、私は私なりにゲイのヘヴィメタル・シンガーであることをオープンにしてきた。そして多くの人たちからメッセージを受け取ってこれたのは、とても恵まれたことだと思っているよ。

〜†〜

▶2003年の、プリーストへの復帰について教えてください。

当時はサンディエゴに住んでいたんだが、バンドのことが恋しくてたまらなかったんだ。私はコーヒーショップに行ってコーヒーを買い、青い紙と青い封筒を持って外に座り、自分の置かれている状況や感じていることを、心を込めて6〜8ページに渡り書き綴ったんだ。どれだけバンドが恋しかったかをね。それは、とても親密でパーソナルな手紙だった。

それを我々のマネージメントであるトリニフォールドに送り、自然な流れに委ねてみたんだ。"どうなるか様子を見てみよう"と思っただけだったが、少なくとも私の心のなか、そして全身からその思いを吐き出すことができたよ。多くのことを抱え込んでしまうと、精神的にダメージを受けてしまうからね。

振り返ってみると、これは復帰への道のりの一部だったんだ。メンバー全員がその手紙を読み、"よし、やろう"と言ってくれたんだから。

ジェイン・アンドリュース（マネージャー）、ケン（K.K.ダウニング／g）、イアン(ヒル／b)がいて……確かグレン(ティプトン／g）もいたと思う。彼らとウォルソールの自宅のキッチンでボックス・セット『メタロジー』について話しあったのを覚えているな。"この曲をどうする、あの曲はどうだ、アート・ワークは……"といったさまざまな話をしてさ。そして最後に"それで……キミは戻ってくるのか？"と聞かれ、"ああ、だってもう戻っているじゃないか"と答えたよ。彼らは"よし、わかった"となり、そして全員が帰っていったんだ！

私はキッチンに取り残されて、"なんてことだ！　私はプリーストに戻ったんだ！"と思ったよ。あれはとても……とてもイギリス的だった。男たるもの大騒ぎはしないものなんだ。とても英国男子的だったよ！　でも、素晴らしいことだったね。

すぐにでもウォルソールの通りに出て行き、"私はプリーストに戻ったんだ！　プリーストに戻ってきたぞ！"と叫びたい気分だったさ。私にとって、とても感情的なことだったんだから。バンドにいるっていうのはそういうことで、家族のようなものなんだね。私は戻ってきて、それから歴史をともに刻み続けているのさ！

〜†〜

▶2014年にはアニメ『ザ・シンプソンズ』に自分自身のキャラクターとして出演しました。あれは信じられないことでした！

そうなんだよ！　アメリカのライフ・スタイルの一部にプリーストが溶け込んでいるということが示せたし、イギリスのメタル界が勝利を手にしたとも言えるだろう。

台本の読み合わせに行ったとき、私は体験したことのない大きなスリルを感じていた。ひとつの部屋にすべての声優たちが顔を揃えていて、"ホーマーがいるぞ！　リサだ！　バートもだ！"という具合だったんだから。バートの声を演じているナンシー・カートライトは私のもとに駆け寄ってきて、"信じられないわ。私はプリーストの大ファンなの！"と話してくれたよ。しかも彼女はあのバートの口調でそれを言ってくれたんだよ！　あれはフリーキーで、本当に特別な日だったね！

〜†〜

▶同番組で、あなたたちは"デス・メタル・バンド"と紹介されました。その点については……？

ハハハ！　あれはおかしかったね。翌週の放送の冒頭で、バートが黒板に"ジューダス・プリーストは<デス・メタル>ではない"と書き埋めてもいたんだから。そういったことまでしてくれて、彼らはとても愛すべき人たちだったな。

ちょっとした過ちがあったことを認め、それを訂正したんだ。しかし黄色い姿となって作品のなかで永遠に残り続けるっていうのは、アメイジングなことだよね。

〜†〜

▶最後に……プリーストは2021年で50周年を迎えました。この節目をどう感じていますか？

ただ誇りに思うのみで、それ以外に言葉は見つからないね。バンドとしてやってきたことについて、本当に誇りに思っているよ。そしてイギリスのメタル、世界中のメタルのためにやってきたこともね。

"本当の最初から立ち会ってきた"というのは特別なことだ。そんなことは滅多にあるものじゃない。最初のブルース・バンドを目にすることはできないし、最初のジャズ・バンドや最初のクラシック・ミュージシャンは誰もがすでに亡くなってしまい観ることはできない。しかしジューダス・プリーストを目にして"彼らはこのジャンルを始めた男たちだ"と言うことはできる。わかるかい？　これはとてつもなく誇りに思えることで、とても満足な気持ちになれるものだよ。

Text by Dave Everley
Photo by Paul Natkin/Getty
Interpretation by Mirai Kawashima
Original by『METAL HAMMER』357

THE STORY BEHIND

REFUSE/RESIST BY SEPULTURA

セパルトゥラ　マックス・カヴァレラ

マックス・カヴァレラの「拒絶」と「抵抗」

SEPULTURA
REFUSE/RESIST

メタル・ミュージックのヘヴィ・グルーヴ化を本作的に推し進めたアルバムのひとつは、間違いなくセパルトゥラの5thアルバム『ケイオスA.D.』である。1993年にリリースされた本作には、前作『アライズ』までの粗暴に疾駆するサウンドとは一線を画し、その後のスタイルにつながる重々しいリズムがハッキリと刻まれている。

そして、それを象徴する楽曲こそ、オープニング・トラックである「リフューズ／レジスト」なのだ。バンドにとってはもちろん、メタル・シーンの変貌の引き金ともなったこの暴動的キラー・チューンについて、マックス・カヴァレラは今、このように回顧するのだった。

『ケイオス A.D.』
ワーナー
WPCR-17929/30
（エクスパンデッド・エディション）

セパルトゥラが"ブラジリアン・メタルの世界大使"から"90年代で最も影響力のあるバンドのひとつ"へと昇り詰めるとき、それを加速させる楽曲のインスピレーションとなったのは、ニューヨークの地下鉄でチラリと見えたレザーのジャケットだった。

"ニューヨークの地下鉄に乗っていたんだ"と、元セパルトゥラのフロントマン、マックス・カヴァレラは言う。"ブラック・パンサーのような、パンクっぽいヤツがいてね。プロテスト（※抗議）の文句が書かれた黒い革ジャンを着ていたんだ。[Protest and survive / Refuse and resist(抗議して生き残れ、拒絶し抵抗しろ)]ってさ。地下鉄を降りてホテルに戻り、それを書きつけたよ。もちろん、忘れてしまわないようにね"。

このインスピレーションの瞬間が、1993年の歴史的作品、『ケイオスA.D.』のオープニング・トラックにして2ndシングルである「リフューズ／レジスト」の原動力となった。

この3分間のノイズと怒りの大音響では、殴打の集中砲火をグルーヴィにスロー・ダウン。これによりバンドは名を上げ、"乱雑に広がる街＝ベロオリゾンテ"出身の凶暴な若者たちを、アンダーグラウンド・メタルのゲットーから90年代初頭のメインストリームへと押し上げる助けとなった。この曲は、ほぼ30年後の今日も、当時の……いや、いかなる時代のものとしても、明確な"戦闘指令"として傑出している。

"当時、俺たちには多くの怒り、憂鬱があった。世界は狂っていたよ"とマックスは言う。"あの曲は、間違いなく俺たちの考えていたことを反映していたから"。

セパルトゥラは、その数年前から自身の野心を見せつけていた。1989年の『ビニース・ザ・リメインズ』は彼らの3rdアルバムであり、のちに大企業になる——当時はまだ"影響力の強いアンダーグラウンド・メタルのレーベル"であった——[ロードランナー]からの第1作だった。その初期のスラッシュ～デスは、シーンに属する者たちに波を起こしたのだ。

続く1991年の『アライズ』という爆発的火炎瓶は、その時代の先を行く過激さ故に、当時の世界ではまだ受け入れる準備ができてはいなかったものの、それでも大きな期待を伴ったリリースであった。

1993年になる頃、風景は変わり始めていた。デス・メタル初期の強烈なインパクトは薄れていたかもしれないが、それはサウンド的なブルータリティがどこまで許容されるかという限界点を歪め、メインストリームのメタル・シーンに打痕を残していた。さらに適切に言えば、パンテラの革新的なアルバム『俗悪』（1992年）の成功がメーターを再調整し、ヘヴィ・ミュージックにとっての大胆な新時代への先駆けとなったのだ。

セパルトゥラ自身もその変化を感じていたし、正面からそれに立ち向かう準備ができていた。

"俺たちは、それまでに作ったどのアルバムにも満足していなかった"とマックス。"いつも「OK、この作品は完成だ。次はどんなアルバムができるんだろうな？」なんて感じで、いつでも新しいものを探していたよ。可能な限り自分たちを刷新しようとしていたけど、これはときにとても難しいことでもあってさ"。

『ケイオス A.D.』となるアルバムの目標は高かった。マックスやその仲間たちの影響源はスラッシュやデス・メタルを超え、ずっと広いものになっていた。新たな影響は、ミニストリーやバイオハザードから、ブリティッシュ・ポスト・パンクの扇動者であるニュー・モデル・アーミー、さらにはゴスの重要バンド、ザ・ミッションにまで及んでいた。

"俺たちにとって過渡期だったんだ。影響を受け自分たちの音楽に取り入れられると思う、さまざまなバンドを聴き始めていたね"。

彼らの野心を示すさらに大きな指標となったのは、アンディ・ウォラスをプロデューサーに迎えたことだ。アンディは『アライズ』（1991年）のミックスを手がけたほか、スレイヤーやフェイス・ノー・モア、ホワイト・ゾンビ、ニルヴァーナなどと仕事をしていた。彼はオルタナティブのバンドをヘヴィにし、メタル・バンドの音を最先端にすることができた。

"アンディは実際に（セパルトゥラの第二の故郷である）フェニックスにやってきて、3日ほど俺たちのジャムを見て、すべての曲について記録を取っていたよ"とマックスが振り返る。"それ以前にそんなことをしたヤツはいなかった。音楽を分析して、俺たちがやれるかもしれない別のことを提案したのさ"。

ニューヨークの地下鉄にいた革ジャンのパンクスのおかげで、マックスはすでに「リフューズ／レジスト」となるアイディアの芽を持っていた。それは彼の頭のなかで鳴っていた"すり潰すようなグルーヴを持ったヘヴィ・リフ"と完璧に符合していた。

"暴動を思わせるものだった"と、そのリフについて彼は言う。"車は燃えて逆さまに

"WE WERE LEARNING ABOUT ALL THIS BULLSHIT THAT IS POLITICS"

政治というこのクソ馬鹿げたモノについて学ぶようになっていって。
——マックス・カヴァレラ

セパルトゥラ：マックス・カヴァレラ、パウロ Jr.、アンドレアス・キッサー、イゴール・カヴァレラ（左上から時計回りに）。

“WE WERE IN IT FOR THE METAL. MUSIC FOR ME WAS MY WEAPON”

俺たちはメタルのためにやっていた。音楽は俺にとっての武器だったんだ。
——マックス・カヴァレラ

なっていて、あたり一面めちゃくちゃ、そこら中が混乱している……この曲を聴きながら目を閉じると、今でも暴動が目に浮かぶよ。間違いなく反警察(※アンチ・ポリス)ソングさ”。

あの音楽的な怒りは、ディスチャージやGBHといった、セパルトゥラお気に入りのアポカリプティック的な(※核戦争で人類が滅亡する恐怖などを歌っていた、ということ)セカンド・ウェイブのパンク・バンドからの影響も感じさせる、生々しい歌詞にも反映された。マックスは市街地の戦車、当局に包囲された人々、そしてその大混乱のイメージを重ねる。部分的には社会的主張、部分的には革命のスローガンも、だ。

“インドネシア、中国、ブラジル、アメリカ世界中で起こっていることを見てきた”と彼は言う。“いろいろなところを旅するようになって、政治という、このクソ馬鹿げたモノについて学ぶようになっていったから”。

皮肉なことに、セパルトゥラは『ケイオスA.D.』をレコーディングするにあたり、最前線からこれ以上ないほど遠いところにいた。

アンディ・ウォラスとともに、南ウェールズの[ロックフィールド]……ブラック・サバスやレッド・ツェッペリン、クイーンらの最も有名なアルバムの何枚かがレコーディングされた田舎のスタジオに退散したのだ。

“モンマスやチェプストウのパブで呑んでいたね。ギーザー・バトラーやロバート・プラントも一杯やったかもしれないところさ”とマックスは笑う。“ああいうヴァイブを探していたんだ。自分たちの夢の向こう側を生きていたってことかな”。

確かに彼らは、ちょっとしたブラジルっぽさも持ち込んだ。より小さなピッコロ・ドラムのスネアで演奏された、イゴール・カヴァレラによるオープニングの一斉射撃は、次のアルバム『ルーツ』(1996年)でより深く探究されることになる土着的リズムを予告していた。

“ブラジル音楽とメタルを文化衝突させたがったのは、アンディだった”とマックスは言う。“俺はうまくいくか確信が持てなかったんだ。あまりにかけ離れ過ぎていると思っていたからね。だけど彼は「いや、やってみるべきだ」と。彼は正しかったよ”。

「リフューズ/レジスト」は、マックスの壮大な20秒に渡る怒りの咆哮で終わるが、曲のオープニングも同じように印象的だった。この世のものとは思えぬパルスで始まるのだが、これは実はマックスとその妻グロリアの、まだ生まれていなかった息子ザイオンの心音を、超音波スキャンの際に捉えたものなのだ。

“あのイントロは大好きだよ”とマックスは言う。“あれはおもしろかったね。クリニックでミニ・ディスクとヘッドフォンを持って、看護婦さんたちと心音を録音しようとしていたんだから。あれほどユニークなイントロだから、きちんと録音することが大切だったのさ”。

2010年、マックスがセパルトゥラのあとに始めたソウルフライに、17歳になったザイオン・カヴァレラがドラムとして迎えられ、アルバム『オーメン』のボーナス・トラック用に「リフューズ/レジスト」のカバーを録音したことで、その環は閉じた。“あれをカバーするというのはザイオンの選択だったんだよ”と教えてくれた。“完璧なチョイスだったな”。

セパルトゥラによるオリジナル・バージョンの「リフューズ/レジスト」は、1994年、『ケイオスA.D.』からの2ndシングルとしてリリースされた。

この曲の歌詞のテーマに合わせて、シングルのジャケット・アート・ワークでは、ズラリと並ぶ警察の盾に飛びかかっている抗議者と、ストリートで燃え盛る炎のイメージが使われた。ビデオではさらに、歴史上最も有名な抗議のイメージのひとつである、1989年の天安門事件の際の、戦車に果敢に立ち向かう名もなき男性の映像も含まれていた。

セパルトゥラ自身も、アクシデントではあるが、権威とのイザコザを経験している。1994年、バンドはブラジルのサンパウロで行なわれたフェスティバルに出演した。セットの最後で、マックスは1歳半の息子ザイオンを頭上に持ち上げたとき、誰かがステージに向かってブラジル国旗を投げ入れたのだ。彼らがステージを降りると、マックスはヴァンのうしろに押し込まれ、近くの警察署に連れて行かれ、国旗に小便をかけた容疑で逮捕されたと告げられたのだ(小便などしていなかったし、結局罪状なしで釈放された。彼がやったとされた行為は、国中から非難を巻き起こしたけれど)。

1993年の9月にリリースされた『ケイオス A.D.』は、バンド初の全米 TOP40入りを果たし、UKチャートでも11位に到達するなど、セパルトゥラを次のレヴェルに押し上げた。「リフューズ/レジスト」は、その反抗の咆哮とともに、“90年代で最も重要なバンドのひとつ”という彼らのステータスを固めたのだ。ただし、バンド内では微妙な変化が起こりつつもあったのだが……。

“ベロオリゾンテにいた頃の俺たちは、完全に仲間だった”とマックスは振り返る。“24時間一緒にいたんだ。刑務所にすら一緒に行ったほどさ。『ケイオス A.D.』の頃には、仲間というよりも、普通のバンドになっていた。いろいろな人とつき合ったり、ほかのことをしたり。すっかり変わっていた”と。

セパルトゥラは1996年、マックスとともにもう1枚『ルーツ』というアルバムを作るが、その翌年、とげとげしい雰囲気のなか、フロントマンはバンドを去った。今日も、「リフューズ/レジスト」は暴動を煽る不朽のアンセムであり、彼らの最も成功した曲のひとつである。

“そんなことはどうでもいい”とマックスは言う。“<成功>なんて言葉、俺には大した意味はないね。グラミーみたいなもので、痔みたいなもの。結局どんなアスホール野郎でもできるものなんだよ。そんなもののために音楽をやっていたんじゃない。メタル、そしてそれが表現するもののためにやっていたんだ。音楽は俺の武器だった。セパルトゥラにいたとき、それはスゲェ武器だったんだ”。

Interview by Mirai Kawashima

ヘヴィの流儀 #6

Michel Langevin
ミシェル“アウェイ”ランジュヴァン

VOIVOD
ヴォイヴォド

毎号、メタル・ミュージシャンが考えるそれぞれの“ヘヴィさ”について語ってもらう本連載。今回は初のドラマーとなる、ヴォイヴォドのミシェル“アウェイ”ランジュヴァンが登場だ。スラッシュ・メタル・シーンを出自としつつ、“突撃一辺倒”にはならない唯一無二の世界観を、結成より40年を迎えた今も変わらずに持ち続けているバンドと言える。そのオリジナル・メンバーであるアウェイが持つヘヴィの流儀は、最新作『シンクロ・アナーキー』でも体現されている。

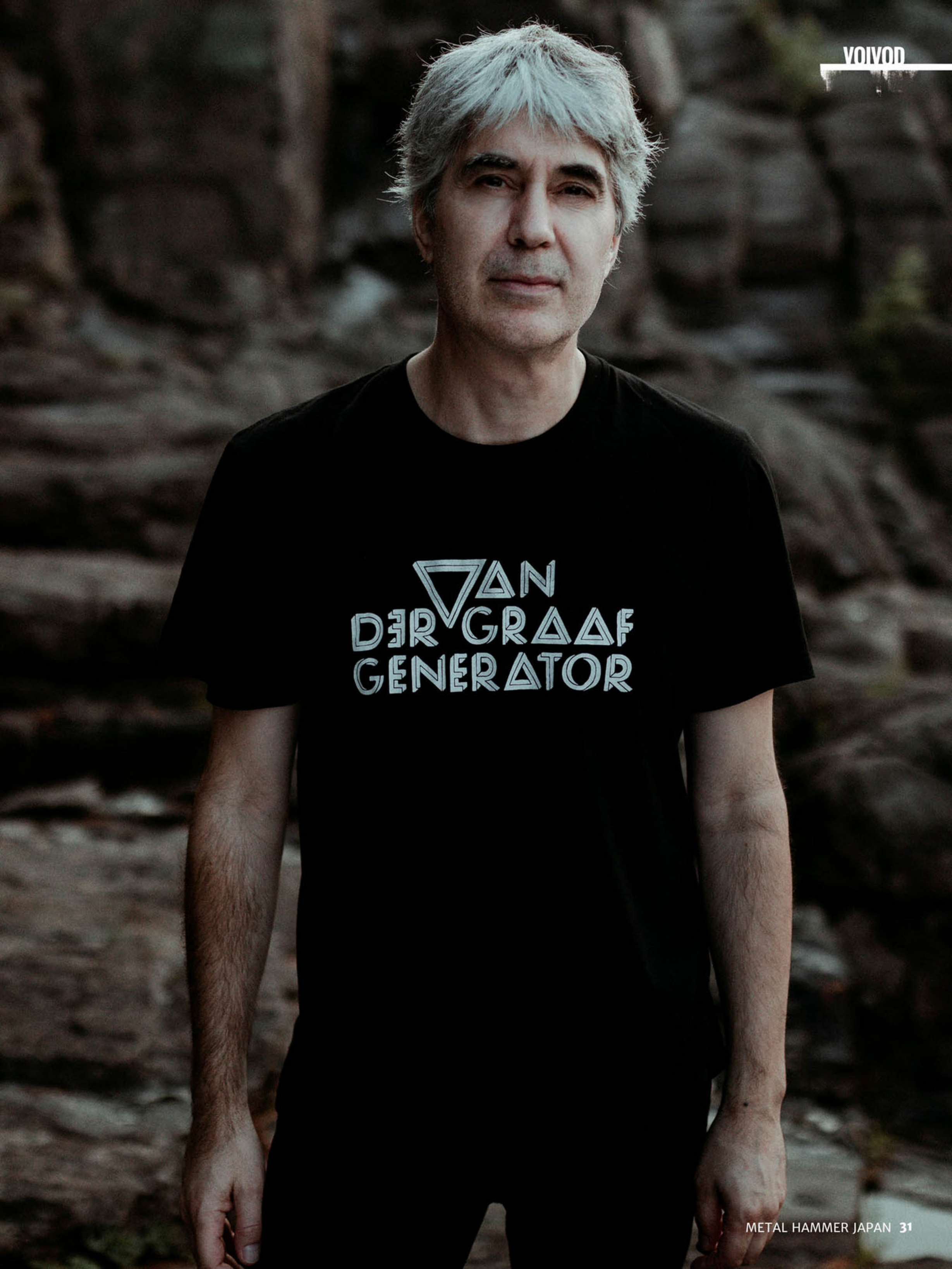
We don't force ourselves to play heavy music. It comes out naturally.

決して無理やりヘヴィに演奏しようとは思っていないよ。すべては自然に出てくるものさ。

俺の夢は、いつかヴォイヴォドでオーケストラと共演すること。

――早速ですが、ニュー・アルバム『シンクロ・アナーキー』がリリースとなりました。今回もヘヴィかつスリリングで、非常にいい作品に仕上がったと思います。

そうだね。『ザ・ウェイク』(2018年)以上とまでは言わなくても、同じくらいいいアルバムを作りたかったからさ。今回は以前のレコーディングとは少々違うプロセスがあってね。何しろロックダウンだったから、自分のPCでデモをプログラムして、みんなとファイル交換をして……というプロセスは、過去にはなかったことだった。やっとスタジオに入れるようになるまで、そうやって作業をしていたんだ。


VAN
DER GRAAF
GENERATOR

――レコーディング時期は？

昨年の6月なんだけど、スタジオ入りした時点では、まだリハーサルが充分にはできていなくて、準備万端という感じではなかったな。レコーディングしながら曲を書き続けているという感じで、とても大変だったよ。以前、そういうことはなかったから。

――やはり、コロナの影響は少なからずあったんですね。

2019年にGWARとのヨーロッパ・ツアーから戻ってきたあと少し休みをとって、それからみんなで集まって曲作りのジャムをするはずだったんだけど、2020年の3月にロックダウンになってしまったから。ただ、ツアー中にチューウィー（ダニエル・モングレイン／g）やロッキー（ドミニク・ラロッシュ／b）がパソコンにアイディアを録音しているのを見て、俺もやってみようと思ったんだ。それでドラムだけをプログラムして、ほかのメンバーに渡したり。

――そうだったんですね。

キリング・ジョークのようなポストパンクっぽい、タムをたくさん使ったビートをね。パソコン上ではいろいろやってもいて、ボツになったアイディアをつなげてみたりとかさ。こういうことがアルバムに『ディメンション・ハットロス』（1988年）っぽいフィーリングを与えたかもしれないな。曲の同じパートのなかで、違った方向に進んでいったりとか。

――複雑なリズム・チェンジが非常に印象的な作品でもありますよね。

間違いなくフュージョン・メタル・アルバムだよ（笑）。

――ドラマーとして、今も他者からインスピレーションを受けることはありますか？

今ヴォイヴォドがやっていることは、ドラマーとしてハードルが高くやりがいがあると思う。俺にとって素晴らしいことだよ。チューウィーはとてもジャズへの造詣が深いから。10代の頃、マグマやソフト・マシーン、キング・クリムゾン、ヴァン・ダー・グラフ・ジェネレーターといったバンド、あるいはザッパ時代のテリー・ボジオから音楽を学んでいたときのことを思い出すんだ。

――あなたのプレイからは、ヘヴィメタルやパンクと同じく、そういった要素も聴くことができますからね。

そうだね。ほかにもモントリオールのアバンギャルド・シーンともつながりを持つようにしているし、インプロをすることで、自分のドラミングの幅も広げている。チューウィーは素晴らしい作曲家だし、ピギー（故デニス・ダムール／g）も素晴らしい作曲家だった。俺は恵まれているよ。

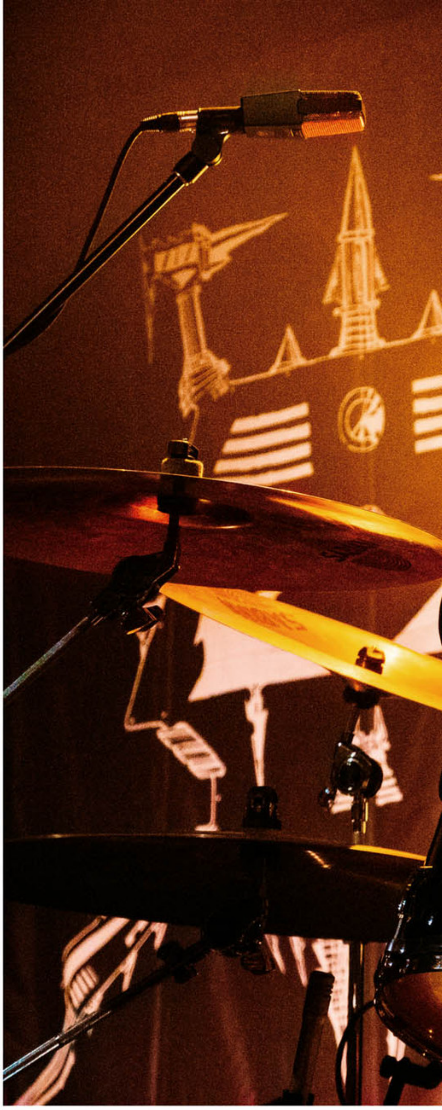
――ジャズと言えば、「ジ・エンド・オブ・ドーマンシー」のジャズ・アレンジメントは最高でした。ブラス・セクションと一緒にプレイするというのはいかがでしたか？

これはいつものことだけど、俺がカーブを曲がり損ねてしまうと、ほかのメンバーも道連れになってしまう（笑）。だからあのときも、リズムをはずさないように細心の注意を払ったよ。ブラス・クインテットのことは“メタル・セクション”と呼んでいたけど（笑）、彼らは素晴らしくて、俺はあの長い曲をきちんと演奏しようととても集中していたにも関わらず、演奏をみんなに聴いてもらえる喜びを得ることもできた。それに、ピンク・フロイドの『原子心母』のオープニングのような、とてもエピックなものを演奏している気分になれたから。俺の夢は、いつかヴォイヴォドでシンフォニック・オーケストラと共演することでさ。

――おぉ、いいですね！

チューウィーはブラス・クインテット用の譜面も書いたし、『ザ・ウェイク』では弦楽四重奏のパートも書いているからね。オーケストラと共演できたら、彼もとても楽しめるだろう。俺たちの音楽には映画的要素もあるからさ。

プレイしたい曲を書いてきたわけだから冒険をすることに躊躇はないよ。



――本作もそうですし、オーケストラとの共演を考えるなど、80年代から活動しているスラッシュ・メタル・バンドのなかでも、ヴォイヴォドほどのクリエイティビティをキープしているバンドは数少ないと思います。

そうだな、『ザ・ウェイク』はとても評判が良くて、正直少々驚いたくらいなんだ。あれはとても複雑でプログレッシブなアルバムだったからね。2018年にルーマニアからツアーをスタートしたんだけど、ライヴはどこも満員でね。これで安心したというか、自信がついたというのはあるかもしれない……“正しいことをやっているな”というね。

――それでも、その時期からなんですか。

それで今回も、可能な限り試せることを試したよ。ロッキーとチューウィーがバッキング・ヴォーカルもやっているせいで、『エンジェル・ラット』（1991年）や『ジ・アウター・リミッツ』（1993年）っぽい雰囲気に戻ったし。彼らはそれぞれ違った時期のヴォイヴォドのファンだから、『フォボス』（1997年）から『キリング・テクノロジー』（1987年）に至るまで、いろいろな要素が入ってくるし、もちろんそこに新しい捻りも加わる。俺は“クエッション・アンド・アンサー・スタイル”と呼んでいるんだけど、ギターとベースが絡み合って、そこに俺のドラムで一貫性を持たせてグルーヴィにす

俺にとって一番の恐怖は戦争による悲劇。戦争が起これば、民間人が苦しむわけだから。

るんだ。そしてスネイクが、スラッシュやパンクっぽい要素を持ち込む。素晴らしいケミストリーさ。

——まさにそのとおりです。

キャリア中ずっと、ライヴでプレイしたいと思った曲を書いてきたワケだから、冒険をすることに躊躇はないよ。例えば90年代初頭、人々の目はシアトルに向いていたから、『エンジェル・ラット』や『ジ・アウター・リミッツ』は見逃されてしまった。だけど今のツアーでは、それらのアルバムが大好きだという人々にも遭遇する。つまり、俺たちは正しいことをやってきたということさ。

——新しい刺激を得るために、若いメタル・バンドを聴くことは？

フェスティバルでほかのバンドを観て、感銘を受けることもあるよ。この間はゴジラを観てブッ飛んだ。最近オンラインで見つけたバンドで、確かクリプトシスという名前だったと思うけど、オランダのアーティストなんだがなかなか良かったね。あと、フランスのバンドで、セレストもとても気に入ったよ。これらのバンドは"お薦め"で出てきたものだけど、フェスティバルに出るときは、若いバンドも観るようにしているよ。

——サブスクで音楽を聴くとき、そういった機能は便利ですよね。

そうだね。自分から手を伸ばすとなると、やはり自分のヒーローたちの新譜を買うことが多いから。アイアン・メイデン、ジューダス・プリースト、マグマ、キリング・ジョーク、ヴァン・ダー・グラフ・ジェネレーターあたりは、今も素晴らしいアルバムをリリースし続けているよね。

——そんなヴォイヴォドにとって、ヘヴィであることはどのくらい重要ですか？

決して無理やりヘヴィに演奏しようとは思っていないよ。すべては自然に出てくるものさ。おそらくこれはメンバーそれぞれのルーツと関係していて、俺は子供の頃、

▲ダニエル“チューウィー”モングレイン（g）、デニス“スネイク”ベランジェ（vo）、ミシェル“アウェイ”ランジュヴァン（d）、ドミニク“ロッキー”ラロッシュ（b）／L to R

最初にリンゴ（スター）のドラムのエネルギーに惹かれたんだ。『ハード・デイズ・ナイト』や『ヘルプ！』の映画を観て、ドラム・キット全体が揺れていてビックリしたよ。ちなみに、俺にとって重要な作品のひとつである『ツイスト・アンド・シャウト』は、カナダでのビートルズのデビュー・アルバムなんだ。通常は『プリーズ・プリーズ・ミー』だよね？　だけど、カナダでは少々内容が違っていてさ。

――そうなんですね。

そして、それからキッスを聴いて、ディープ・パープルやレッド・ツェッペリンを聴いて……そしてパンクが出てきて。小さい頃からエネルギッシュな音楽に惹かれていたんだ。

――そして同時にプログレッシブ・ロックも吸収していたっという。

そう。70年代のケベックではプログレはとても人気があったからね。自分たちの世代の音楽だと感じたのは、アイアン・メイデンの1stやNWOBHMが出てきたときだね。新しい時代の始まり、自分たちの音楽だと感じて、ヘヴィメタルのドラマーになりたいと思ったんだ。

――そもそもあなたは、最初からドラマーを目指して音楽活動をスタートしたんでしたね。

10歳の頃だったかな、近所に引っ越してきた奴がいてね。家の前でアコースティック・ギターでビートルズを弾いていた。彼は兄貴と父親と“テディ・ボーイズ”というバンドをやっていると言っていて、彼の家に行ってみたら、リビングは楽器でいっぱいだったんだ。ギターやベース、キーボードなんかがあったんだけど、俺の目は即座にドラム・キットに釘付けになっていたよ。シンバルがUFOみたいだなんて思ったから（笑）。

――ハハハ、なるほど。

彼の兄貴がドラム担当だったけど、スティックを隠していてさ。俺たちはドラムを叩くことができなかった。どうしても叩きたかったから、その兄貴のビリヤードのキューを切って叩いたんだけど、見つかったときはめちゃくちゃ怒られたよ（笑）。とにかくあのとき初めてドラム・キットを目にしたんだ。当時ビートルズをよく聴いていたから、それでドラム・パートを学んでいったね。

――そして先程のようなバンドに感化され、今のスタイルができあがったと。

どうして自分がこういうドラム・スタイルなのかを説明するのは難しくてね。このキャリアを通じてずっと戦争に対する恐怖というものがあって、ドラムは俺にとってストレスや不安の吐け口なんだよ。だから、早くツアーに戻りたくて仕方がない。ヴォイヴォドでは環境問題とか、ディストピア的な内容についていろいろと歌ってきたけど、俺にとって一番の恐怖は戦争による悲劇。戦争が起これば、民間人が苦しむわけだから。

曲が速いことでヘヴィに感じられる一方で、ブラック・サバスなんかはスローで超ヘヴィだよね。

フィルシー・テイラーのツーバスを聴いてこれこそヘヴィだ！と思ったね。

――ではドラマーから見て、ヘヴィさを定義するものは何だと思いますか？

難しいな……アタリ・ティーンエイジ・ライオットなんかは大好きで、曲が速いことでヘヴィに感じられるショウはある。だけど一方でブラック・サバスなんかは、スローで超ヘヴィだよね。やはり難しいな（苦笑）。アコースティック・ギターでヘヴィなことをやるアーティストがいても不思議ではないし。個人的には、ヘヴィさというのはツーバスだね。俺にとっても武器のようなものだし（笑）。始めてコージー・パウエルがレインボーでツーバスを踏んでいるのを聴いたときはとても感銘を受けて、一体どうやっているのか解明しようとしたものさ。でもやっぱりフィルシー“アニマル”テイラーのツーバスを聴いたときに、“これこそヘヴィだ！”って思ったね。

――そもそも“ヘヴィな音楽”にハマったきっかけは？

おそらくはキッスかな。キッスやアイアン・メイデンの『鋼鉄の処女』はレコード屋に入ると目について、どんなサウンドか知らなくても“これは俺のお気に入りになるぞ”とわかったものさ。家に帰ってレコードをかけてみると、まさに想像どおりの音だった。そうそう、『アライヴ！～地獄の狂獣』も、とても重要な作品だよ。クリスマスに買ってもらって、家族が“かけてみよう”というからプレイしたら、すぐに“止めなさい！”って（笑）。俺は“やった！　俺の新しいお気に入りバンドだ！”なんて思ったけどね。とても影響を受けたアルバムさ。学校でキッスのロゴやキャラクターを描いていたら、結局クラス全員分描くことになったり。あれはとんでもない宿題だったな！

――ハハハ、でもクラスの人気者になれそうです。

そうだね（笑）。まぁ、キッス、アリス・クーパー、アイアン・メイデンの1stがそんな感じだったよ。『鋼鉄の処女』を聴いて、ヘヴィメタル・バンドをやって、ああいうドラムをやりたいと思ったんだ。

――そこからさらにパンクやスラッシュ・メタルへと進んでいったわけですね。

そう。もちろんラッシュなんかもとても人気があって、影響を受けたよ。最初はハードロックやプログレッシブ・ロックをたくさん聴いていたけど、高校一年生のとき、雑誌で新たなパンク・ムーブメントについての記事を読んだんだ。ダムドやセックス・ピストルズ、ストラングラーズなんかの写真が出ていて、その未来的なルックスにとても惹かれたんだけど、ケベックの北のほうではパンクのレコードを見つけるのが容易じゃなくって（笑）。

――80 年代は、まだそういう地域差がありましたよね。

やっとのことで『勝手にしやがれ!!』のレコードを見つけてね。聴いてみると、雑誌から想像したサウンドそのものだったよ。ギターの重ね方とか、トライバルなドラムとか、パーフェクトだった。ハードロックとプログレッシブ・ロックのミックスだった俺のスタイルに、あのタムの使い方が加わったんだ。

――先程話に挙がったモーターヘッドはどうでしょうか？

最初にモーターヘッドを聴いたときは、“エルヴィスのビートじゃないか！”と思ったものさ。“トッタトートタッ”てね（笑）。自宅のガレージでドラムを叩いていて、ヘヴィメタルを聴くようになる以前も、AC/DC みたいなのはわりとうまく叩けていて、そのあとにモーターヘッドやアイアン・メイデンみたいなバンドに出会ったという感じだ。1980 年から 82 年の間は、音楽は急激に変わっていて、アイアン・メイデンが出てきて、それから突然ヴェノムが現われた。その直後の 1983 年にはメタリカも出てくるし。

――楽曲のスピードもドンドン上がっていきましたね。

全速力のツーバスのアプローチは少々難しくて、『ウォー・アンド・ペイン』（1984 年）では正直あまりうまくやれなかったけど、『Rrröööaaarrr』（1986 年）ではかなり速いツーバスが踏めていると思う。当時みんながもっと速く演奏しようと頑張っていて、突如スレイヤーや D.R.I. なんかも現われて……スゴく速かったよね。もちろん今はナパーム・デスなんかもいるし、グラインドコアは進化型だろうけれど、あれはまた別の流派だから。

――ちなみに、自身のアルバムのなかで特にお気に入りを挙げるとしたら？

やっぱり常に最新作が一番好きだよ。クラシックなものから挙げるとすれば、俺の心に残っているのは、ハードコア、プログレ、そしてヘヴィメタルのアプローチが全部ミックスされている『キリング・テクノロジー』かな。それにあのアルバムは、冷戦やチェルノブイリの原発事故やチャレンジャー号の爆発事故とか、当時の雰囲気をとてもよく表わしているから。

――デビュー作よりも？

『ウォー・アンド・ペイン』と『キリング・テクノロジー』のどちらを選ぶかは難しいけどね。『ウォー・アンド・ペイン』は最新作がお気に入りというのと同じように、デビュー作ということもあって、ものすごく誇りに思ってはいるけどさ。

――そういった話を聞いていると、いよいよライヴで聴きたくなります。2020 年には日本公演が予定されていましたが、残念ながら中止となってしまいました。新作とともに来日を待っているファンにメッセージを！

俺たちの日本でのショウは、ずっと延期を繰り返しているからね。ニュー・アルバムが出たらワールド・ツアーをやって、北米、ヨーロッパ、日本、南米、オーストラリアと回りたい。今は祈ることしかできないけど、ライヴハウスでみんなに会えることを期待しているよ！

◎結成 40 周年！
15 枚目のスタジオ・フル作が発売中！

『シンクロ・アナーキー』
ソニー／ SICP-6442（通常盤）

Interview by Shinichi Takeuchi
Photo by Ryota Mori (P.36)、Daiki Miura (P.39、41)

OUTRAGE

アウトレイジ

丹下眞也

オリジナル・ストーリー映画とクラシックとの共演で駆けるアウトレイジ、デビュー35周年！

デビュー35周年を迎えたアウトレイジが、なにやら騒がしい。4月20日には35周年記念アルバム『SQUARE,TRIANGLE,CIRCLE & FUTURE』をリリース。既発曲に新曲2曲やレア音源なども加えたコンピレーションだが、実は、映画『鋼音色の空の彼方へ』のサウンドトラックとしての役割も持つ。その映画というのが、なんと彼らをモチーフとした作品なのだ。さらに、4月24日には[Zepp Nagoya]にて35周年記念特別公演《OUTRAGE & Outrageous Philharmonic Orchestra》も開催。ここでは、セントラル愛知交響楽団との共演が予定されている。アニバーサリー・イヤーを華々しく駆けるバンドを代表して、丹下眞也に現在の思いを聞いた。

■デビュー 35th 記念アルバム
『SQUARE, TRIANGLE, CIRCLE & FUTURE』
ユニバーサル／ UICN-1109 ※4月20日発売

友達と遊ぶことが、バンドへの活力につながることもある。そこを切り捨てて東京へ行くのが嫌だった。

映画はアウトレイジの歴史も描きつつ同時に別のストーリーも描いている。

――今年はデビュー35周年ということで、いろいろなトピックがありますが、まずは映画『鋼音色（はがねいろ）の空の彼方へ』を作ることになった経緯を教えてください。

伊藤政則さんとアウトレイジの今後について話をしていたら、突然“映画がいいよ！”って言われたんですよ（笑）。最初は何を言ってるんだ？って思ったんですけど、曰く“これからはプロモーションの切り口を変えていかないと。アウトレイジはおもしろいことをやるバンドだと、世間から捉えられたほうがいい”と。ほかのメタル・バンドがやらないことにどんどん挑戦していくべきだっていう提案だったんです。でも、じゃあ、どういう映画なんだって“？”のままでしたけど（笑）。

――確かに（笑）。

ただ、自分が“？”と感じたってことは、たぶんほかの人も“えっ？　アウトレイジが映画？”って言うと思うんですよ。ということは“おもしろいことをやっているバンド”ってことになるんじゃないかと。

――バンドで映画というと、いわゆる音楽ドキュメンタリーを想像しますが、今回の『鋼音色の空の彼方へ』はフィクションの物語ですよね？

ドキュメンタリーとしては、以前『シャイン・オン -トラベローグ・オブ・アウトレイジ-』を作ったんで、同じことをやるわけにはいかない。でも誰かがアウトレイジを演じてバンドのヒストリーを語ったとしても、それもドキュメンタリーには勝てないと思うんです。それに、アウトレイジのことを知らなくても映画自体を楽しんでもらえる内容にしないといけない。だったら脚本家をつけるべきだよねってことになって。

――そこが出発点なんですね。

脚本が上がってきたら、アウトレイジの歴史も描きつつ、同時に別のストーリーも動いているという内容で、メンバーとしても“これはおもしろいんじゃないか”と。

――アウトレイジのメンバーを演じることになった若者たちの成長を描いた群像劇でもあるので、確かにバンドのことを知らなくても映画は楽しめますよね。

簡単に言ってしまえば、アウトレイジの歴史を描いている部分以外は青春コメディなんで、僕らのことを知らなくても楽しめると思いますし、バンドを知ってもらう機会にもなるかなと思っています。SKE48の末永桜花さんも出演しているので、彼女のファンの方は、アウトレイジが実在するバンドだとは思わないかもしれないですよね（笑）。

――予備情報まったくナシで映画に行った出演者ファンの方々は（笑）。ただ、演じている役者さんたちの佇まいは、本人たちにとても似ているなと感じました。

映画のなかの４人のキャラクターは、脚本家の方が僕らにインタビューをしたうえで、それぞれの性格も反映させて描いてくれたんです。劇中で丹下役の＜山内＞という青年はアイドルに惚れちゃうんですけど、それは自分が若い頃、惚れやすい体質だったのを取り入れているんですよ（笑）。

――映画で描かれたような、淡い恋物語は実話なんですか？

そこはフィクションです（笑）。でも、いかにも自分が体験しそうだなって。

――では、気に入らないバンドのステージに爆竹を投げ込んだというエピソードは……。

しないですよ（笑）。そういうバンドには、MCのときにブーイングをしてましたけど。若い頃にいろいろ悪さをしたっていう話が飛躍して、そういう風に描かれているんです。

――メンバーの自宅に集まって練習するシーンがありましたけど、あれは？

あれは実話です。僕の家で練習をしていました。四畳半のアパートにひとり暮らしだったんで、親の目を気にせず練習できたんですね。前日に“明日までにリフを作ってくる”みたいな宿題を決めて、うちに集まって誰かが作ったリフに合わせてみて、翌日はスタジオでもう一度やってみる……みたいな。映画で描かれた僕らのエピソードは、フィクションではあるんですけど、まったく架空というわけではなくて、事実をもとにデフォルメして描かれているという感じですね。

――上京せずに、名古屋で活動をしていくと決めるシーンも印象的でした。映画のように全員で話し合って決めたんですか？

いや、４人で集まって話したりはしなかったんじゃないかな。ただ、あの場面でメンバーが語っている心情は、本当の気持ちです。東京で４人での共同生活っていう提案だったんですけど、それには全然ピンとこないというか、なんで名古屋じゃいかんの？っていう気持ちでしたね。例えば新作をリリースするときに、取材で東京に行くのを面倒だと思ったこともないですし……やっぱり、４人で共同生活はキツいですよ（笑）。プライベートもなにもなくなるじゃないですか。

――毎日集まって練習する間柄でも、やはりそうですか。

別にメンバーのことが嫌いだとか、そういうことじゃないですよ（笑）。ただ、24時間ずっとバンドと向き合っていて、果たしてバンドへ向けるエネルギーが出てくるのかってことですよ。友達と遊びに行ったりすることが、バンドへの活力につながることもあるんで、そこを切り捨てて東京へ行くのが嫌だったんです。

他人が自分を演じるのはこっぱずかしい。でも自分にしか見えてこなくなった。

――劇中にはバンド演奏のシーンもありますが、“丹下さん役をやることになった山内”という青年を演じた秋田卓郎さんに、ドラムのレクチャーはしたんですか？

ドラムの叩き方がまったくわからないということで、１日一緒にスタジオに入りました。彼はダンスもやっているそうで、“こんな風に叩くんですよ”ってちょっと教えたら、すぐにできるようになって。ダンスの振付みたいな感覚なんでしょうね。役者さんって、人の特徴をつかむのが上手だなって感心しました。

――名古屋の地下街に泊まり込むシーンでは、丹下さんもカメオ出演されていて。

出演ってほどのものでもないですよ

（笑）。昔はオンラインでチケットが買えたわけじゃなかったんで、プレイガイドに並んだんですよね。だから学校を休んで、1週間くらい前から交代しながら並ぶわけです（笑）。“今日は俺が休んで並ぶから、明日はお前、頼むね”って感じで。

――それにしても、1週間前は早いですね！

確かに1週間も前から並ぶ人なんていないんですけど、2日前くらいになるとほかの人も現われるんです。で、ひとりで何枚もチケットを買うのも悪いから、2日前くらいからはメンバーみんなで集合して。映画では地下街でしたけど、実際は外に並んでいて、ガスコンロ持っていって鍋をやったりラジカセで音楽を聴いたり、ギターを弾いたり……。

――ワンパクな（笑）。

それで、阿部（洋介）がギターを弾いていたら、“ちょっと弾かせてよ”っていうお兄さんが現われたんです。その人はアクセプトを弾き出して、まだ2ndアルバムが出たくらいの時期だったんで驚いたんですよね。のちのち、聖飢魔Ⅱのジェイル大橋さんとお会いしたときにこの話をたまたましたら、“それ、俺！”って言われました（笑）。

――類は友を呼ぶんですね！　総合して、完成した映画の感想は？

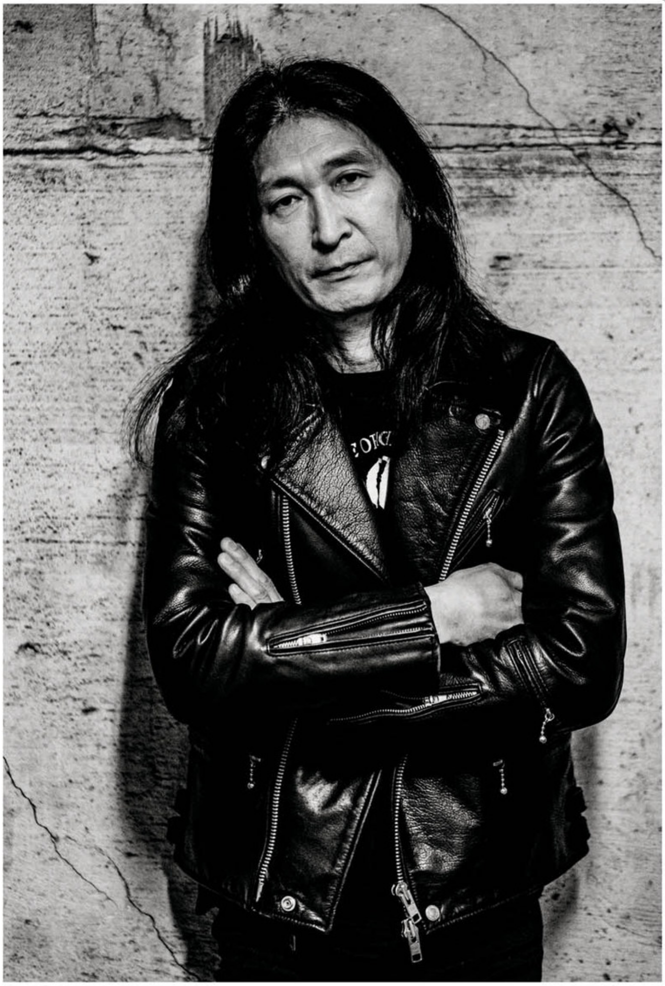
正直、こっぱずかしいです。ドキュメンタリーであれば、自分が自分の言葉で話しているんでそうは思わないんですけど、ほかの人が自分をやっているというのは、どうもね（笑）。

――ご自身では似ていると思いました？

撮影も何度か見に行ったんですけど、見ているうちに、自分にしか見えてこなくなりました。

――当時のことを思い出したりも？

アパートで曲作りをしていたシーンなんて、懐かしいなと思いました。再現度は高いですね。最初にも言いましたけど、バンドにしても監督、脚本家にしても、アウトレイジを知ってもらうことと、バンドを知らない人でも楽しめる作品にすることが目標だったので、それは達成できたんじゃないかと思います。



ビートルズをイメージした新曲は いい意味で期待を裏切れたと思う。

――4月には、35周年を記念したアルバムであり、映画で使われた楽曲を収録した『SQUARE, TRIANGLE, CIRCLE & FUTURE』がリリースされます。2曲の新曲は、映画をモチーフに作ったものなんですか？

「Phycho flowers」はNAOKIが作った曲で、彼の話を聞く限り、特定のシーンをイメージしたわけではないということでした。バラードの「Summer Rain」は自分と阿部で作った曲で、これは映画のワンシーンを思い浮かべて作りました。そもそも“このシーンに使う曲を作ってください”という依頼があったんです。

――映画のクライマックスで使われていましたね。パワー・バラードというか、今までのアウトレイジにはなかったタイプの曲ですよね。

正直に言うと、ザ・ビートルズをイメージして作りました。今までも、自分が影響を受けた音楽を思い浮かべながら曲を作ることはあったんですけど、ビートルズは初めてですね。そういう意味では、トライでもあり。

――35年のキャリアにして、これまでになかったタイプの曲が生まれるというのは、なかなかすごいことだなと思います。

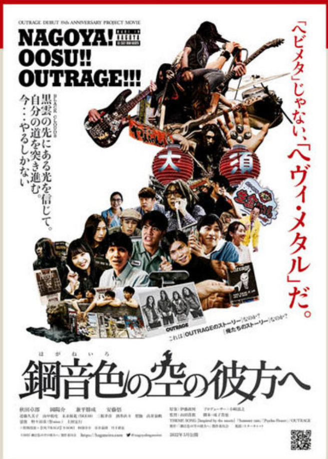
やっぱり、映画のシーンを思い浮かべて作ったからだと思います。そういう経験は、これまでになかったですね。曲を作っているときは、映画の撮影が始まったばかりだったんで、台本を読みながら、こんな映

映画『鋼音色の空の彼方へ』が5月公開！

アウトレイジの35年におよぶヒストリーを追った伝記映画……ではなく、アウトレイジの伝記映画に出演することになった4人の若者の成長を描いた青春群像劇。この『鋼音色の空の彼方へ』は、そんなちょっと複雑な構成を持つ作品だ。

ヘヴィメタルを愛するプロデューサー・朝倉みどり（近藤久美子）の発案で、アウトレイジの伝記映画の制作がスタート。丹下眞也役にサブカル俳優・山内聡（秋田卓郎）、NAOKI役にネット配信歌手・前田徹（岡陽介）、阿部洋介役に若手芸人・佐久間駿（兼平勝成）、安井義博役に新人俳優・加藤優馬（安藤悟）がキャスティングされるが、彼らはバンドに興味がなく、しかもそれぞれに悩みや問題を抱えていた。そんな彼らは、ひたむきに音楽と取り組むアウトレイジを演じるうちに、いつしか自分と向き合うようになっていき……。

あくまでも本作の主題は主人公4人の物語。しかしながら劇中劇という形でアウトレイジの歴史がつづられていく。多少の誇張はあるも、基本的には実話に基づいたものなので、ファンであればニヤリとさせられることだろう。さらに、メンバーもカメオ出演しているので、彼らの“演技”にも注目だ。



◎2022年5月公開予定
オフィシャル・サイト>
https://haganeiro.com

像になるのかな？と自分の頭のなかでヴィジュアル化して、それに合う音を探すという感じで。

――文字から映像を想像して、と。

“おもしろいことをやるバンドになる”というのは、結局、いい意味で人の期待を裏切るということだと、自分は解釈したんです。想像を超えていくバンドってことですよね。アウトレイジに何かしらのイメージを持っている人からすれば、「Summer Rain」はそれをうまく裏切ることができたんじゃないかなと。

――また、レコーディングはなかなかに大変だったそうで。

名古屋でやったんですけど、大変だったというか……「Summer Rain」は歌のメロディも自分が作ったんですけど、NAOKIの持っているメロディ感とは違うんで、最初はそこがフィットするというか、彼が僕の作ったメロディを噛み砕いて自分のなかに取り込むのにちょっと時間がかかりました。普通は1曲につき半日くらいで終わるんですけど、今回は2日くらいかかっているので。

――ドラム録りに関しては？

特に苦手なタイプの曲でもないので、それほど時間はかかりませんでした。実は「Summer Rain」はドラムにもイメージがあって、音もスタイルも似ていないですけど、コージー・パウエルがバラードを叩くのをイメージしながら録音しました。例えばMSGの「ネヴァー・トラスト・ア・ストレンジャー」とか“バラードなんだけど、ぶっ叩いている”……そんなイメージでできたらなと思って。

――「Phycho flowers」のドラムは？

NAOKIは“同じパートが二度と出てこない、コラージュ的な曲にしたい”と思って作ったらしいんです。なので曲の構成も複雑で、パッと聴くとわからないでしょうけど、数えてみると小節数もヘンなんですよ。だから全然覚えられなくて（苦笑）。仕方ないので、セクションごとに録りました。一応、通して叩くんですけど、うまくいかなくなったら、またそこから録るみたいな。コラージュ的な曲なので、セクションごとに録っても違和感はないかなと。

――新曲に加えて、既発曲も収録されていますが、この選曲はどのように？

映画で使われた曲を入れました。なので、ベスト・アルバムともちょっと違うんですよ。映画を観ていて気づいたんですけど、歌がある曲だとセリフとかぶっちゃうんですよね。だから歌のないパートが使われていたりしていて。監督もきっとそういう観点で曲をうまく使ってくれたんだと思います。バンドの意見が入ると、きっとおもしろいものにはならないと思うんです。音楽も自由にやってほしいし、“本当は爆竹なんて投げてないよ”みたいなことを言い出しちゃうと、映画が成立しないような気がします。

――アルバムには、1985年のデモ音源「Under Control Of Law」も収録されています。

多分、19歳くらいのときに録ったんだと思います。まともにレコーディングするのは初めてだったんで何もかもが新鮮で、正直わけもわからずやっていましたね。

――ただ、そういったレコーディングは絶対に忘れないですよね。

ひとつ、すごく印象に残っていることがあって。エンジニアの方に“最終的にどんな音にしたいの？”って聞かれたんで、『ライド・ザ・ライトニング』を持っていったんです。“こんなイメージです”って聴かせたんですけど、“へえ～、こういうのがあるんだね”って……メタリカ知らなかったみたいで（笑）。

自分の人生に退屈しないためにも常にトライしていきたい。

――4月24日に［Zepp Nagoya］で開催される35周年記念ライヴでは、オーケストラであるセントラル愛知交響楽団と共演します。

▲NAOKI(vo)、阿部洋介(g)、安井義博(b)、丹下眞也(d)／L to R

共演パート、アウトレイジだけのパート、オーケストラだけのパートの三部構成にしたいと思っています。昨年リリースした『RE:prise ～ The Final Day 30th Anniversary』に、オーケストラによる『The Final Day』の演奏を収録したんですけど、それを生で聴いてほしいなと思って。もちろん、バンドだけのライヴも見せたいし、共演もしたいですし。

――オーケストラとの共演となると、お互いの音量感など、ステージ上の音はまったく別物になりそうです。

まだリハをやっていないのでなんとも言えないんですけど、"ステージの中音はむちゃむちゃ下げないと無理"とは言われています。ドラムは下げようがないのでアクリル板を立てる予定で、ベースは音量を極力下げて、ほぼゼロになるんじゃないかと。

――指揮者もいるんですよね？

いますけど、僕らに合わせて指揮をしてくれるんですよ。"ライヴではクリックを使わないんで、気分によってテンポが変わりますよ"って指揮者の方に伝えたら、"なんとか合わせます！"って言ってくれました（笑）。ドラムが指揮者から遠いと合わせられなくなっちゃうんで、できるだけ近くにセットする予定です。

――モニターはイヤー・モニターを使うんですか？

ほかの3人は使う予定ですけど、僕はどうしようかと。これまで使っていなかったので、去年のライヴで練習がてらやってみたんです。メンバーのなかでは"やりやすい派"と"やりづらい派"に分かれていて、自分は後者ですね。物理的にも邪魔ですし、4人のフィーリングで合わせるというか、その場の空気感で調節できることができなくなっちゃうんですよ。慣れれば解消できるんでしょうけど、2～3回使っただけでは慣れませんね。

――まだまだクリアすることは多そうですね。また、以前には"世界中の楽器とコラボレートしたい"と言っていましたが、オーケストラとの共演は、そういう発想から生まれたものですか？

そうですね。最初はそのアイディアを提案したんですけど、実現させるにはなかなか難しくて、それで、いろいろ話していくなかでオーケストラに決まったんです。でも、まだあきらめていません。ちょっと前に愛知県の《あいち文化芸術Studio》という配信サイトで、日本舞踊の家元（西川千雅）とコラボレートしたんです。昔ならきっとお断りしていたと思うんですけど、今は何でもやってみたいと思うようになっていて。若い頃にそういう気持ちがあったら、やれていたことがいっぱいあっただろうなと思いますけど……若い頃は興味の対象がそこまで広くないから仕方ないのかもしれませんけど。

――その年代ごとに、興味を持つ対象も違ってきますからね。

今までやったことがないことに挑戦すると、"こんなこともできるんだ"って自信になりますよね。これからも、頭で考えずに"何でもやってみよう"というスタンスでいきたいと思います。ここ数年のアウトレイジの活動にも、そういうアティテュードが出てきていると思うんです。

――まさに、35周年のプランはどれもそう言えそうです。

メンバーみんな、そういったチャレンジができる年齢になったんでしょうね。阿部なんて、ライヴハウスのセッション大会で歌ってるみたいなんですよ（笑）。逆に言えば、新しいことに挑戦していかないと、どこに向かって行ったらいいのかわからなくなったりもするんじゃないかな。35年もずっと同じことをくり返していたら、何の刺激もないと思う。バンドとしても個人としても、いろいろなところにチャレンジすることで刺激を得て、そのエネルギーがバンドに還元される気がします。バンドに退屈しないためにも、自分の人生に退屈しないためにも、常にトライしていきたいですね！

Interview by Wang YanRong
Photo by Takahide "THUNDER" Okami

CROSSFAITH

Koie × Teru

常に"最強のサウンド"を求めているCrossfaithは、その音楽性のとおり、近代ヘヴィ・ミュージック・シーンのなかでも圧倒的な刺激を放つ存在である。昨年には15周年を迎え、このパンデミックでも屈せず、ライヴ活動はもちろん、音源も次々とリリースしている。『刃牙』とマッチアップした新曲「Gimme Danger feat. ralph」もそのひとつで、これまでにも多くの人気作品とコラボしてきた彼らは、普段ハードな音楽に触れない人々にもインパクトを与え、着実にオーディエンスの層を広げている。

そして今夏には2年ぶりとなる海外公演も発表し、まさにコロナ・ウィルスをぶっ飛ばす勢いで独走するCrossfaith。これからはどんな"最強シーン"を見せてくれるのか、それは彼らについて行けばわかることだ。

『Gimme Danger feat. ralph』
Species Inc. ／配信のみ

◀インタビューでもあるように、彼らの地元大阪は堺のライヴハウス[三国ヶ丘FUZZ]を貸し切って作曲が行なわれた。左写真のように、フロアにサンプラーやドラム機材が組まれ、ライヴハウスならではの空間やグルーヴを感じながら曲を作りあげたという。

ライヴハウスにテントを持ち込んで泊まり込みで曲を作ったりしていた。──Teru

──去年10月に「Feel Alive」をリリースしてから、4ヵ月というスパンで新作「Gimme Danger feat. ralph」ができあがりました。曲作りやレコーディングには、あまりコロナの影響はなかったということでしょうか？

Teru　コロナの影響でレコーディングが押したということはなかったです。むしろツアーがない分、じっくりスタジオに入ることができましたね。

──レコーディングはスムーズに進んだんですね。では曲作りも変わらず順調に進んだという感じですか？

Teru　そうですね。でも今回の曲作りでは、今までとはちょっと違ったやり方をしていて。俺たちは大阪の堺が地元で、そこには高校生のときに初めて出たライヴハウス［三国ケ丘FUZZ］があるんですけど、“そこを貸し切って曲を作ってみいひんか？”とメンバーに提案したんです。それで地元に戻って、10日間くらいライヴハウスを押さえて新曲作りをしましたね。

──それは珍しいですね！　ちなみに、そのライヴハウスはどれくらいのサイズ感なんですか？

Koie　200人くらい入ったらパンパンになる小さめのライヴハウスなんです。堺にはそんなにライヴハウスはないけど、KANA-BOONとかヤバイTシャツ屋さんとか、あそこ出身のバンドはけっこういるんですよ。まぁ、俺らのほうが前からやっていたけど（笑）！

──ハハハ、CrossfaithがFUZZの出世頭ということですね。ライヴハウスで曲を作ると、やはり違いますか？

Teru　例えば俺だったらステージじゃなくて、フロアにキーボードをガッツリ組んだんですね。そうすることで外音を聴きながらみんなでセッションができる状態になるんです。ほかにもライヴハウスなので24時間音が出せるから、テントとか持ち込んで泊まり込みもしたり。

──そこまでしたんですか！

Teru　バンドにはCD音源としてのゴールもあるけど、ライヴで披露するというゴールもあって。そういう意味ではライヴハウスで曲を作ったほうがゴールにたどり着くまでが早いし、おもしろみもあったんですよね。

──そういう違いもあるんですね。シンガーとしても違うプロセスになりましたか？

Koie　基本、俺も爆音で音源を流しながら歌ったりするんで、そういう面においてはそこまで大差はないんですけど、大きい違いとしては、そこにメンバーがいるかいないか。“ヴォーカルはこういう歌い回しにしたいから、楽器のアレンジはこう変えてみない？”みたいに、早いレスポンスでできるところはいいですね。なによりライヴハウスで曲作りができるのはテンションが上がるし、メンタル的な部分がいいなと。

Teru　やっぱりライヴハウスにしかない空気があるもんな。

Koie　そう。テンポを決めるとき、ライヴハウスのスピーカーで空気感を一緒に聴けるのも大きかったと思います。

──なるほど。そんな特別な方法で曲作りをした本作は、ラッパーのralphさんとのフィーチャリング曲でもあります。これはどういった経緯から？

Teru　昔『ラップスタア誕生』を見てralphのことを知っていて。以前にもラッパーのJin Doggと「None of Your Business」というフィーチャリング曲も出しているので、ralphとも一緒に曲を作りたいという構想はけっこう前からあったんですよ。

Koie　しかも彼はイギリスのグライムとかに影響を受けていて、どっちも世界を見ているから一緒にやりたいなと思いましたね。

Teru　彼自身は“No Flex Man”のスタイルがしっかりしていて、スゴく尖っているんですけど、自分の芯もしっかりしているし、そういう姿勢ってめっちゃメタルだなとも思ったんですよね。そんなralphと俺たちがぶつかったら、もっと尖っているものができるだろうなという確信があったんです。

──実際にラップとハード・ミュージックを掛け算させる場合、お互いどれくらい相手に近づいていくものですか？

Koie　最初ralphは“あれだけ音が鳴っているなかに低音のラップは入るんか？”って、若干心配していたんです。でも俺たちは“いけるっしょ！”と思っていて、実際にファースト・デモがきたときに“ね！”と（笑）。

Teru　俺たちメタル・バンドがヒップホップに寄せて、ralphが歌いそうなトラックを演奏しても、それは掛け算じゃないと思うので。だから今回は、あえてラップが乗らないであろうBPMにもしたんです。ドラムのフレージングもそうだし、音色や音数もそうですよね。自分たちの音を貫くほうがオモロイし、ralphだったらそこにもノッかれるだろうと信じていましたから。彼自身も“全然やるッス”って。

──まさに“異種格闘”ですね！

Teru　そうなんです。だから『刃牙』のキャンペーン曲の話をもらって、“違うジャンルのアーティストと一緒に曲を作ってくれないか”というオファーがきたときは、すぐ“ralphやん！”と思いましたね。

俺たちに合うマンガって限られているけど、『刃牙』はそのひとつだなと。──Koie

──今話に出たように、「Gimme Danger～」は人気マンガ『グラップラー刃牙』シリーズ（以降：刃牙）のキャンペーン曲にもなっています。曲作りでは原作を意識したりも？

Teru　Crossfaithのスタイルはもともと“圧倒的”で“最強”を

求める音楽性なので、それは自然とリンクしていたと思いますね。
Koie 刃牙というフレーム自体が、俺たちの音楽を許容できるような受け皿だったので、そこが合致したという感じですね。
――では、実際にオファーがきたときは"よく見て選んだじゃないか"という感じですね（笑）。
Koie めちゃくちゃテンションが上がりましたね……"刃牙!?"って（笑）。Crossfaithの音楽に合うマンガやアニメって限られてくるので、刃牙はそのなかのひとつかなと。
Teru 俺、めっちゃ好きですから！
Koie Teruは中学生のときから烈海王に憧れて、よく公園に行って上半身裸でハイキックの練習をしていたよね。
Teru 好きッスね（笑）！ それこそジャック・ハンマーも好きやし、愚地独歩も好きやし……キリがないですね。
Koie 俺は花山薫が好きですね。最近ちょうど読み直していて、改めてすごくアツい漫画だなって。小学生や中学生のときって絵がちょっと受けつけないじゃないですか。むしろ今見ても、最初のほうはめっちゃクセが強いなと思いますし（笑）。でも、読むとめっちゃモチベーションが上がるんですよ。
Teru 男は絶対好きやしね。なんならメタルを聴いて強くなった気分とけっこうリンクするんですよ。精神的に強くなるところは、メタルとめっちゃ相性がいいと思います。
――まさにCrossfaithとの相性もバッチリじゃないですか！ ところで今までにもマンガなどとのタイアップをやってきましたが、そのときも原作は意識せず？
Koie 作品によりますね。「RedZone」はガンダムのゲーム『機動戦士ガンダム エクストリームバーサス2 クロスブースト』の戦闘中のテーマ・ソングだったんです。メンバーは全員ガンダムを通っているので、作っているときに"発進するぞ、発進するぞ！"という曲調に持っていったり、歌詞も寄せた部分はありました。そこはわりと作品によってフレキシブルに変わっていくと思います。
Teru そのときはパイロットになりきったもんな（笑）。「RedZone」と「Dead or Alive」（※第1回『ONE PIECE』キャラクター世界人気投票《WT 100》のタイアップ曲）のときは、タイアップと掛け算になるからおもしろいと思っていて、俺らだからこそ出せる音も大事にしながら曲を作りましたね。

国内のツアーでガソリン満タンにして、海外のフェスで大暴れをする! ――Teru

――さて、今作に合わせて、ralphさんと全国5都市を回るツアーが発表されました。どういった構成になりそうですか？
Koie 俺たちのショウの一部として、ralphが出てくるパートがあるということですね。やっぱり「Gimme Danger feat. ralph」が今回のツアーにおいてもひとつのハイライトになるし、そこはただ1曲をやるだけで終わりにするのはもったいないなと思っているので。だから全公演一緒に来てもらって、Crossfaithのファンにもralphという人物がどういうアーティストなのかをちゃんと伝えたいんですよ。そう見せられるようなショウになると思います。
――きっとCrossfaithファンにも受け入れられると思います。

やっぱりCrossfaithとしては海外でやりたい気持ちもある。 ――Koie

ちなみに、今後バンドだけで「Gimme Danger」を演奏する場合、ラップ部分はKoieさんが担当することになるんですか？

Koie　そのへんのことも考えているんですけど、俺だけのバージョンでも完結できるとは思います。ralphが歌っている部分に自分の歌を乗せるかもしれないし、もしかしたらメンバーに歌ってもらうことになるかもしれないですし。

Teru　俺は逆もおもしろいなと思っていて。バンド演奏じゃなくて、ralphのショウケースにKoieが参加するみたいな。

――それもおもしろそうですね！　また、6月には2年ぶりとなる海外公演を行なうことも発表されました。やはり、楽しみですよね？

Koie　楽しみな気持ちは当然なんですけど、やっと海外に行けるという気持ちが強いですね。もちろん日本でももっとツアーをしたいですけど、やっぱり俺たちのスタイル的には海外でやりたいという気持ちもあるので。2年間待ってくれている海外のファンのもとに戻れるのはうれしいですね。

――海外公演は7月に一旦区切りになりますが、その後の予定というと？　例えば新作を出したり……？

Koie　まあ、鋭意制作中という感じですかね（笑）。楽しみにしていてもらえればという感じです。年内に何らかのアナウンスができると思います。

Teru　あるのかな～！？

Koie　頑張るしかないわ。作りたい、出したいという気持ちはあるので、そこに向けてやっていきたいですね。

――それを楽しみに待ちつつ、まずは国内ツアーでガツンとファンに一発喰らわせる感じですね！

Koie　そうですね。今回のツアー・タイトル《ATLAS OF FAITH : NEW FRONTIER》は“新たに開拓していく”という意味なので、今まで呼んだことのない新しいアーティストをゲスト・アクトに呼ぼうという動きもしているんです。そのときはいろいろなメタルの系譜をたどっているメタル・ヘッズの皆さんにも、ぜひCrossfaithのライヴを観に来てほしいですね。

Teru　年内唯一のツアーになるというのもあるし、今回は去年やった15周年ツアー《15th ANNIVERSARY TOUR - ATLAS OF FAITH -》の延長線上でもあるんです。前回のツアーでは表現しきれなかったCrossfaithの歴史＋ralphとのスペシャル・ショウケースだったりと、より未来につながるようなツアーになると思います。そのツアーでガソリン満タンにして、海外のフェスで大暴れをするというタイムラインになっているんで、今年もバッチリ暴れ散らかそうかなと思っています！

4月に全国ツアーを開催！
《ATLAS OF FAITH : NEW FRONTIER》

4月15日（金）Zepp Nagoya
4月23日（土）Zepp Sapporo
5月 8日（日）Zepp Haneda
5月13日（金）Zepp Fukuoka
5月15日（日）Zepp Osaka Bayside

※スペシャル・ゲストとして全公演にralphが帯同。また各公演にはそれぞれゲスト・アクトも出演予定。詳しい情報はHPにて。▶http://crossfaith.jp

Crossfaithのスタイルは“圧倒的”で“最強”を求める音楽性。――Teru

CROSSFAITH × DENON AH-C830NCW

前ページのインタビューでもわかるように、そのサウンドには並々ならぬこだわりを持つKoieとTeru。そんな彼らを驚かせたのが、オーディオ・メーカーの老舗、デノンが新たに発表した初の完全ノイズ・キャンセル機能搭載のワイヤレス・イヤホン[AH-C830NCW]だ。今回は自身の楽曲を含むさまざまなヘヴィ・ミュージック＋αを試聴したふたりに、本機の個性をレビューしてもらおう！

AH-C830NCW
価格：オープン・プライス（市場実勢価格：14,850 円）

□おもな仕様
●ドライバー：11 × 10mm ダイナミック・ドライバー
●重量：5.3g（片耳）、43g（ケース）
●駆動時間：約 6 時間（音楽再生のみ、本体のみの場合）
●充電時間：約 2 時間
●最大ペアリング数：8
●内蔵マイク：あり
●付属イヤー・ピース：3（S ／ M ／ L）
●カラー：ブラック、ホワイト

機種解説：菊池真平

シャープな輪郭と深みのある低音 デノン初の完全ワイヤレス・ノイズ・キャンセル・イヤホン

ハイエンドからエントリー・クラスまで、幅広いユーザーが求めるオーディオ機器を開発し続ける“デノン”。今回、アクティブ・ノイズ・キャンセリングを備えた完全ワイヤレス・イヤホン［AH-C830NCW］が新たに発売された。

本モデルには、デノンのサウンドマスターが試聴と調整を繰り返して開発したという、大口径ダイナミック・ドライバー（※ 11 × 10mm）を搭載。ライヴのような臨場感、そして立体的のあるサウンドが魅力となり、音の輪郭はボヤけることなくシャープに立ち上がる。また深みのある低域も、自然で量感があるのだ。このあたりにデノンの技術力の高さが表われていると言えるだろう。

ノイズ・キャンセリング機能は、［AH-GC30］などのノイズ・キャンセリング・ヘッドホンを手がけたエンジニア・チームが開発。次世代のアルゴリズムとフィードバック＆フィードフォワード・マイクを用いて、外来ノイズを消去。もちろん、静かな場所でリスニングする場合はオフにでき、また周囲の音をミックスする機能もある。

本体はわずか 5.3g と軽量で、長時間のリスニングでもストレスがない。日々のメタル・リスニングにお薦めのモデルである。

■メーカーからのメッセージ
山内慎一／デノンサウンドマスター

当然のことながら弊社では特定の楽器やジャンルなどに特化した音作りをしているわけではありませんが、無難で平均的にならず、常に鮮明にソースの良さを発揮できるよう心がけています。

メタル系の音楽をより楽しむには、表現やプレゼンスに切れ味があることが重要だと思い、そういう意味で今回の製品はとても適しているように考えます。例えば低音ひとつとっても単に量が多いだけではなく、音数が多いときや重なった際に分離が良く、心地いいエッジ感を伴い再現することも心がけたポイントのひとつです。

またオープンなスペースのなかにあって、音像がシャープにフォーカスするという要素は弊社すべての製品で実践しているコンセプトで、スリリングな音響の世界へと自然に没入していけると考えています。

▶ルックス＆装着感

Koie　そもそもデノンの製品を使っているだけで“コイツ、音のことわかってるやん”ってなりますよね（笑）。

Teru　そうそう、“ちょっと音楽知っているな”みたいな（笑）。

Koie　そしてこの［AH-C830NCW］ですけど、すごいコンパクトで、ケースのつや消し感もいいですよ。プラスチックの素材感がチープに見える機種もよくありますけど、これはテカリ感もあって、デザインに無駄がない感じがします。

Teru　実際に付けてみると、ビックリするくらい好きな装着感でした。そもそもワイヤレス・タイプって、しっかり耳にフィットしないと低音感や定位感がスカスカになっちゃうじゃないですか。これは付けただけでちゃんと音の定位感もわかるし、ローのむっちゃ気持ちいいところも聴こえてくる。

Koie　しかも小さくて軽くて。俺はイヤホンを付けっぱなしにしていることが多いんですけど、寝ていたり頬杖をしても圧迫感がないのに装着感はしっかりあるのがいい。

Teru　ライヴ前に聴くことも多いから、走っても取れないかとか、そういうところも気になりますね。これは頭を振っても、しっかりフィットしている印象です。

▶ノイズ・キャンセル機能

Koie　以前は“ノイズ・キャンセルいる？”みたいな感じだったんですけど、いざ外で使ったら、その後は普通の機種は使えない。車や電車のなかとかすごく気になって、ノイズ・キャンセル機能は手放せないです。

Teru　ただモデルによってはけっこう真空状態みたいになるんですけど、これはめっちゃ自然やわ。しかもアンビエント機能で外の音も取り入れながら音楽を聴くこともできるので。誰かと会話をしたり、お店に入ったときとかにも便利だと思いますね。

▶ヘヴィ・ミュージックを試聴！

Teru　低音がしっかり鳴るんで、俺たちみたいな激しいサウンドの音楽にスゴく向いていると思う。

Koie　メタルにおいて低音の処理はすごく大事で、モコモコすぎたらわからなくなるけど、これはソリッドな低音がくるからツーバスとかもすごく気持ちいい。ほかにもメタルのミックスってヴォーカルが小さいことが多いんですけど、これはヴォーカルもスゴく出てきてくれる。エンジニアのような人ならば、もちろん全体のバランスでっていうのがあると思うんですけど、やっぱり普通はヴォーカルをメインに聴く人が多いので。

Teru　宇多田ヒカルさんのキレイな曲も聴いたんですけど、それも臨場感とヴォーカルの存在感がよくわかって。定位が広いな、空間が広いなと、正直ビックリしました。引き込まれる息遣いがわかるというか、スゴく没入できる音になっている。

Koie　そう、定位感。ギターが“今左で鳴って、次は右で鳴ってる”とか、ライヴ感のある音で聴こえるんじゃないかな。

▶どんな人にお薦め？

Koie　デスコアでもガツンと来るし、ダンス・ミュージックでも気持ちいいところが出てくる……オールラウンダーとも言えますよ。価格帯のことを考えてもいい音が出ているので、例えば普段音楽を聴かない友達にも“これイイで”って薦めたいですね。

Teru　いろいろ聴いてみて、結局いいところが全部出ているから、あえてどのジャンルに特化してるという印象はなかったかも。ソリッドな低音はあるけど、キャラクターが誇張されてはいないから、自分好みにイコライジングして楽しみたいという人にもすごく向いていると思いました。いや〜、俺はもう乗り換えようかなと（笑）。

Koie　めっちゃエエやん！

楽器探しのアシスト・メディア デジマート・マガジン

デジマート・マガジンにて動画が公開！

Webサイト［デジマート・マガジン］では、Koie＆Teruによるリスニング動画を公開中！ Crossfaithを筆頭としたヘヴィ・ナンバーを始め、さまざまな楽曲を聴いた感想を語ってくれている。こちらもぜひチェックしてほしい！

◎デジマート・マガジンHP ＞ https://www.digimart.net/magazine/

METAL HAMMER JAPAN

Special Feature

YOSHIKI

METAL HAMMER JAPAN
Exclusive interview

Special Feature

Interview by Takahide“THUNDER”Okami

YOSHIKI
〜過激と美麗の先に

日本の……いや、世界の長いロック史に於いて、彼ほど過激に、そして美しく音楽を創造してきた人物はいるのだろうか。YOSHIKI……ハードロック／ヘヴィメタルをバックボーンに、ドラミングでは誰よりもアグレッシブなパフォーマンスを魅せ、そしてピアノにて絶世の美旋律を奏でる。その音楽性は、後続のミュージシャンに今もって多大な影響を与え続けている。

現在は米国を基盤にワールドワイドな活躍を見せているYOSHIKIだが、去る昨年11月､久しぶりの帰国を果たす。本METAL HAMMER JAPANは、彼が今思うリアルな言葉を聞くべく取材をオファー、快諾を得たのだった。

そこで語られたのは、コロナ禍における世界規模でのエンターテインメント業界の現状、そのなかでの音楽制作について、3年ぶりに行なわれることになるディナー・ショウ、そして待望のソロ作品についてなど、この機会でしか聞けない非常に貴重な話題ばかり。

激と麗､その極限を追求するYOSHIKIの､心からの声に耳を傾けてほしい。

Contents...

Interview-1
Talk about “UK Show”
——P.52

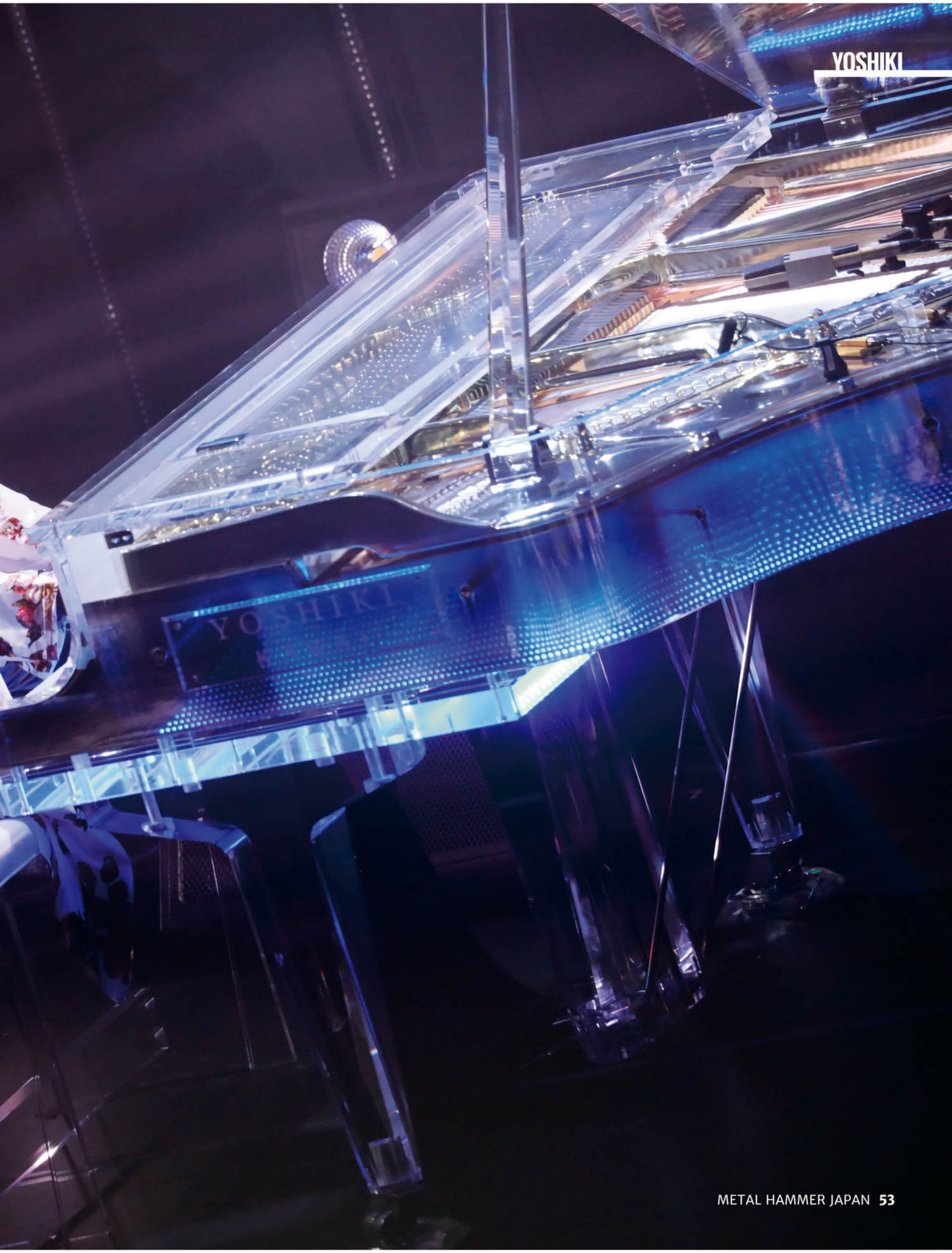
Interview-2
Talk about “Activities during Covid-19 situation”
——P.55

Interview-3
Talk about “Upcoming Rock & Heavy music”
——P.59

Interview-1
Talk about
"UK Show"

――弊誌『METAL HAMMER JAPAN』は、英国が本拠地のヘヴィメタル／ラウド・ミュージックの専門誌『METAL HAMMER』の日本版になるんです。YOSHIKIさんと英国との関係と言えば、まずはX JAPANでの［ウェンブリー・アリーナ］でのコンサートが挙げられますね。同ステージで、今でも思い出すシーンはありますか？

そうですね、あのときは2017年かな。とても印象に残っているショウで、コンサート自体長い時間やった気もします。僕が覚えているのは、即興でクイーンの「ボヘミアン・ラプソディ」を弾いたらみんなが歌ってくれたり、デヴィッド・ボウイの「スペイス・オディティ」を弾いたりしたこと。アンコールで僕がひとり


YOSHIKI

どの国の皆さんも熱狂的で、海外だからということは考えない。

で出てきて弾きまくったことを覚えていますね(笑)。

――日本のファンと英国のファンの違いを感じる部分はありましたか？

どの国の皆さんも熱狂的で、あまり“海外だから”ということは考えないでやっていましたね。それはバンドでもソロでもそうだと思うんですけど。

――確かにコンサートの模様を観ても、地域を問わず皆さん熱狂的ですよね。例えばリハーサルの進行であるとか、ステージの進行具合であるとか、そういった裏側の部分で日本と海外に違いはあるものですか？

ホールごとの違いというのはあると思います。以前、[マディソン・スクエア・ガーデン] でやったときは、“ショウを何時までに終えないと1分間につき100万円のオーバー・チャージが発生する”などということがありました。[カーネギー・ホール] でやったときも“何十分間押すと……”というような契約があるんですよね。ただカーネギー・ホールのときはすごくショウが良かったんですよ。本来であれば即刻会場から撤収しなくちゃいけないのに、“ゆっくり帰ってくれていいよ。大丈夫だから”と言われたのはすごく印象に残っています。

――いい音楽を第一に考えた、会場側からのお礼と計らいなんでしょうね。

そのときは感激しましたよね。そうは言っても、この楽屋を出るまでの時間というのは日本でもそうで、[東京国際フォーラム] でクラシックをやったときもそうですし、そういったコンサート・ホールごとの制約はありますよね。お客さんに向けてということで言えば、やはり僕はいつも全力投球なので。

――もうショウが始まってしまえば、海外の大きいステージでも日本のアリーナでもやることは一緒であると。

MC を、英語で喋るか日本語で喋るかっていう違いはあると思いますけど（笑）。

――ハハハ、確かにそういう違いもありますね。ちなみに、海外公演で好まれる曲というのはあるものでしょうか？

X JAPAN で最初の北米ツアーを回ったときに、歌詞を英語に訳してやったんですね。そうしたら“日本語で歌ってほしい”というリクエストがたくさん来まして。“ああ、そうなんだ”と。あえて英語に訳す必要はないんだって。曲によっては全部英語の詞の曲もあったり、日本語の詞の部分をあえて英語に訳したバージョンもあったんですけど、それも日本語で歌ってほしいというリクエストが多かったって……これもすごい印象的。

――例えば「紅」は以前から英語バージョンもありますが、やはりオリジナルである日本語バージョンで聴きたいという。

やっぱり皆さん“紅に染まった～♪”って日本語で歌いたいみたいで。

――その気持ち、スゴくわかります！

そうですよね（ニコ）。

Interview-2

Talk about
"Activities during Covid-19 situation"

――例えばアメリカでは2021年の9月にブロードウェイが再開されるなど、秋口から再びエンターテイメント・イベントが動き出しました。同国在住のYOSHIKIさんは、その状況を近くから見てどう思いましたか？　まだ早いのでは……などは感じましたか？

そうですね……ただ、一概には言えないですね。アメリカでもアーティストによってはショウをキャンセルしていたりもするので。ある種､積極的にやっていこうという人と、少し様子を見ているアーティストに分かれていたのかな。もちろん、どちらがいいとか悪いとかではなくて。そんななかで、僕としてはアメリカに限らず、日本の状況もどういう風になるのかな？って。

――アメリカに限った問題ではありませんからね。

ツアーって一度組むと、基本的には世界規模で考えるじゃないですか。この数年は特にそうで。でも今は"日本でやって、次はアジアに行って、ヨーロッパ、北米……"って、そういう風には組めなくなってしまったんです。みんなで喋っていると"今、どこの国は安全だ"という話題になるんですけど、基本的に僕は世界的に収束に向かわないと意味がないなと思っているんです。音楽のほかにもワインやファッションもやっているので、フランスなどにもチームがあるんですね。そうなると、今はフランスが大変だとか、アメリカは大丈夫だとか、日本は第五波の真っ最中だとか……どうすればいいんだろうって。今までは普通に世界中を飛び回っていたんですけど、そう考えるとなかなか動くタイミングが見つからなくて。今回、まずはディナー・ショウ開催の発表をしましたけど、これをきっかけに前に進んでいけるようになればと思って、このイベントの開催に踏み切ったということでもあるんです。

――確かにYOSHIKIさんのような大きな活動規模の場合、行く先は良くても戻って来れなくなるとか、そういうことが起こりかねません。

おっしゃるとおりです、本当に。

――そういったことを考えると、ワールド・ツアーのような国をまたいでの公演は、まだまだ１～２年は難しいのでは、とも。

空港でも飛行機に乗る前でも、ずっとPCR検査の連続なんですよね。それについて僕は賛成なんですけど、ただその後の隔離期間のこともあるので、世界ツアーを組むというのは、まだそんなに近い将来ではないような気はしています。わからないですね、近い将来にはそうなってほしいんですけど、まだ様子見なのかな。

――これは世界中の全員が高い意識を持って行動し、力を合わせてコロナを封じ込めるしかありませんね……。そんなコロナ禍というものは、YOSHIKIさんの創作意欲にとってどのような影響があったと考えますか？

創作活動自体、もともと孤独との闘いみたいなものがあるので、そこは自分的には意欲をなくしたというのは全然ないんですが。ただ……何て言うのかな……オーディエンスがいて合唱してもらうとか、

そういうことを考えながら書いた曲もあるんです。今は、やっぱり“配信”というのもスゴく大事になってきたじゃないですか。それはコロナの前からそうだったとは思うんですけど、それが加速したというか。そういうことも含めて作曲への気持ちは一緒なんですけど、出口でどういった曲を完成させるべきなのかということを、すごく考えるようになりましたね。

――世界的に憂鬱な情勢である分、悲しみをまとった曲が多くできてしまうとか、逆にコロナに向かった激しい怒りが曲の片鱗に表われるなどは？

そう言われてみると、あまりハッピーな曲というのはなかったかもしれない。もともと僕は悲しい曲とか過激な曲を多く書いてはいたんですけど、それが増したかもしれないですね。悲しい曲と激しい曲の両極端を書いていたと思います。あまりハッピーな曲は書いていないかもしれないな。

――また、このコロナ禍において、人前でプレイする機会は平等に減ってしまいました。ミュージシャンとして、これは大きな弊害になったとも思うのですが。

それはあると思いますね。やっぱりどこかで、僕らはお客さんにエネルギーをもらって成長してきたというのがあるので。みなさんが僕らのことを恋しく思い“早く観たい”って言ってくれるのと同じくらい……いや、それ以上に、僕らもみなさんに早く会いたいっていう。そういう循環で大きくなれてきたんだろうな。お客さんにエネルギーを与える、そしてもらうっていう。そこは僕も実感していますね。

――“演奏力をキープする”という意味で、意識的に楽器に触れる時間を多く設けるということはありましたか？

ピアノに関しては、移動時間が少なかった分、触る時間は以前に比べて圧倒的に増えました。やっぱり飛行機のなかではピアノは弾けないじゃないですか（笑）。

創作活動自体、 もともと孤独との闘いみたいなもの。
コロナで意欲をなくしたということはない。

――ですね（笑）。

以前は１週間に１回は飛行機に乗っていて、その飛行機のなかで寝ているような生活をしていたので（笑）。もちろん今はコンサートで弾くことができるわけじゃないんですけど、楽器に触る時間ということで言えば、増えたと思います。

――2021年の秋口には肉体改造にも取り組んだとのことでしたが、それは特に肉体的な楽器であるドラムにとってもいい影響がありそうですか？

そうですね。ただ、ドラムはあまり胸筋とか使わないと思うけど（笑）。体力を保つという意味では……変な話、体力的には今までの人生のなかで今がベストです。

――手術をした首の具合や、腱鞘炎との付き合い方という点では？

首は、実は３度目の手術を進められてるんです。２度の手術をしていながら、ああいうこと（※激しいドラミング）をやっていること自体、無謀なことでもあって。まあ自分で選んだ道なので。今後ドラムをやっていく限り、何度か手術をしなければいけないんじゃないかとは思うんですけど、それはそれでいいと思っています。

――なんと！　ただ、確かにファンはそこが見たいというのがあると思いますし、"それを乗り越えちゃうYOSHIKI"が見たいという気持ちも多分に持っていると思います。

もともと、それくらいになっちゃうんだろうなっていう気持ちでやってきたので。

――ハハハ、頼もしいです！　さて、今年８月に行なわれる"プレミアム・ディナー・ショウ《YOSHIKI +(PLUS) Presents　EVENING / BREAKFAST with YOSHIKI 2022 in TOKYO》"にて、久しぶりに観客の前でプレイをすることになります。今回はお客さんがかなり近いステージとなりますが、こういったケースとアリーナでは、やはり違いがあるものですか？

ありますね。アリーナやスタジアムだと、どんなに近いといっても、僕のディナー・ショウでの一番遠いところくらいなので。ある種"大きな自分のリビング・ルームにみなさんを招いてやっているのがディナー・ショウ"という感じですね。

――お客さんが近いと、反応もより近くで見えますよね。

その場で会話とかもできちゃうので（笑）。スタジアムでは、会話はできないじゃないですか。もちろんエネルギーをもらうし合唱もするけど、どちらかというとマイクを通して叫ぶ的な。でもここでなら普通に会話ができちゃいますからね。

――それがディナー・ショウの大きな魅力とも言えますね。そして、それを楽しみにしている方が大勢いて。

数年前にディナー・ショウを始めて、まさかこうやって定番になってくるとは思ってもいなかったので。"なんとなく試しにやってみよう"というのが、毎年増えてきて……この２年間はコロナで止まっちゃいましたけど……それはそれで手探りをしつつ、こういう世界があるんだってどんどん進化をしてきている感じですね。だから、どんどんいろいろなものを取り入れて、"こんなことまでやるんですか！？"みたいなものをさらに進化させようかと。こういった時代だということも考慮して、次はデジタルな面を入れていこうという考えなど、いろいろな構想はあります。

Interview-3

Talk about

“Upcoming Rock & Heavy music”

――以前、新作については“99％できている”といった発言がありましたが、その後、それはどのような形になりそうでしょうか？

やはり“これまでのアルバム”とは時代が違うのかもしれないですけど、特にロック・アーティストっていうのは、アルバムのリリースとツアーをパッケージで考えてきたじゃないですか。アルバムにしても、どちらかというとインターナショナルに向けて作っていく、世界に向けて作っていくなかで、世界ツアーが組めないような状況では、どうすればいいのかなって。このパンデミックが始まって約２年間、そういったジレンマのなかで、ある種その気持ちは一度リセットして考えなきゃいけないのかなと。

――確かにそうですね。

だから、このパンデミックがどこまで引きずるものなのかも含めて、自分のなかで再構築してるというか。“これだけ時間が経っているのに再構築しているなんてフザケんじゃねぇ！”って声が聞こえてきますけど（苦笑）。もちろんプレッシャーもあるし、ときには“アルバムを出せ”という脅迫状じみたものも来ますが（笑）。ただ、そこまで思ってくれるというのも、スゴいなと思うんです。特に自分はどちらかというとマイペースなアーティストなので、ファンの方に寄り添いつつも、自分の方針を貫くみたいな。そのバランスをちょっと考えなきゃいけないなとは思っているのですが。

――なるほど。

これはX JAPANのアルバムに限らないんですけど、実は僕のソロ・アルバムをずっと前から作っていて、それは『DAHLIA』の前から始めているんで。『DAHLIA』を出したのが……。

――1996年ですね。

もう25年以上経ってるってことですもんね。そんなに出してないんだ……これも忘れた頃にできるんじゃないかな（笑）。

――こちらも焦らず、楽しみに待っています！　さて、ライヴということで言うと、単独のツアーのほかに、近年はフェスへの出演もありました。日本でもこれまでには［ラウドパーク］や［ノットフェス］など、ヘヴィ系バンドが集まるイベントがいろいろと催されています。そこにX JAPANが出演すれば、ヘヴィ・ミュージック・シーンの大きな盛り上がりにもなると思うんです！

僕［オズフェスト・ジャパン2015］には出たことがあるんですよ。ジェーンズ・アディクションで1曲（「クラシック・ガール」）ピアノを弾いたことがあって。スリップノットだと、クラウン（ショーン・クラハン／per）は友達なんですよ。昔、僕の家でお酒を呑んだり。彼はスゴくいいヤツで、頭もいい。スリップノットって、ヴォーカルも素晴らしいし。コリィ（テイラー／vo）とは会ったことはないですけど、彼がやっているストーン・サワーもすごい好きなんですよ。（※本誌『Vol.7』を手にして）マスクもけっこう変わっているんだね。

――そうですね、作品ごとにマスクのデザインは毎

回変わりますね。

僕もこういうマスク作ろうかな（笑）。

——ハハハ、いいですね。この時期のマスクは、確かスクリーミング・マッド・ジョージ氏の担当だったと思います。

彼は昔、僕のレーベルからデビューしているの知ってます？［エクスタシー・レコード］から出ているんですよ。Xの『Jealousy』の仮面を作ったのも彼で、CDを開いたブックレットの裏では、僕の顔がはずれるんですよね。素晴らしい才能を持っている人です。

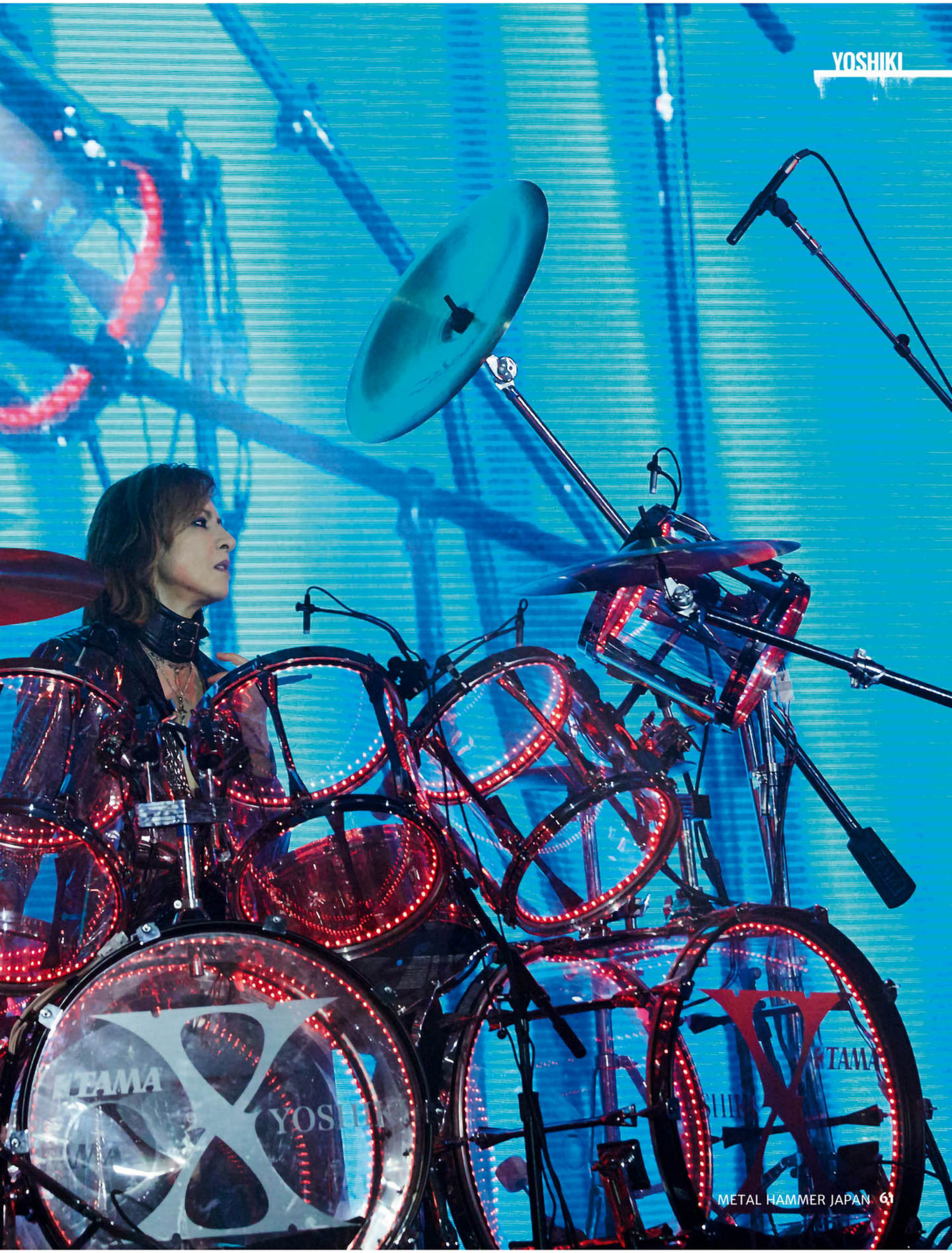
——スリップノットが主催する［ノットフェス］に日本代表でX JAPANやYOSHIKIさんが出てきたら、イベント自体が映えるし、日本のヘヴィ系ファンも嬉しいでしょうね。

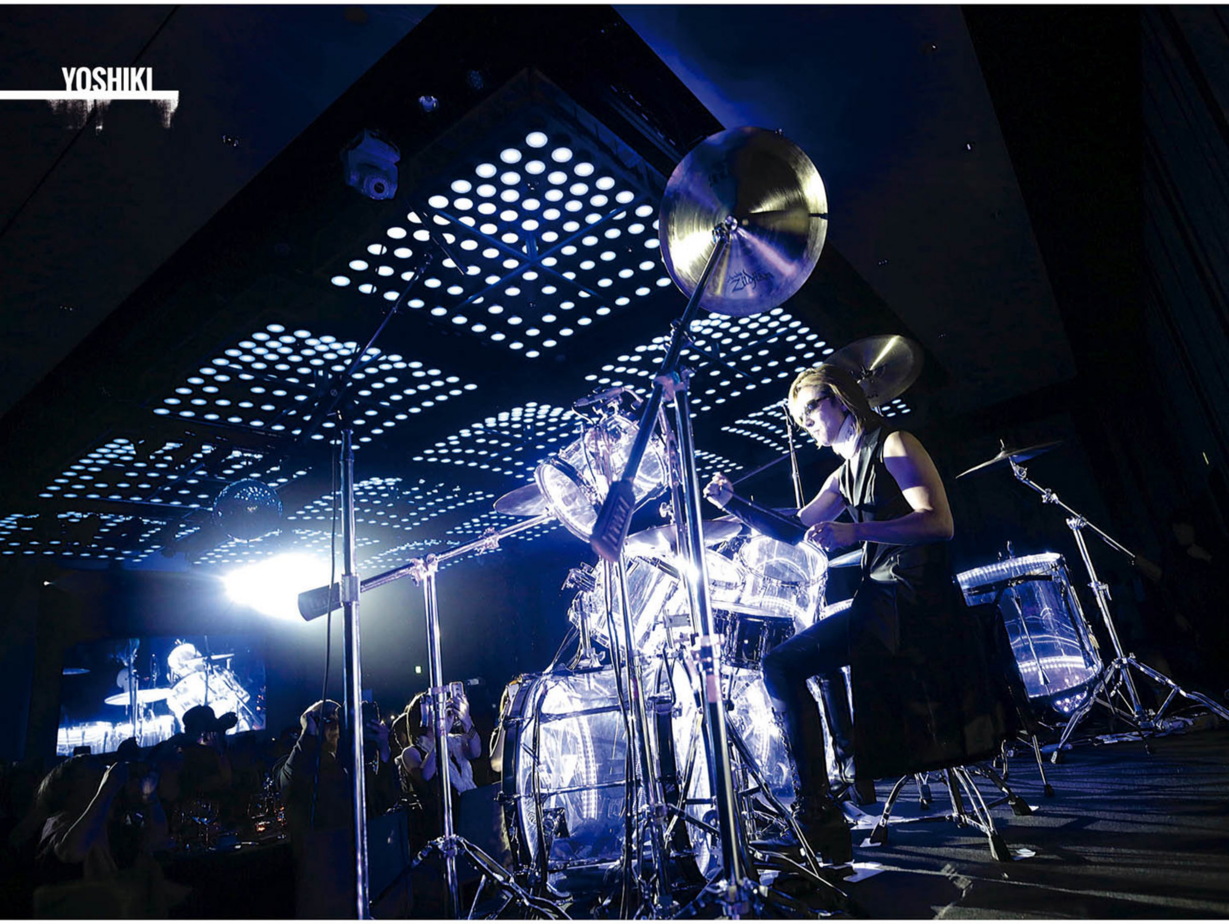
そうですね。そう言ってくれると嬉しいです。

——日本公演もパンデミック前から企画がなされていたんですけど、2022年についても再延期になってしまい……。海外ミュージシャンを多数招聘するイベントは、まだ難しいとも言えそうです。

僕ならアイアン・メイデンが観たいなぁ。もともとXって、アイアン・メイデンのコピーをしていた頃があったので。

——いいですね！　今、バンドをやろうという若い人が減っている傾向もあり、僕ら世代がXを観てバンドをやってみたいと思ったように、そういった生のステージを観る機会が増えれば、また楽器をやってみよう、バンドをやってみようと思う人も増えると思うんです。


TAMA
YOSHIKI
TAMA



パンデミックがどこまで引きずるかも含めて自分のなかで再構築しているというか。

そうですね。

――さて、先程パンデミック中の作曲について話を聞きましたが、本誌的には、今後発表されるであろう新譜に激しい曲があるのか、非常に気になるところでもあります。

それは、もちろんありますよ。両極端に振り切るっていうのが、自分なのかなと思っているので。

――そうですよね。ファンも、その“両極端を味わえる唯一無二のもの”を楽しみにしてるんじゃないかなと思います。激烈なギターがあって、ツーバスがあって……という、スラッシュ・チューンのような曲から、ピアノの旋律が響く耽美な曲まで。

僕のソロで作っているものの中に、それはありますね。ものすごく速い曲とかも。

――その新しい作品が出る報告を楽しみに待っております。今日はありがとうございました！

こちらこそ、ありがとうござました。もしスリップノットにインタビューをすることがあれば、よろしく伝えてください。クラウンが知り合いというのはあるんですけど、本当に好きなんで（笑）。

3年ぶりのプレミアム・ディナー・ショウが開催！

YOSHIKI+(PLUS) Presents
EVENING / BREAKFAST with YOSHIKI 2022 in TOKYO

ファン待望のディナー・ショウが、8月11日(木)～8月28日(日)の11日間、全20公演で開催決定。過去のディナー・ショウはどの公演も超高倍率となった、まさにプレミアムなイベントだ。

《EVENING》と《BREAKFAST》と2タイプの時間帯が設定され、また収容人数にも制限を設けるなど、コロナ・ウィルス感染対策も徹底される。

間近でピアノやドラムの生演奏が観られるほか、YOSHIKI曰く"会話もできちゃいますから（笑）"という本ディナー・ショウ、見逃すわけにはいかない！

【会場】グランドハイアット東京　ボールルーム

【日程】

2022年

- ●8月11日（木祝）／Breakfast Show + Dinner Show
- ●8月12日（金）／Breakfast Show + Dinner Show
- ●8月13日（土）／Breakfast Show + Dinner Show
- ●8月14日（日）／Breakfast Show + Dinner Show
- ●8月15日（月）／Breakfast Show + Dinner Show
- ●8月19日（金）／Dinner Show
- ●8月20日（土）／Breakfast Show + Dinner Show
- ●8月21日（日）／Breakfast Show + Dinner Show
- ●8月26日（金）／Dinner Show
- ●8月27日（土）／Breakfast Show + Dinner Show
- ●8月28日（日）／Breakfast Show + Dinner Show

［Breakfast Show］

・OPEN：11時

・BREAKFAST START：11時45分

・SHOW TIME：13時（15時終演予定）

［Dinner Show］

・OPEN：17時30分

・DINNER START：18時30分

・SHOW TIME：20時（22時終演予定）

詳細は《YOSHIKIオフィシャル・サイト》をチェック！

＞jp.yoshiki.net/info/769/

Special Present !

YOSHIKI直筆のサイン色紙を、合計で2名様にプレゼント！　希望者は右のQRコードからアンケートにお答えのうえ、エントリーください。詳しくはP.115もチェック。

Special Feature

YOSHIKI

METAL HAMMER JAPAN Presents
レイザーラモン
RG
RAZORRAMON
俗で悪な
オリジナル
パーカー&シャツ
が登場！
春の“ウォーク”にも最適！
※プリントの大きさは、サイズによって若干異なります。
パーカー
ロング・スリーブ
Tシャツ
◎ https://t-od.jp/
詳しくは、オンデマンドTシャツ・サイト［TOD］をチェック！

LET'S TALK METAL!

高市早苗

政治家やってると、
嫌なことがしょっちゅうあるでしょ。
同僚議員と意見が食い違ったり、
週刊誌にないこと書かれたり。
それで“あー、今日はちょっと嫌だったな”って思っても
「紫の炎」を聴くと本当に気持ちが上がって、
次の日からまた元気に働けるの！

“え、メタル専門誌に現役の衆議院議員が！？”と思った人もいるだろう。現在は自民党の政調会長を務め、これまでにも総務大臣を始めとした数々の重職を歴任してきた高市だが、その根幹には音楽愛があり、しかもバリバリのヘヴィメタル・ドラムをプレイする人物でもあるのだ。

10代の頃からバンド活動をしてきたからこそ、当コロナ禍におけるエンターテインメント業界の苦境も肌で感じられている……そんな政治家がいることは、我々にとっても、とても頼もしいことだと言えるのではないだろうか。

取材・撮影：オカミ・タカヒデ

Profile

1961年3月7日、奈良県出身。幼少期からピアノのレッスンを受け、高校の吹奏楽部でパーカッション／ドラムに出会う。ハードロック／ヘヴィメタル・ミュージックに影響を受けつつ、ポップスやヒット曲など、さまざまなスタイルの音楽をバンドでプレイ。神戸大学経営学部経営学科を卒業後は、校内で見たポスターをきっかけに松下政経塾に入塾。松下幸之助氏の言葉に触れ、政治の道を志すことに。現在は［自由民主党　政務調査会長］、［衆議院　国家基本政策委員会　委員］などを兼任。日々、国政に従事している。

●オフィシャル・ホームページ：https://www.sanae.gr.jp

インド洋
大西洋

ヘヴィメタ系でいくと、スティックが折れる確率も高いじゃない（笑）。

―― 先の総裁選期間中にはデーモン閣下が激励に訪れるなど、以前から高市さんの“ハードロック／ヘヴィメタルが好き”は我々の耳にも届いていました。そこで今回は“音楽には、地域も宗教も政治理念も関与しない”という気持ちを持って、お話をうかがいたいと思います！　そもそもロック・ミュージックを好きになったきっかけとは？

小学校4年生のときに大阪万博があって、その直前に親からもらったお小遣いでグランド・ファンク・レイルロードのレコードを買ったんですよ。音楽的にはそんなにヘヴィじゃないけど、マーク・ファーナーは腕なんかもムキムキで“あー、カッコいいな”って（笑）。それにハマっていくうちにディープ・パープルが出てきて……「スモーク・オン・ザ・ウォーター」が入っているアルバム。

――『マシン・ヘッド』（1972年）ですね。

それを小学校6年生くらいに聴いて。そこからはずっと“それ系”のレコードをお小遣いで買ったり、ラジオで流れてくる曲を一所懸命録音したりしていましたね。

―― 早くから熱心だったんですね。ご家族からの影響ですか？

隣の家に音大に行っているお姉さんがいて、ピアノを教わっていたんです。そのお姉さんが、ロック系の音楽雑誌を山ほど持っていて、お稽古に行くたびにくれたんですよ。そのお姉さんはレコード会社でアルバイトもしていて、自分が聴かない見本盤をくれたんですね。お姉さんは当然クラシックで、自分が聴けへんロック系は私にくれて。

―― なるほど。ただ、小学生の女の子としては少々珍しい嗜好かも？

あの頃、“郷ひろみさんや野口五郎さん、西城秀樹さんで誰が一番好き？”みたいな女子同士の話には入っていけなくて。かといって“グランド・ファンクいいよ”って言っても、誰もノッてこない（笑）。だから、学校で音楽の話はしなかったかなぁ。

―― そんな海外のロック・バンド好きが高じて、バンドをやりドラムをプレイすることになるんですよね。

バンド活動を始めたのは中学2年生なんだけど、最初はキーボードで、高校生のお兄さんたちに誘われたパープルとかのバンドなんです。ただ、バンド練習に行ってたら家に帰ってくるのは夜なので、中3の冬くらいにさすがに親に怒られてね。毎日リビングや台所の床を拭くのが私の仕事だったんで、家事をやったらもう勉強時間がなくて。さすがに親が“高校どこも行けなかったらどうするの！”って怒り出して、泣く泣く1月頃にゴメンナサイと。

―― それでも、受験までかなりギリギリの時期ですが（笑）。

めっちゃギリだったんですが。そこから勉強して高校に入ってバスケット部で頑張ってたら、向かいの家のお姉さんが……。

―― またお姉さんの影響が！？

私より1年上のお姉さんで、高校で吹奏楽部に入っていて、パーカッションが足りなくなったから“早苗ちゃん手伝って”って言われたんです。それで経験はまったくなかったんだけど、スネア・ドラムでロールやったり太鼓叩いたりしているうちに、フル・セットのドラムを教えてもらって。それでドラムがおもしろくなってきたの。

―― そして、いよいよハードロック・ドラムに青春をささげることになると！

親が厳しかったので、大学に入ってから堂々と軽音楽部に入ることができて、そこから本格的にバンドが組めるようになりましたね。でもドラムってけっこうお金かかるじゃないですか。スティックは消耗品だし、しかもヘヴィメタ系でいくとスティックが折れる確率も高いじゃない（笑）。

―― ハハハ、パワー・ヒッターであったという！

いつも3組くらいはベードラ（バス・ドラム）の上にスティックを置いていましたから。そのうち家にもドラム・セットが欲しくなって買ったし、そのためにアルバイトを一所懸命やるようにもなって。

―― 本当に、ドラムに全力投球だったんですね。

そのうちライヴハウスに出していただけるようになったり、ほかの大学のダンス・パーティで演奏させていただけるようにもなって、ちょっとお金になるようにもなりまして。メンバーで分けたら微々たるものではあるんですけど、いただいたお金で消耗品もなんとかまかなえるようになりました。楽しかったですね、本当に（ニッコリ）。

―― 青春のいいお話ですね～。当時好きだったバンドやドラマーというと？

イアン・ペイスは好きだったけど、練習用のバイブルと言えばコージー・パウエルですね。スティックさばきがかなり速いし、ツーバスも勉強できるし。『オーヴァー・ザ・トップ』はカセットテープに録音して、テープが伸びるまで何度も何度も練習に使っていました。

―― やはり、パープルが源流になっているということで、リッチーの系譜がお好きだったんですね。

そうですね。ほかにもUFOやホワイトスネイクも好きだったし。マイケル・シェンカー・グループも好きだったな。でもやっぱりダンス・パーティとかは「ドクター・ドクター」とかライオットじゃなくて、「君の瞳に恋してる」とかみんなが踊りやすいのを急遽練習して（笑）。

―― ハハハ、客層に合わせて。ちなみに日本のハード系バンドを聴いたりは？

ハードロックに入るかわからないけど、カラオケでよく歌うのはB'zとX JAPANですね。

―― あ、ドラムをやって鍵盤も弾くって、実はYOSHIKIさんと一緒でもありますね。

いやいやYOSHIKIさんのドラムはやっぱりスゴいですよ。あんなの全然無理（笑）。そうそう、私のスマホの待ち受け画面、YOSHIKIさんとの2ショットなの。ちょっと待って、これだけは見てもらわないと……（と画面を見せてくれる）。

―― おぉ、本当だ！　いつ頃のものですか？

これ《YOSHIKI CLASSICAL 2018》のときで、普通にコンサートに行って、終わったあとに写真撮影コーナーに並んで撮ったんです。だから一緒にご飯食べたりしたワケでもなくて。

―― しっかりファンと同じ気持ちで接していると。それって大切ですよね。

一度消しかけたこともあったんだけど、残しておいてよかった～（笑）。

制度作りができるところに行きたいと24歳の春に決心をして。

―― さて、ギャランティの発生するレベルでドラムをプレイしつつ、かたや政治の道も志すことになり……どちらに進むか迷われたという話も聞きました。

大学4年のときに決断しなくてはいけなくて。このまま好きな音楽をやって一生食

これからの日本でさらに成長できるのは、
アニメ、ゲーム、音楽だと思っているんです。
それらをどれだけ世界に発信していけるか。

べていけたらどんなに幸せだろうとは考えていたんですけど、親に言ったらむちゃくちゃ怒られて。"50～60歳になったときの自分を考えてごらんなさい！"と言われてハッとしたんです。例えば私がヴォーカリストやギタリストだったら、50～60歳でもいけるのかなとも思ったんだけど、なにせヘヴィメタル・ドラムでしょ？　オバさんになって足をカッと開いてドラムを叩いている姿が、20代の私には想像できなくて。

── 当時は、特にイメージがしづらいかもしれませんね。

その頃、まわりからは"破壊的ドラム"と呼ばれていまして（笑）、<軽音楽部便り>みたいなものに"今日は《ストーキーサウンドコンテスト》に行って、早苗の破壊的ドラムを聴いてきた"とか書いているのがあったり。まぁ、破壊的ドラムの中途半端な実力で一生食べていくなんてのは無理だ……と目が覚めまして。

── なるほど。

親の希望どおりの堅い仕事に就くしかないなと、非常に手堅い就職口から内定をいただきまして。それで、そのままそこへ行っておけば良かったんですけど、大学の廊下を歩いていたら《松下政経塾　塾生募集》という、経営の神様・松下幸之助さんがニコーっと笑っておられる写真のポスターがあり、フラフラっと願書を取って受けちゃったら、一次、二次……三次試験が松下塾長との面接で、そのまま合格しちゃって。どうしようと思っていたら、父親は"松下さんのところなら、夢があっていいじゃないか"って。

── 厳しかったお父様も、松下さんのところならいいじゃないか、と。

でもそれは、今思えば私がドラムを続けることとほぼ一緒。当時の松下政経塾は、5年間は研究費をいただけるはずでしたが、1年ずつ理事会で査定されて退塾する人も多く、ドラムを続けているよりもさらに不安定なところにフラッと行ってしまったわけで。ただビジネス分野には興味があって、懸命に勉強しました。1年経って松下塾長と話をしたときに、90年代以降に起きると予想される世界的構造転換の話をうかがいました。それなら、このまま金融や貿易の勉強を続けて就職するよりも、制度作りができるところに行きたい……と、24歳の春に決心をして。

── そこで、新しい夢や進路が見えたんですね。

その後30代になったら政治家を、しかも国政を目指そうと。もっと不安定になることを考えて、そこから国会議員として必要な知識、経験を得るためだけに時間を使い、選挙に必要なお金を貯めるために一所懸命頑張って働いて、32歳で当選したんです。ということで、結局音楽をやっていても一緒だったかな。不安定なことを今もやってますので（笑）。

内閣官房幹部に約束させたのが、フリーランスを保護する法律を提出してくれということ。

── ここでは、政治とメタルの両面にある課題について、話を聞かせてください。どちらも若い人に興味を持ってもらうことが重要なのではと思うのですが、どうすればそれがうまく進められると考えますか？

それは難しい課題だな……でもヘヴィメタルって、私が大学生だったときも"えー、ヘヴィメタル・バンド？"って言われていましたよ。当時はフュージョンやパンク・ロックがカッコいいとされていて、ヘヴィメタルがちょっとひかれていた状況っていうのは変わってないかも（苦笑）。

── イメージだけではなく、いざ聴くととてもカッコいいんですけどねぇ（苦笑）。同じく政治の話題も、若い人にはなかなか自分の話として捉えてもらうのが難しいのでは？

私は、《18歳選挙権》を実現したときの総務大臣だったんですよ。あのとき文部科学省が主権者教育をやろうとしていたんだけど、予算が足りなくて高校3年生分の教材しか用意できないって言うんで、（当時）麻生財務大臣に私がかけ合って"3年生は受験勉強でなかなか読んでくれないから、1～3年生まで配れるだけのお金をください"と言って財源を確保してスタートしたんです。

── はい。

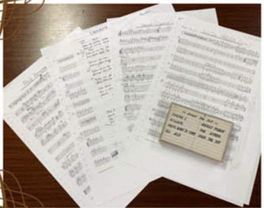
選挙のときも私は事前に人を集めて演説するのが嫌いなんで、マンションのベランダ側に車を停めて演説するのね。マイクの向きさえ工夫すれば飛ぶでしょ、音が。すると家のなかで聞いてくれて、わりと若い人も降りてきてくださるんですよ。学生さんが出てきたらその人たちと会話をして、"どんなことで困ってる？"とか"日本はどんな風になればいいと思う？"とか、そういう会話を積極的にやっていますね。そうやって1回聞いてくれたり話したりすると、ちょっと身近に感じて考えてくれるのかなって。

── やはり、一度聞いてもらうということが大切なんですね。

うん。できるだけ若い方とは、どんなに選挙カーの移動時間がズレようが、いろいろ質問してくれたらお話するようにしています。

── ヘヴィメタルも、いろいろ聴いてもらう機会ができるといいんですよね。

私は気持ちがちょっと萎えたとき、ヘヴィメタル……「紫の炎」を絶対聴くわけですよ。すると気持ちが本当に上がって。家に電子ドラムもあるので「紫の炎」を聴きながら叩くと、さらにその日の嫌だったことが全



◀取材時、高市氏が持参してくれた直筆のドラム譜（のコピー）と練習用カセットテープ。ヴァン・ヘイレン、UFO、マイケル・シェンカー・グループ、ライオットなどメタル・バンドの楽曲がほとんどだが、なかにはドラム・ソロを入れ込んだというパット・ベネターの楽曲も。これらはすべて自身で聴き取り記譜したものだ。

◀19～22歳の頃は、4つのバンドを掛け持ちしていたという。こちらは女性ばかりのグループ［Honey Bay］。ちなみに、最もヘヴィな楽曲をプレイしていたバンドは［Rui］だった。

部発散できて、次の日はまた元気に働けるの。政治家やってると嫌なことがしょっちゅうあるでしょ。週刊誌にあること・ないこと……本当に“ないこと・ないこと”書かれて被害にあったことは数知れず。ほかにも同僚議員と意見が食い違うこともあるよね。“あー、今日はちょっと嫌だったな”って思っても「紫の炎」を聴くと、もう次の日には忘れてる状態になるんです（笑）。

―― まさに、嫌なことは“バーン！”と燃やしてしまおうという（笑）。

だからヘヴィメタルも、若い人にも1回聴いてみてほしい。私たち世代が好きだった名曲を、今の方にも1回聴いてもらう。私は「ドクター・ドクター」がいいと思うけどな。あと「アイ・サレンダー」とか、キレイなハードロックをみんなに聴いてもらえば、絶対今の時代でも好きになる人はいると思う。

―― また、ロック業界に限らず、当コロナ禍におけるエンターテインメント業界のダメージは計り知れません。今後、再び音楽業界は活発に活動できるようになりますか？

感染症収束の見通しについてはなんとも言えないんですが、ただエンターテインメント業界って、日本のものすごい成長産業なんですよ。2011年に3000億円台だったのが、2019年には6000億円台の市場になったんです。それが、新型コロナ・ウィルスが確認された2020年には1000億円台。6分の1以下に減っちゃっていて、これから立て直していくのは本当に大変なことなんです。特にライヴハウスは音が外に漏れちゃいけないので“風通しを良くしてください”は無理じゃないですか。面積的にも、なかなか密を避けてくださいって無理だし。

―― そうですね。

事業主体がなくなってまたゼロから作るのは大変なので、事業継続・再構築支援に力を入れています。私は、これからの日本でさらに成長できるのは、アニメ、ゲーム、音楽だと思っているんです。それらをどれだけ世界に発信していけるか、そして若いアーティストたちが自分でビジネスを起こせる環境を作りたいんですね。アニメもゲームも音楽も一緒なんだけど、まずは高等教育機関で、著作権や契約に関する法律教育を行なう。次に、外資とのイコール・フィッティング（競争条件同一化）や海外配信網の整備を支援する。さらに、資金面では投資家の税負担軽減策を用意する。これが“高市早苗プラン”です。

―― これは、総裁選挙のときに訴えていたことのひとつでもありました。

若い人たちがゼロから始めてビジネスにしていける仕組みを国の成長投資として作りたい、という内容だったんですが、総裁選挙で負けちゃったのでまだ具体的な政策にはなっていません。ただひとつ内閣官房幹部に約束してもらったのが、フリーランスを保護するための法律案を提出すること。

―― ライヴ／舞台ひとつにしても、たくさんのフリーランス・スタッフが関わってきますから、それはショウ・ビジネス業界の人たちも気になっているところだと思います。

コンサートをするにしても、フリーランスの専門家がいっぱい集まるじゃないですか。その人たちが契約書を交わさずにこき使われて、大したお金も貰えていないケースがあるので。フリーランスの人と契約するときは必ず契約書を作る義務、しっかりとした対価を払う義務を課す……という法律を作るということも総裁選挙で言っていたんです。負けちゃったけどそこは諦め切れず、内閣官房幹部から“必ず法律案を提出する”という約束をいただいているので、それは今年・来年の間に進むと思います。

―― そういった現場のリアルは、ご自身がバンド活動を行なっていたからこそ、見えてきたことでもあるんでしょうね。

そうですね。私は今年か来年の国会では確実に法整備ができるという感触を得て、何度も確認を入れているので大丈夫だと思います。それは私の夢というか、ここ1～2年で実現したいことですね。

―― 本誌読者のなかには、そういった立場で仕事をしている人も多いことと思います。大きく期待していることでしょう。

ライヴハウスでもコンサートの会場であっても、大変な数の方が働いてますもんね。

――我々からも、よろしくお願いします。嫌なことがあったら、「紫の炎」を叩いて発散しましょう（笑）！

そうですね、ありがとうございます。頑張りますよ（ニコ）！

METAL×KEYBOARD

キーボードが織りなす美旋律メタルの調べ

with YUHKI

文：舩曳将仁

Profile
1974 年生まれ、大阪府藤井寺市出身の音楽ライター。キーボード入りハードロック／ヘヴィメタルをこよなく愛する。幼少期にピアノを習わされそうになり、拒否したのを後悔しています。

Introduction

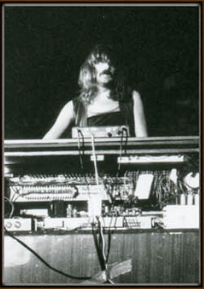
キーボード（鍵盤楽器）の進化は、ロック史とともにあるといっても過言ではない。

古くは 1920 年代から、ジャズや R&B のバンドがピアノやオルガンを使用していたし、1950 年代中期にアメリカでロックンロールが誕生したときにも、ジェリー・リー・ルイスやリトル・リチャードといったスター・ピアニストがいた。それらの音楽性のミックスとして 1960 年代から隆盛を極めるロック・ミュージックが、鍵盤楽器を使用するのは自然な流れだった。ビートルズやローリング・ストーンズも、デビュー・アルバムからアレンジにピアノを使用している。

1970 年代に向かってロックの多様性が増していくなか、ロック・キーボーディストに革命をもたらしたプレイヤーが 3 人登場する。ひとりは、ディープ・パープルにおいてギターとサシで渡り合うハードロック・スタイルを見せつけたジョン・ロード。ひとりは、ナイス〜 EL&P でクラシカルかつ攻撃的なプレイ・スタイルを確立し、シンセサイザーをロックに導入した第一人者のキース・エマーソン。そしてイエスやソロ作での超絶的テクニックで聴く者を圧倒したリック・ウェイクマンである。この 3 人が現在のロック･キーボーディストの礎を築いたと言える。

以降、テクノロジーの進化に伴い、電子鍵盤楽器の小型化及び機能面が飛躍的に向上。と同時に、それらをロック・ミュージックのなかでどのように活用して新しい音を生み出していくかという試行錯誤もくり返されていく。それは、ハードロック／ヘヴィメタルというジャンルにおいてもしかりであった。1970 年代

Jon Lord



▲のちにクラシック作品を発表するほどクラシックへの造詣が深く、ハードロックにクラシカルなプレイを導入し、様式美スタイルを築き上げた第一人者だ。ハモンド・オルガンへのこだわりも強く、スプリング・リヴァーブを内蔵させるなどさまざまな改造を施していた。

ヘヴィメタルで最も重要なのは、キャッチーかつヘヴィなギター・リフ、地を揺らす低音ベース、怒涛の連打を聴かせるドラム、そして華のあるヴォーカル……だけにあらず！　そこにキーボードによる美しく高らかなメロディが加わることで、楽曲はより魅力的な光を放つのだ！

ということで今回は、鍵盤楽器の入ったメタル・チューンにフォーカスし、その特徴や聴きどころを深堀りしていこう。攻撃的な音楽であるヘヴィメタルだからこそ、より個性を出すキーボーディストたちの、巧みのプレイに浸ってほしい。

後半では、メタル・シーンきっての鍵盤プレイヤーであるYUHKIが登場。さまざまなスタイルのバンドでプレイしてきた彼ならではの、キーボードのおもしろさや重要性を語ってもらった。

には専任キーボーディストを有したバンドが数多くいたし、そうではないレッド・ツェッペリンやブラック・サバスなどもキーボード・サウンドの導入を積極的に試みている。

1980年代になると“キーボード・サウンド＝軽い”という捉えられ方も生まれたが、ジャーニー、ヨーロッパ、ボン・ジョヴィといったメインストリームのハードロック／ヘヴィメタル・バンドの多くがキーボードをメインで使用していた。1990年代以降には、ジャンルが細分化されるのに伴い、多様なキーボード・サウンドを活用した新しいスタイルのヘヴィロック・バンドが続々と登場している。

近年さらに密な関係になろうとしているキーボードとハードロック／ヘヴィメタルの関係について、改めて考えたい。

Keith Emerson

▲ナイスでシベリウスを取りあげたり、約20分の組曲を手掛けるなど、クラシックとロックの導入に挑んだ先駆者。オルガンにナイフを突き立てたり、シンセの端子を体にこすりつけたりと、奇抜なパフォーマンスでも魅せた。シンセの開発に携わっていたことも。

Rick Wakeman

▲英国王立音楽院出身というリック。クラシックの確かな素養に裏打ちされた流れるような速弾きで、テクニカルなキーボード・スタイルを確立。自らを取り巻くように数種類の鍵盤楽器を並べ、曲に応じて複数の機種を操る姿は、まさにキーボードの魔術師。

Analysis-1 バンド・スタイルの違いで見るキーボードの役割

TYPE-1 キーボードがメインで活躍！

キーボードがどのように使われ、どのようにヘヴィメタルに生かされているかについて見ていきたい。

まずはメインで楽曲を、ひいてはバンド全体をキーボードがリードしているパターン。アレンジとしてのキーボードではなく、楽曲にメインで絡んでいく、もしくは楽曲の肝をキーボードが握っているというタイプだ。

キーボーディストがバンドの中心人物という場合、そうなることが多いように思える。楽曲をリードし、ソロもメインでキーボードが務めるというところで、まず思い浮かぶのはロイヤル・ハントのアンドレ・アンダーセンだろうか。彼のきらびやかかつパワフルなキーボードこそがロイヤル・ハントの要となっている。同じような例としてはアーテンション、リング・オブ・ファイアのヴィタリ・クープリもそのタイプのキーボーディストと言えるだろう。

プログレ・メタル・バンドにおいては、ギターと同等かそれ以上に自己主張してメインを務めるキーボード・プレイヤーは多い。その代表的な人物なのがドリーム・シアターのジョーダン・ルーデスだろう。テクニックやそのサウンドだけでなく、コンセプト面でもバンドを牽引している例としては、ナイトウィッシュのツォーマス・ホロパイネンが挙げられるだろうか。彼のピアノやキーボードで紡がれるメロディこそがナイトウィッシュの核となっている。

メインを張ると言えばソロ活動となるが、メタル・キーボーディストでソロ活動をしている人物は少ない。例外的なひとりと言えるのが、元ドリーム・シアターのデレク・シェリニアンだろう。メインを務めるにふさわしい多彩なキーボード・ワークで、業界内でも評価が高い。

▲長身なアンドレだけに、その演奏姿はキーボードに囲まれてもなお大迫力！

▶代表的なバンド／キーボーディスト

- ●ロイヤル・ハント
- ●ドリーム・シアター
- ●ナイトウィッシュ
- ●ディレイン
- ●ロケット・サイエンティスツ

TYPE-2 楽曲を巧みにサポート！

メインを張るほどではないけれど、キーボードが的確なサポートで楽曲やバンドの音楽性を盛り立てているというパターンもあるだろう。

引き立て役と言えば聞こえが悪いが、求められるプレイに対して、それを要求どおりに、もしくはそれ以上のものを提供するには相応の実力とセンスが必要だ。それを満たす人はそれほど多くなく、引く手数多。実力者であればあるほど、いくつかのバンドを渡り歩く渡り鳥的な活動をしているというキーボード・プレイヤーも多い。

リッチー・ブラックモアとイングヴェイ・マルムスティーンは、キーボードに関して一家言を持つギタリストとして知られ、彼らに起用されたキーボーディストは、名プレイヤーと呼ばれる名誉に預かることが多い。その代表的な人物と言えるのが、イェンス・ヨハンソンだろう。シルバー・マウンテンからストラトヴァリウス、ほかにも数多くのヘヴィメタルや非メタル作品にゲスト参加しているが、どんなタイプの楽曲でも勘どころを巧みに押さえて魅力を引き立てている。現ディープ・パープルのドン・エイリーも70～80年代には数多くのバンドに参加し、名サポート・キーボーディストと呼ばれたひとりだ。

バンドに所属しながら、メインを張るでもないけれど、バンドをしっかりサポートしているキーボーディストは数えあげたらきりがないほどいる。ローディのヘラは、同バンドの歴代女性キーボーディストのなかでも、プレイだけでなくキャラクター性も含めて、バンドの個性にハマった逸材……と個人的に思っています。

▲"鍵盤イントロと言えば「ミスター・クロウリー」！"と想起させるほどの名演も生んだドン・エイリー。

▶代表的なバンド／キーボーディスト

- ●イェンス・ヨハンソン
- ●ドン・エイリー
- ●マッツ・オラウソン
- ●ジミー・ウォルド
- ● YUHKI

メタル・バンドにおけるキーボードの活用も、その構成やスタイルによって千差万別だ。
まずはどういった形で楽曲に取り入れられているのか、その役割をタイプ別に見ていこう。

TYPE-3 多芸なメンバーがキーボードもプレイ！

メインのキーボーディストがいるわけでも、サポート・キーボーディストがいるわけでもないが“ここにビシッとキーボード・サウンドが欲しいんだよな”というところで、担当ではないメンバーがキーボードを演奏するというパターンもある。

古くはヴァン・ヘイレンの「ジャンプ」におけるエディ・ヴァン・ヘイレンの、“ここにシンセが欲しいから、ギターはひとまずクルっと背中に回してシンセを弾く”というタイプ。近年は同期の技術が向上したので、ライヴでもキーボード・パートは同期でカバーするという場合は多い。だが、ここぞでキーボードを生で弾くカッコよさというものもあるのだ。

古い例でもうひとつ、ラッシュのゲディ・リーもここぞでキーボードやシンセを弾くひとりで、ライヴにおいて、ときにベースを弾くのをやめて、シンセやキーボードを操る姿が見られた。さらにもうひとり、UFOのポール・レイモンドもギター兼キーボード奏者で、リズム・ギターを弾きながら、ここぞというところでキーボードやピアノを弾いていた。

▲ベースを弾き、歌い、鍵盤も演奏……しかもすべてが高難度。それをこなせるのはゲディ・リーだけだ。

シンガーがキーボードを弾くパターンはガンズ・アンド・ローゼズのアクセル・ローズなどがいるが、エヴァネッセンスのエイミー・リーは、ド迫力で歌っている途中にサッとキーボードのところに行って弾く姿がなんとも颯爽としている。

ドラム奏者で“ここぞでピアノ”と言えばモトリー・クルーのトミー・リーがいるが、X JAPANのYOSHIKIを忘れてはならない！　ファンはラスト・ライヴの「ENDLESS RAIN」をまず思い浮かべるかもしれないが、同ライヴでの1回目のアンコール最後に、満身創痍でたどり着いてピアノを鳴らす「Forever Love」も感涙必死です。

▶代表的なバンド／キーボーディスト
- ●ヴァン・ヘイレン
- ●ラッシュ
- ●ガンマ・レイ
- ●アクセル・ローズ
- ●トミー・リー

TYPE-4 プログラミング／ライヴでのサポート・キーボーディスト

プログラミング、同期という技術が飛躍的に向上したことで、ライヴにおいてもそれらを活用するヘヴィメタル・バンドは激増している。少し前までは、あらかじめ録音された音をライヴで使うのは、どちらかというと良くないこととして捉えられていた感もあるが、それによってスタジオ・アルバムの楽曲をよりダイナミックなサウンドで再現できるのだから、現在は“同期を活用せずにどうするよ”という具合になってきている。

それこそメジャーなバンドのデフ・レパードから新世代のプログレ・メタル・バンドとして注目されているポリフィアまで、さまざまなスタイルで同期が使われている。それをステージで大々的に使用しているラムシュタインやアマランス、メンバーにプログラミング（サンプラー）担当のメンバーがいるスリップノットなど、これらのスタイルは今後のヘヴィメタルでも追及されていくだろう。

またライヴにおいて、同期ではなく、あくまでもサポート・キーボーディストを起用して、楽曲の別の側面を際立たせるというパターンもある。オジー・オズボーンはパーマネントなメンバーとは別のキーボーディストを雇うことが多く、ドン・エイリーやジョン・シンクレアなど、これまでに数多くのプレイヤーが彼のライヴを支えてきた。

日本のバンドにもこのパターンは多く、聖飢魔Ⅱの準構成員である怪人松崎様、筋肉少女帯の三柴理、陰陽座の阿部雅宏などは、名物ライヴ・サポート・キーボーディストとして知られている。普段は目立たないかもしれないが、ライヴ・サウンドを縁の下から支えるキーボード・プレイヤーだ。

Photo by Risa Kozai

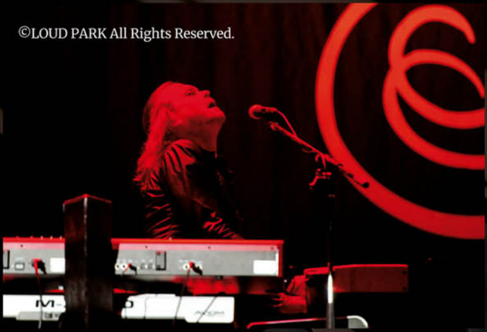
▲“超絶技巧ロック・ピアニスト”と言えば三柴理。筋肉少女帯での橘高文彦とのバトルは圧巻！

▶代表的なバンド／キーボーディスト
- ●デフ・レパード
- ●スリップノット
- ●オジー・オズボーン
- ●聖飢魔Ⅱ
- ●陰陽座

Analysis-2 サウンド・スタイルの違いによってキーボードの使い方に特性はあるのか！？

前項では、バンドのメンバー構成を主眼にキーボードの使われ方を見てきたが、これがサウンド・スタイル別となると、その活用方法に傾向はあるのだろうか。ここではメタル内ジャンルごとに、キーボードの登場パターンをチェックしていこう。

©LOUD PARK All Rights Reserved.



▲ヨアキム・スヴァルベリ（オーペス）。前任ペル・ヴィベリの演奏もそうだったが、オーペスをヘヴィたらしめるためにオルガンの音は絶対不可欠。

STYLE-1

王道ハードロック／ヘヴィメタル

まず［王道ハードロック／ヘヴィメタル］に関して言うと、そのルーツは1970年代に活躍したディープ・パープルやユーライア・ヒープなど、ハモンド・オルガンを使用したハードロック・バンドにまで遡ることができるだろう。

ではなぜハモンド・オルガンだったのか。その答えは、簡単に言えばヘヴィな音を出せる電子鍵盤楽器がそれしかなかったから。最初期サンプラーといえるメロトロンは、まだ迫力のある音が出せなかったし、開発されたばかりのシンセ（モーグ・シンセサイザー）も、まだヘヴィなサウンドで生かすことは難しかった。それはブラック・サバスでさえそうで、彼らがシンセをヘヴィさの演出にうまく使えていたとは言いがたい。

そこへいくとハモンド・オルガンはほかの楽器に負けない音圧があり、また回転するホーンを持ったレスリー・スピーカーと組み合わせて使用すると、さらに厚みのある攻撃的な音を出すことが可能だった。オーペスやスピリチュアル・ベガーズ、ダットサンズなど、現代のヘヴィロック・バンドのなかでもハモンド・オルガンを愛好する向きが多いのは、このルーツに基づいたものと言える。

時代は進み、シンセやエレクトリック・ピアノの性能は飛躍的に向上。メインストリームの王道ヘヴィメタル・バンドが、それらを導入していく。だが、1980年代中頃には、序章でも記述したように“キーボード＝軽い音”という考え方も生まれた。ひとつには1970年代後半からのテクノ、ニューウェイヴといったシンセや電子音を使ったライトな感覚の音楽の流行が原因だったと思われる。ともに1986

鍵盤巨匠名盤選 1

●イェンス・ヨハンソン

Photo by Masayuki Noda

スウェーデン出身のイェンス・ヨハンソンは、クラシックの手ほどきを受けるとともに、ジョン・ロードなどハードロック・キーボーディストの影響も同時に吸収。そのネオ・クラシカルなプレイ・スタイルは、彼が参加したどのバンドでも強力に発揮されている。代表的なのはイングヴェイ・マルムスティーンと渡り合って速弾きソロをぶちまけている「ライジング・フォース」だろうか。現在も参加しているストラトヴァリウスでも名演目白押しだが、この1曲と言えば「ブラック・ダイアモンド」だろう。兄のアンダース・ヨハンソンとのヨパンソンでもネオ・クラシカル炸裂で、イングヴェイが参加した「オール・オポーザブル・サムズ」では華麗さが極まっている。

▶厳選！
『ヴィジョンズ』
ストラトヴァリウス

鍵盤巨匠名盤選 2

●ファルク・マリア・シュレーゲル

ドイツ出身のパワー・メタル・バンド、パワーウルフのキーボーディスト。全員コープス・メイクをしていたり、当初はイロモノかな？と思っていたのを深く反省。ジューダス・プリーストやアイアン・メイデン直系の王道メタルと、ファルク・マリア・シュレーゲルの奏でるチャーチ・オルガン・サウンドとの融合は感動ものだ。堂々たるメロディを彩るファルクのキーボードは、彼らの音楽の気高さの大部分を担っている。「Wolves Against The World」や「Let There Be Night」といった大作では、特に彼のチャーチ・オルガン・サウンドが効果を上げている。それは最新作『Call Of The Wild』でも不変だった。コープス・メイクが似合う線の細いヴィジュアルもポイント高し？

▶厳選！
『Call Of The Wild』
パワーウルフ

鍵盤巨匠名盤選 3

●ツォーマス・ホロパイネン

▶厳選！
『ヒューマン・ネイチャー』
ナイトウィッシュ

フィンランドのナイトウィッシュを世界的バンドに押し上げたのが、中心人物のツォーマス・ホロパイネン。筆者が最初に聴いたのは『オーシャンボーン』だったが、1曲目の「スターゲイザーズ」でのシンフォニックなキーボードとターヤ・トゥルネンのオペラティックな歌で聴かせるヘヴィメタルに度肝を抜かれたものだ。以降、アネット・オルゾン～フロール・ヤンセンとシンガーが変わるが、それでも変わらず人気を維持しているのは、ツォーマスの描くヴィジョンにブレがないからだろう。『エンドレス・フォームズ・モスト・ビューティフル』では「ザ・グレイテスト・ショー・オン・アース」という約25分の大作に挑み、最新作『ヒューマン・ネイチャー』は2枚組と、やる気充分です。

年の発表であるアイアン・メイデン『サムホエア・イン・タイム』、ジューダス・プリースト『ターボ』でのギター・シンセの使用、またヴァン・ヘイレン「ジャンプ」（1984年）、ヨーロッパ「ファイナル・カウントダウン」（1986年）でのシンセ・サウンドをして、“ヘヴィにあらず”と嫌悪したメタル・ファンも少なからずいた。

それが1990年代中頃になり“1970年代のハードロック”が再評価され、あとに触れるがプログレ・メタルやシンフォニック・メタル、ゴシック・メタルなどが登場するなかで、ヘヴィな音楽を盛り立てる手段としてキーボードこそが効果的であるということが再発見される。いや、“むしろ活用しない手はない”という流れが生まれてきた。今ではアイアン・メイデンがシンセのアレンジを使ったところで誰も批判しないし、ドラゴンフォースやパワーウルフなど現代のパワー・メタルやメタルコアのバンドも、多くはキーボード・サウンドをアレンジにとり入れている。

STYLE-2
メロディック・ハード＆メタル

同じ王道系でも［メロディック・ハード＆メタル］ならば、キーボードこそがサウンドの要！と言える。

前項でも“キーボード＝軽い音”という捉え方が生まれたと書いたが、当時はゴージャスかつ厚みのあるキーボード・サウンドを持ったエイジア、ジャーニー、ボストンなどが空前のヒットを飛ばし、キーボード入りハードロックこそがメインストリームの音楽だったのである。それもまた、キーボード＝軽いという考えの遠因にもなったのでは……とも思うが、サウンドをきらびやか＆ゴージャスに演出するために使用されるキーボードこそが、メジャー級バンドの証とも言えた。

現在メロハーとカテゴライズされるゴットハードやエッジ・オヴ・フォーエヴァー、ライオンヴィルなどは、80年代のメジャー級バンドの音楽性を継承しているわけで、“キーボードがなければメロハーにあらず”と言えるぐらい、そのサウンド作りにおける重要度は高い。

STYLE-3
スラッシュ＆デス・メタル

そんなメインストリームの音楽と真逆の方向性として、ヘヴィさを極めるべくアンダーグラウンド・シーンから登場したのがスラッシュ・メタルだった。

そこでは、サウンドを華やかに、カラフルに彩るキーボードは不要。ザクザクと刻むギターで疾走することこそがスラッシュ・メタルのスラッシュ・メタルたるゆえんであり、同ジャンルのバンドの多くがキーボードレス編成だったのは当然と言えるかもしれない。

スラッシュ四天王と呼ばれるメタリカ、メガデス、スレイヤー、アンスラックスのデビュー当時は、キーボードになど目もくれないという感じだった。四天王はもちろんエクソダスやオーヴァーキルの近作を聴いても、キーボード不要のスタイルは基本的に変化はない。

スラッシュのさらに上のアグレッシブさを目指したデス・メタル系バンドにとっても、キーボードは必要なものではない。

まったく使用していないケースも多いが、ことメロディック・デス・メタルに関して言えば、キーボードがメインの楽器として使用されるケースが多くなる。イン・フレイムスやアーチ・エネミーなど、曲によってはキーボード・サウンドを用いて雰囲気作りを行なっている場合もある。

そのメロデスにおけるキーボードの、ひとつの理想形を提示したと言えるのがチルドレン・オブ・ボドムだろう。彼らのキーボードは添え物ではなく、要所でギターと渡り合ったり、スリリングなフレーズや印象的な音色を響かせて楽曲全体を引き締めたりと、キーボードがメインの楽器として躍動している。

鍵盤巨匠名盤選 4

●ヤンネ・ウィルマン

©LOUD PARK All Rights Reserved.

▶厳選！
『ブラッドドランク』
チルドレン・オブ・ボドム

チルドレン・オブ・ボドムという唯一無二のメロデス・バンドでキーボード奏者を務めたヤンネ・ウィルマン。もともとはジャズ系のプレイヤーだったというが、たぶんそのメタルと異なったルーツが、COBを特異な存在としていた理由のひとつだったかもしれない。アレキシ・ライホと競い合うような速弾きプレイだけでなく、各楽曲の雰囲気を盛り立てるべき音色をチョイスし、的確なタイミングで添えるセンスもずば抜けていた。それは彼の別プロジェクト、ウォーマンやティモ・コティペルトのソロ・アルバムでも発揮されている。残念ながらCOBの活動は終わってしまったが、今後の活躍に期待したい。

STYLE-4

プログレッシブ＆シンフォニック・メタル

ヘヴィメタルとキーボードの関係性が密になっていくきっかけのひとつは、1990年代中頃のプログレッシブ・メタルとシンフォニック・メタルの勃興が大きいのではないか。そして“キーボードが入っているメタル”と言えば、このジャンルを最初に浮かべる人も多いだろう。

プログレ・メタルのルーツには1970年代のプログレがある。リック・ウェイクマンやキース・エマーソンと多彩な音色を曲によって使い分けるセンスは同ジャンルの重要な要素であり、そのパイオニアたるドリーム・シアター（歴代全キーボーディストが超個性的かつテクニシャンだ！）を始め、シンフォニーXやセブンス・ワンダーなど、ギターと渡り合う、もしくは凌駕するほどのテクニカルなキーボードがプログレ・メタルの大きな魅力だ。

シンフォニック・メタルは、その名のとおりクラシックの交響曲の如き、壮大にして華麗なサウンドをまとったヘヴィメタルであり、ラプソディ・オブ・ファイアやエピカなど、キーボードによって紡がれるストリングス、オーケストレーション・アレンジが、曲の最初から最後まで鳴りまくっているのが特徴だ。それをバンド編成において可能にするのがキーボードであり、これなくしては存在し得ないジャンルといってもいいだろう。

●ジョーダン・ルーデス

鍵盤巨匠名盤選 6

Photo by Jerry Lofaro

恐らく現在のヘヴィメタル系キーボード界で、テクニックにおいて彼の右に出る者はいないと思われる。ドリーム・シアター加入前に同バンドのメンバーと組んだリキッド・テンション・エクスペリメントの「パラダイム・シフト」などで壮絶なプレイを聴かせていたが、バンド加入後のプレイもまた強烈だった。ギターのジョン・ペトルーシ、ベースのジョン・マイアングというテクニシャンたちに一歩も引けを取らないどころか、恐るべき速弾きからクラシカルなピアノまで、変幻自在のプレイ・スタイルを魅せつけている。そのテクニックには舌を巻くが、今年65歳という、以外にも高齢なのにもビックリ！

▶厳選！
『リキッド・テンション・エクスペリメント』
リキッド・テンション・エクスペリメント

●デレク・シェリニアン

鍵盤巨匠名盤選 5

Photo by Greg Vorobiov

いつまでも“元ドリーム・シアターの”と言われたくないだろう、と思うほど、同バンド脱退以後の活動で高く評価されている。トニー・マカパインやイングヴェイを始め、数多くのギタリストたちと共演していて、そのコネクションから彼のソロ・アルバムには名だたるギタリストが参加。アラン・ホールズワース、ヴァイオリンのジェリー・グッドマンと共演した「ワン・ウェイ・オア・ジ・アザー」のようなフュージョン・プレイもお手の物。近年は元ドリーム・シアターの盟友マイク・ポートノイやビリー・シーンらとサンズ・オブ・アポロを結成したのも話題となったが、そこでのプレイも最高。

▶厳選！
『サイコティック・シンフォニー』
サンズ・オブ・アポロ

STYLE-5

ゴシック＆ブラック・メタル

シンフォニック・メタルとの共通点が多いゴシック・メタルでも、シンセやピアノを駆使したクラシカルなサウンドがメインで使われているケースが多い。

ゴシックという言葉の意味は曖昧だが、欧州的な耽美的かつ宗教的雰囲気とイメージするなら、教会音楽を想起させるチャーチ・オルガンや冷ややかなシンセの音色は、そんなゴシックらしいサウンドの演出に絶大な効果を生み出す。ほとんどのゴシック・ロックと呼ばれるバンドはキーボードを使用していると言えるが、その好例はクレイドル・オブ・フィルスだろうか。ヘヴィなギター・サウンドのバックで鳴る、ホラー映画のワンシーンを想起させるような妖しげで、冷ややかなキーボードの音色は、彼らのゴシック・メタル・サウンドの柱のひとつになっている。

そこへいくとブラック・メタルの場合は、キーボードを使う派と使わない派に分かれるようにも思う。

同ジャンルの場合、アンチ・クライストを信条としているがゆえに宗教的な色は濃厚であり、エンペラーやディム・ボガーなどは、キーボードを活用した陰鬱かつゴシックな音色をアレンジに用いている。特にディム・ボガーは、まるで“ゲームのラスボス登場シーン”で流れる音楽の如き荘厳な響きで、ときには退廃的に、ときには華麗に、ヘヴィ・サウンドをドラマチックに演出している。

Column
テクノロジーの進化が如実に見える? メタル・キーボーディスト愛用機材の変遷と特徴

文：川口綾

キーボード・プレイヤーはハードロック／ヘヴィメタルに限らず、新たに発表される製品を次々と取り入れ、時代を象徴する音色を多数生み出してきた。

初期ハードロックで最も多用された［ハモンド・オルガン］は、和音演奏が可能で比較的簡単に大音量が得られたため、当時轟音のギターに対抗できる唯一の鍵盤楽器であり、ジョン・ロード（ディープ・パープル）やケン・ヘンズレー（ユーライア・ヒープ）などは、ハモンド・オルガンをマーシャル・アンプに接続し強烈な歪み音色を奏でていた。その頃シンセサイザー（電気的に音を合成するキーボード）も登場したが、まだ単音演奏しかできず音色も限られていたためハードロック分野では目立たない存在であり、70年代はハモンド・オルガンの隆盛が続いた。

70年代後期になると［シーケンシャル・サーキット］、［オーバーハイム］、［ローランド］、［ヤマハ］などから、和音演奏が可能なシンセサイザーが登場。スタジアム・ロックに代表されるスケールの大きな楽曲で、壮大なストリングス、きらびやかなブラスなどが多用された。80年代にはサンプリング機能を有した［E-mu製エミュレーター］、完全デジタルで硬質な音色を得意とする［ヤマハ製DX7］も登場。バロック音楽を彷彿させるパイプ・オルガンやクワイア（人声の合唱）、速弾きギターと渡り合う歪んだシンセ・リード音などで多用された。

90年代になるとシンセサイザーの音色数や発音数が飛躍的に上がり、さらにMIDI接続で複数の機種を同時に鳴らすことも容易となり、多数の音源をマウントした巨大なラックを持ち込んで演奏するプレイヤーも増加。プログレッシブ・メタルやシンフォニック・メタルといった、多種多様な音色を必要とするバンドで活用される。

また逆に90年代中期以降になるとアナログへの回帰も見られ、ハモンド・オルガンやアナログ・シンセサイザーをデジタルでモデリングした機種も登場。デジタルとアナログを共存させたサウンドも一般化していく。例えばインダストリアル・メタルなどでは、アナログ・モデリング・シンセサイザーを"リアルタイムでノイズをコントロールする楽器"として用いたりもしていた。

21世紀に入るとシンセサイザーはますます進化し、1台でも充分な音色や演奏が可能となる。それに伴い大掛かりなラックなどは減少し、鍵盤のセッティングは簡素化されていく。また安価な軽量モデルでも相当数の音色や音数を内蔵可能になり、ヤンネ・ウィルマン（チルドレン・オブ・ボドム）やヴァジーム・プルジャーノフ（元ドラゴンフォース）など軽量モデルのみで演奏するプレイヤーも現われた。

現代はソフト音源で過去の名機を再現する技術も高まっており、鍵盤台数は少ないながら往年の有名サウンドを再現するプレイヤーも多い。キーボード・サウンドの歴史は"テクノロジーの進化の歴史"でもあると言えるのである。

▲［コルグ製Kronos］（写真上）は21世紀を代表する機種で、ジャンルを問わず多くのキーボーディストが愛用。［ノード製Nord Lead 2X］（下）はアナログ・モデリング・シンセの定番で、ギター・ライクなリード音やフィルター操作でノイズをリアルタイムに操作するプレイに多様される。

▲クレイドル・オブ・フィルスの世界観を構築するのに不可欠なのが荘厳かつ冷淡な鍵盤のメロディ。すでに脱退してしまったが、リンドセイ・スクールクラフトはルックス面でもその効果を演出していた。

AND MORE
サンプリング・サウンドを用いるバンドたち

1990年代後半からは電子音楽機材のさらなる進歩があり、それを活用したさまざまなバンドが登場するようになる。エンター・シカリやアタック・アタック！など、ハードコア・メタルに電子音の導入を図ったエレクロニコアというジャンルも生まれ、テクノやトランスといったサウンドとメタルの融合のなかで、その橋渡し的にキーボードが重要な役割を担っている場合もある。日本のBLOOD STAIN CHILDは、基本はメタルコアと呼べる音楽性でありながら、ときにダンス・ミュージックばりの軽快なシンセが聴こえるという独自の方向性を見せている。

プログラミングを導入するバンドも増えている。ボディ・カウントやリンプ・ビズキットのようなラップ・メタルと称されるジャンルのバンドには、ターンテーブルやサンプラーを扱う専任メンバーがいる。"それもなんか軽い感じがするよな"という印象を払拭させたのがラムシュタインとスリップノットではないか。

ラムシュタインはテクノ風のリズムや軽めのキーボード・サウンドなどトランスの要素を用いながら、それを不穏なものとしてヘヴィなサウンドに溶け込ませるのに成功している。スリップノットはターンテーブルやプログラミングを、スリリングかつアグレッシブなヘヴィメタル表現に必要な楽器のひとつとして位置づけたと言えるだろう。また BABYMETALを始め、シンセや各種エフェクト音をライヴで同期させることもヘヴィメタルのライヴにおける常套手段になりつつある。

ひと口にキーボードと言っても多様さを極めていて、それを独自の音楽性創造のために活用する選択肢は無限に増え続けている。今後もヘヴィメタルというジャンルを拡大していく最重要ツールのひとつであることは間違いないだろう。

メタル×キーボードの魅力を大いに語る!

Interview

with YUHKI

本特集の最後は、やはりメタル・バンドのキーボーディストの言葉で締めくくりたい。今回は、ガルネリウスのキーボーディストであり、自身のプロジェクト“アルティマ・グレイス”も始動させたYUHKIに、ミュージシャンだからこそ感じる魅力や実演に伴う話を聞かせてもらった。

Live Photo by WHOKO

キーボードがいるべき帯域を各楽器のなかで見つけていく。

――いきなりですが、ズバリ、メタル・バンドにおけるキーボードの役割とは?

基本、キーボードがなくても成り立つジャンルだと思うんです。でも、そのなかでキーボードにできることっていうのは実は意外に多くて。基本リズムとしてドラムがあって、ルートを弾くベースがあってざっくり5度を弾くギターがあって……でも、1度・5度以外に3度のメジャー/マイナー・コードや幅を持たせたフレーズを弾くという役割がキーボードにはあると思うんですよね。

――当ジャンルのキーボードと言えば、やはりジョン・ロードがルーツと言えますが、時代ごとに、その役割やトレンドに変化は

Photo by Hidemi Otsuka

あったと思いますか？

時代によって、だいぶ変わっていますよね。70年代はオルガンがメインで、シンセサイザーはアナログだったので、現代みたいにサンプルを生かした生楽器のシミュレーションができなかったんです。当時は実際にテープを使ったメロトロンくらいしかなかったので。80年代なかばに入ってからはデジタル化が進み、サンプラーが出てきてから生楽器の音がそのまま演奏できるようになって、一気に音色のバリエーションが広がったというか。ハードロックにしろプログレ系にしろ、そういう音色の変化があり、サウンドはだいぶカラフルになったと思いますね。

――はやり、機種の進化というのが大きいんですね。

そうですね。90年代にはデジタル化がさらに進んで、もちろんパソコンやデジタル機器の向上もあり同期音楽が流行ってきて、打ち込みを聴きながらラウドなギターをかき鳴らす新しいメタルが出始めてきましたよね。2000年くらいからは、メロディック・メタル界隈で70～80年代の音楽が見直されたように個人的には感じていて。そこから多様化して、何でもありの時代になったと思います。

――音色という点ではどうでしょう？

オルガンはハードロックの基本で、ギターと同じように歪ませるんです。それがものすごくカッコよかったし、ギターにないトーンが出せる。そのスタイルを広めたジョン・ロードは革新的な人で、特にハードロック・キーボードの礎になった人だと思います。もちろんその流れにはドン・エイリーなどいろいろな人がいますけど、次に僕がハードロック／ヘヴィメタルのキーボードのあり方を変えたのはイェンス・ヨハンソンだと思っていて。今度はギターと対等に、オルガンではなくシンセサイザーを歪ませてギターと同じようなリード・フレーズを弾くという。

――しかも、その相手がイングヴェイであり。

彼はヤン・ハマーからの影響が大きいと思うんですけど、その姿が衝撃的で。イングヴェイと対等に闘う速弾きテクニックを持っていて、しかもグルーヴ感もすごい。

――ルックスもパフォーマンスも、それまでのプレイヤーに比べて派手でしたよね。

そうそう。イェンスは音もそうですけど、新しいスタイルを作った人だと思います。あんな爆音のギターがいたら、大概のキーボーディストはあきらめます（笑）。シンセサイザーをリード楽器として弦楽器のように弾くってスゴいなって……僕も大いに影響されましたね。

――メタル・バンドにおけるキーボードの使い方と、ポップス・バンドでのそれに、違いはあるものですか？

実は、個人的には大きな違いはないと思っていて。例えばメロディアス・ハードロックって、ギターを抜いたら普通のロックやポップスでもあるし。だから気持ち的なものでしょうね。メタルな気持ちで弾けばメタルになる……と思って僕はやってきましたから（笑）。

――音色的にも、鍵盤パートだけ聴くと同じようなことが多いんですか？

今は市販のキーボードにもスゴい数のプリセットが入っているので、それを選んで弾けば、大概の音は出るんです。ただ、それをヘヴィメタルのアンサンブルでそのまま弾いても、まったく聴こえない。なぜかと言うと、そういう音圧のなかで耐えられるように作られていないから。ジョン・ロードがなぜオルガン歪ませたかというと、ギターに対抗するためじゃないですか。イェンスもリードの音を歪ませているんですよ。つまり倍音をつけることによって、うるさいなかでもヌケを良くしようとしているということなんです。

――それは、音量を上げればいいということではないんですね。

そういう問題じゃないんですね。出音の帯域をイコライザーなどで調整したり音作りしないと、ヘヴィメタルの音圧のなかではまったく役に立たないんですよ。キーボードがいるべき帯域の音を、各楽器のバランスのなかで見つけていかないといけない。

――では、当然バンドによってそれは変わってくるという。

特にライブではね。やっぱりメタル・アンサンブル用の音を作らないと歯が立たないというところが、ポップスとの大きな違いだと思います。本当にヒドいんですよ、歪んだギターの音圧って（笑）。

――ハハハ、確かに。さて、メロディアスなフレーズをキーボードで……というのは王道の使い方ですが、キーボードの音色はバンドの雰囲気作りにも大きく作用しますよね。

やっぱり世界観を作るためにキーボードの音を使うというのは、もちろんありますよね。例えばヘヴィな部分と静寂との対比でキーボードが活躍するのもありだと。

――まさにブラック・メタル的な活用法ですね。その演出で、彼らの残虐性がより際立つというか。

それはすごくありますね。例えば教会のパイプ・オルガン的なものであるとか、はたまたシンセ特有の無機的な音であるとか。そういう雰囲気作りはギターやベースじゃできないので、重宝されているところは間違いなくあると思います。

メタルの気持ちで弾けばメタルになる……僕はそう思ってやってきましたから！

キーボードのアレンジって作曲に近いものがある。

――では、実際のプレイについて聞かせてください。やはりメタル・バンドの場合、ギタリストがリフを作ってきて曲ができあがるというパターンが多いと思います。そこへどうキーボードを絡めていくのかを考えていくのが、アレンジのスタートになるものですか？

例えばギタリストが曲を作ってきて、“これに何か入れてよ”と言われたら、リフが印象的であればパープルみたいなスタイルで一緒にリフを弾いてみる。ヴォイシングを変えてそのリフに幅を持たせるとか。キーボードのアレンジって、言ってみれば作曲に近いものだと思うんです。新たにどの音でどういう雰囲気の音を入れたらカッコいいかを自分なりに考えるわけですね。だからけっこう発想が大事で。音色によっても出てくるものが違いますし。

――アンサンブル内での立ち位置のイメージはあるものですか？

僕は“もうひとつのギター”を兼ねていると思いながらやっています。ギターの存在感はすごく重要で、例えばソロではバッキングが当然抜けるわけで、そこをカバーする音域に変えるんです。そうすると厚みが増すというか。歪んだオルガンとか、下の音域も使いながらサポートするっていう

YUHKI的 ハードロック／メタル・キーボード名演選

『メイド・イン・ヨーロッパ　ディープ・パープル・ライヴ・イン・パリ』

「紫の炎」
ディープ・パープル
奏者▶ジョン・ロード

言わずと知れたディープ・パープル第三期の名曲「紫の炎」。ジョン・ロードによるハモンド・オルガンでのソロは、ロック・テイスト溢れる前半と、クラシカルな4度進行に乗せた後半からなる劇的な起承転結を持つ名演！　スタジオ盤はもとより、ライヴのたびに異なるインプロヴィゼーションが楽しめる。なかでもこのライヴでのテンション溢れるプレイは、ロック・キーボードの真髄を感じる！

『アイ・サレンダー』

「スポットライト・キッド」
レインボー
奏者▶ドン・エイリー

歴代キーボーディストのなかで最もテクニカルでありつつ、メロディアスでキャッチャーなフレーズを必ず入れてくるドン・エイリー。ヤマハ製CS80を使った奇想天外なこのシンセ・ソロを聴いたとき、私は度肝を抜かれた！　1コードのフリーな尺でのソロだが、機材の特徴を生かしたとしても、こんな発想が出てくる彼はスゴすぎ！　リッチーはこれを初めて聴いたとき、どう思ったのだろう……！？

『トリロジー』

「トリロジー・スーツ Op:5」
イングヴェイ・マルムスティーン
奏者▶イェンス・ヨハンソン

イングヴェイ・マルムスティーンの出現はロック・ギター史においても革新的な出来事だが、彼のバンドのキーボーディスト、イェンス・ヨハンソンの出現にも同じことが言えると思っています。彼の流麗な高速ソロは、多くのキーボード・キッズを魅了したし、もちろん私も影響を受けたそのひとり。オーバードライブのかかった鋭いシンセ・リードを武器に、クラシカルなフレーズを奏で、堂々とイングヴェイと渡り合うソロ・バトルのセクションは大きな聴きどころだ！　また映像化されている『トライアル・バイ・ファイアー　ライヴ・イン・レニングラード』では、プレイのみならずイェンスのお茶目なアクションも観どころ！

『イメージズ・アンド・ワーズ』

「メトロポリス」
ドリーム・シアター
奏者▶ケヴィン・ムーア

ケヴィン・ムーア、デレク・シェリニアン、ジョーダン・ルーデスという歴代キーボーディストが、三者三様の個性を放つドリーム・シアターの多くのアルバムのなかでも、『イメージズ・アンド・ワーズ』は語り継がれるべき名盤だと思う。同アルバムにおけるケヴィンのプレイは、テクニカルでトーンもカラフルだ。伝統的なシンセ音色に加え、キラキラしたデジタル系のモダンな音色をアンサンブルなどに投じ、曲の良さと相まってメタルに新たなスタイルをもたらしたと言えるだろう。初期3枚のアルバムを残し脱退してしまったが、個人的にはもっと彼のプレイが聴きたかったと思うほど、センス溢れるキーボーディストであった。

のを無意識にやっています。
——音色はコツコツ変えるものですか？

そうですね。音色ごとに得意な機種があるので、僕は5台も6台も使っちゃうんですけど、そのなかでも使用頻度の高い機種は頻繁に音色を変えています。

——それは1曲のなかでも？

変り目の1拍前で変えるという感じで、ものすごく忙しいですね。ガルネリウスみたいなバンドは1拍がものすごく短いから、今でこそやっと機材側の切り替えが追いついてきましたけど、昔は音切れしちゃうから、1小節犠牲にしないと変えられないとかありましたよ。

——逆に、終始鳴らせばいいものでもないので、そのさじ加減も難しいところなのでは？

そうですね。最初のうちは入れられるだけ入れていたけど、全篇にわたってやっても結局クドいし飽きるわけですよ。だから抜くことも仕事で。ここはまったくない、ここから入ってくると劇的になるとか、緩急はもちろん大事です。

——ちなみに、待ちのタイミングってなにをやっているものでしょう？

うしろを向いて水を飲んでます（笑）。ただ、僕がやっているバンドに関しては、ほとんど休めないんですけど。

——確かに。また位置が固定となるため、お客さんへのアピールも工夫が必要ですよね。それこそ鍵盤を前に倒すとか。

一時期SYUが“YUHKIさん、アレやりましょうよ”って言い出したんですけど、傾いてるから弾きにくいんですよ！　照明によってはまったく見えなかったり、汗かくとスベるとか。ただ試しにやったらお客さんが喜んでくれて、やっぱりやらなきゃダメかなと（苦笑）。ロックのパフォーマンスって見せることがすごく重要だと思うから、それがちょっとデフォルトになってますね。

——そういう大変さもあるわけですね（笑）。さて、いろいろとメタル的キーボードの話を聞かせてもらいしたが、今後、キーボードの入ったメタル・チューンを聴く際に、ここを意識するとよりおもしろいよというポイントはありますか？

バンドって、多くの人は全体が合わさった音を聴きたいわけじゃないですか。そうなると、その世界観に溶け込んでいる、自然に馴染んでいる人がいい仕事をしているな……と最近思うようになってきまして。何が欠けてもダメだと思うし、そのなかで“あ、こう聴こえるのはキーボードがこういう音の出し方をしているからなんだ”ということは、あとでだんだんわかってくれればいいことで。

——やはり、ひとつのパートに注目すればいいというものではありませんね。

ライヴでも、全体の音としてうまく馴染んでいればいいと思いますね。もちろん自分をアピールしたい曲があれば、それはいちメンバーとしてそういう部分を作るべきだとも思います。それをアレンジするセンスを身につけると、キーボードももっと注目されるんじゃないかな！

最新プロジェクト“アルティマ・グレイス”が始動！

ガルネリウス、アルハンブラを始め、さまざまなバンドでもゲスト演奏を行なうYUHKIだが、新たに始めたプロジェクト“アルティマ・グレイス”が待望のデビュー作をリリース！

曲を作るときもメンバーの顔が見えているからキーボードのパートもそこから導かれるんです。

最初は自分だけの構想で“こんな曲で、こういう人たちで〜”と考えて作曲をしていたんですが、その楽曲に賛同してくれた人が集まってくれてというのがきっかけなんです。

シンガーは元ナイトウィッシュのアネット・オルゾンなんですが、彼女の歌声がすごく印象に残っていて。“僕の曲のメロディを歌ったら合うよな”って勝手に思っていたら、ダーク・エレメントのメンバーとして来日した際にとある縁で会うことができて、アルティマの音源を渡したんです。それがどんどんタイミング良く形になっていって。

アルティマ・グレイスでのキーボードでも、ほかのバンドでのプレイでも、基本同じ意識で演奏しています。昔は世界一速く弾くことしか考えていなかった時期もありますけど、やっぱり総合的なもので、それぞれの楽器をいい形で収めたい。曲を作るときもメンバーの顔が見えているからキーボードのパートもそこから導かれるんです。ただキーボードって個性が出しにくいものでもあるので、そのなかで“この音はYUHKIだ”ってわかってもらえたら嬉しいですね！

『アルティマ・グレイス』
キング／KICS-4045
※3月16日発売

THE 50 BEST ALBUMS OF 2021 から考察する

日英メタル・ミュージック・ムーブメントの同異点

英『METAL HAMMER』誌が毎年発表する《THE 50 BEST ALBUMS》。1年間のリリース作品から、同誌編集部＆ライター陣による投票にてトップ50を決定するこのランキングは、欧州での最新メタル・ブームを知る大きなヒントとなるものです。ある意味、かなり視野の広いラインナップにつき、日本人のメタル観とはまた違ったおもしろさと驚きも感じられるのでは？　そこで本年も、2021年のランキングを読み解きながら、日英の流行や嗜好の違いを見ていきましょう。みんなメタルで、みんなイイ！

本稿の識者

山本彦太郎　1974年生まれ、埼玉県出身。個人的な2021年音楽トピックと言えば、キング・クリムゾン（最後の？）日本ツアーに尽きます。リリース作品ではフロスト*の『デイ・アンド・エイジ』がベストでした。

川嶋未来　1970年生まれ。10代の頃にヴェノムに出会い、人生を狂わされる。エクスペリメンタル・メタル・バンドSighのヴォーカル、ピアノ、フルート、尺八など担当。今年12枚目のアルバムをリリース予定。

舩曳将仁　1974年生まれ、大阪府藤井寺市出身の音楽ライター。2021年にライナーノーツを担当した『シェイ・ケイン』は、80年代王道メタル＆女性シンガーという、僕の好みのど真ん中ストライクでした。

脇田涼平　海外アーティスト・ブッキング・チーム［RNR TOURS］代表。音楽情報サイト［RIFF CULT］、［PUNKLOID］運営。著書に『ブルータルデスメタルガイドブック』、『デスコアガイドブック』、『Djentガイドブック』。

荒金良介　洋邦問わず、正統派からニューメタル、ラウド・ロック……加えて、ハードコアやパンクも大好物。今回TOP50にターンスタイルとジ・アームドがランク・インしていて、個人的にアガりました。

1 ゴジラ
フォーティチュード

前作『Magma』(2016年)でつかんだ独自のサウンド構築を継承・進化させつつ、アンビエントや民族音楽的アプローチの掘り下げも進めた第7作。ノイジィな単音リフや分厚くエフェクト処理されたコーラスなど、トレードマークを全部盛り込んだような①を始め、③のシーケンシャルなタッピング風フレーズ、ワーミー・ペダルを用いた⑤、お得意のピック・スクラッチを挟んだ⑧⑪など、記名性の高いサウンドは大きな武器と言えるだろう。そのうえでレゲエ・テイストの⑥⑦、デヴィッド・ボウイ的なバラードの⑩がいい変化球となっている。

2 トリヴィアム
イン・ザ・コート・オブ・ザ・ドラゴン

何か吹っ切れたかのようなフレッシュなパワーの発露と、中堅ならではの安定感が見事に融合した10作目。②③⑥⑨を始め中毒性が高い作品で、グロウル／クリーンの使い分けや楽曲の展開も自然かつ説得力があり、そこに小手先感は微塵も感じない。緊張感を盛り上げる幽玄なイントロSEの①はエンペラーのイーサーンが手がけたもの。

3 アイアン・メイデン
戦術

日本語タイトルや侍アートワークが目を惹く通算17作目。2枚組全10曲中7分超の楽曲が7曲と大作傾向は相変わらずで、[ディスク1]の②のようなファスト・ナンバー不足を感じることも否めない。しかし、堂々たる[ディスク1]の①やフォーク調が珍しい③、[ディスク2]の大曲3曲などドラマティックな楽曲群が、衰えぬ覇気と才気を証明してくれている。

4 EMPLOYED TO SERVE
Conquering

紅一点ジャスティン・ジョーンズ(vo)を擁する、2012年結成のUKメタルコア・バンドの4作目。ツイン・ヴォーカル＆ツイン・ギター編成ながらメロディ性は稀薄で、ジャスティンのヒステリックなシャウトと一丸となって突き進むリフ攻勢の異様なテンションの高さに瞠目させられる。色を添える積極的なギター・ソロも好印象。

5 SPIRITBOX
Eternal Blue

女性ヴォーカルのコートニー・ラプランテを擁するカナダの4人組メタルコア・バンドのデビュー作。穏やかなクリーン・ヴォーカルの①から2020年代型エヴァネッセンス・タイプかと思いきや、グロウルも用いるコートニーの二面性に驚かされる。ジェント的な③⑩、ヒップホップを通過した⑨など、表現の幅にも注目したいバンドだ。

6 マストドン
Hushed And Grim

2枚組全15曲の大作となった8作目。いつもながらの忙しないリズム、凝ったギター・リフとパワフルなサウンドながら、いい意味での洗練やキャッチーさが際立っている。[ディスク1]の③④⑤⑦⑧や[ディスク2]の③⑦などは驚きも大きいが、説得力とクオリティの高さが有無を言わさない。作曲センスと表現力の幅の広さに敬服する作品だ。

7 コンヴァージ＆チェルシー・ウルフ
Bloodmoon: I

アメリカのマスコア・バンド、コンヴァージが、女性シンガー・ソングライターのチェルシー・ウルフとコラボレーションした作品。本作のきっかけとなった2016年の共演ライヴの、ポストロック／ドゥームというコンセプトを引き継いだヘヴィかつフォーキーな内容で、①②⑩などでその化学反応の成果が感じられるだろう。

総評

幅広い作品が顔を揃えたランキング そこから見える2021年のメタル情勢と日英の差異は？

分析：山本彦太郎

この英『METAL HAMMER』誌企画《The 50 Best Albums Of 2021》は、2021年12月発売の356号に掲載されたもので、例年どおり同誌編集スタッフやライターの投票を集計したものだということを、予めお断りしておきます。

まずランキングを振り返ってみると、デフトーンズの『オームズ』がトップだった昨年と比べて、特にトップ3は日本人でも受け入れやすい結果になったのではないでしょうか。ウェブでは投票者32人の個別ランキングも公開されていますが、ゴジラの『フォーディチュード』が20人（内トップ3に投票したのが6人、以下同）、アイアン・メイデンの『戦術』が10人（6人）、トリヴィアムの『イン・ザ・コート・オブ・ザ・ドラゴン』が14人（4人）から票を得ており、注目作品がしっかり評価されたという印象。

ちなみに、同個別ランキングの各1位のみで見てみると、アイアン・メイデンが4人でトップ、SPIRITBOX（総合5位）が3人、トリヴィアムとMøl（総合9位）、THE RUINS OF BEVERAST（総合11位）、キング・ウーマン（総合30位）がふたりで、なんとゴジラはひとりという結果。なかでもSPIRITBOXの『Eternal Blue』は、デビュー作にも関わらず12人が名前を挙げており、期待の新人としての注目度の高さがうかがわれます。

その『Eternal Blue』やマストドン（総合6位）の意欲作『Hushed And Grim』などの日本盤がリリースされていないのは、なんとも残念なところ。

†

次にジャンルやスタイルの傾向を見ていくと、大雑把にメロデスを含むデス・メタル系が7バンド、パワー・メタルを含むヘヴィメタル系が7バンド、ドゥーム／ストーナー／スラッジが6バンド、ブラック・メタル界隈が5バンド、メタルコアが6バンド、その他……となっています。

ドゥーム系やブラック・メタルへの注目が高いのは相変わらずで、日本ならドリーム・シアターの『ア・ヴュー・フロム・ザ・トップ・オブ・ザ・ワールド』（総合50位）、KK'sプリーストの『サーモンズ・オブ・ザ・シナー』（総合42位）、ハロウィンの『ハロウィン』（総合19位）などはもっと高順位だったのではないかと思います。

また、これも恒例の"これはメタルじゃないんじゃない……！？"枠も健在で、エレクトロニックのPERTURBATOR（総合40位：8人が投票）、シンガー・ソングライターのLingua Ignota（総合22位：6人投票）、ヒップホップのBACKXWASH（総合27位：6人投票）、フォークのヴァードゥルナ（総合20位：6人）などが名前を連ねています。

昨年のランキングでもBACKXWASHの作品に投票していたライターのスティーブン・ヒル氏は、今年の個別ランキングではなんと1位に推挙。確かに聴き応えのある作品ではありましたが……。同様にLingua Ignotaも前作が一昨年のランキングで6位となっており、熱心なファンがいるのかと想像ます。

†

国別のデータでは、アメリカが19バンド、英国が13バンド、北欧が6バンドと平常運転な印象ですが、やはり長らくメタル不毛地帯の観が強かったフランスのシーンが、ゴジラの躍進でどう変わっていくのかは興味深いところ。西アフリカとのつながりも強く、またトラディショナルからモダンまでさまざまな文化が入り交じる国だけに、今後もアッと驚くようなバンドが生まれるかもしれません。

一方で、これは活動サイクルやここ数年の情勢に左右されるためあまり意味がない論点ですが、アジアのバンドがゼロというのは少し残念なところでもあります。

個人的な感想としては、今回は全50作を聴いて"これはあとで買おう"とチェックしたものが例年と比べ少なかったような気がしますが、メタルコアというスタイルの変容やブラック・メタルの換骨奪胎など、現在進行形の模索が感じられたかと思います。さて来年はどのような出会いがあるでしょうか。

8

RIVERS OF NIHIL

The Work

コンセプチュアルな作風を得意とするアメリカのテクニカル・デス・バンドの4作目。アグレッシブなアンサンブルはもとより、クリーン・ヴォーカルも魅力のひとつで、アコースティック・ギターが主導するドラマティックなバラードの⑩なども引き込まれる。デビュー作から連作となっている「Terrestria」の第4章も収録。

9

MØL

Diorama

2014年にデビューしたデンマークのブラックゲイズ・バンドの2ndアルバム。ポストロック／シューゲイザー的浮遊感のあるサウンド構築の完成度もさることながら、金切りヴォーカルやブラスト・ビートなどブラック・メタル的要素もしっかり主張する頼もしい作品だ。③⑦などはその絶妙な構成力が見事で爽快ですらある。

10

UNTO OTHERS

Strength

2017年に米オレゴンで結成されたIdle Handsが改名して発表した2作目。オーセンティックなヘヴィメタルに根差しながらも、ガブリエル・フランコ（vo、g）の朗々とした歌声やクリーン・ギターが、ザ・キュアーやジョイ・ディヴィジョンなどゴシック・ロック的な雰囲気も醸し出す。懐かしくも新しい不思議な作品だ。

比較・考察 2

日本ファンとの温度差と欧州メタル・ファン的嗜好

分析：川嶋未来

＜日本との温度差＞という視点からこのランキングを見てみると、まず一番に思うことは、“エクストリーム系多すぎじゃね？”ということだろう。

何を持ってエクストリームとするかという定義は難しいところだが、少なくとも“正統派メタルとは言いづらいもの”という観点では、ピックアップされた50枚のうち、半分以上がそれに該当すると言えそうだ。しかも相当マニアックなアーティストも入っているのが興味深い。カーカスやアット・ザ・ゲイツあたりのビッグ・ネームは、ここ日本のTOP50に入ってきても不思議はないが、ルーマニアのDORDEDUなどは、名前すら聴いたことがないという人がほとんどだろう。

なかでもひと際＜日本との温度差＞を感じさせるのが、スラッジ系。そのスタイルは千差万別だが、BOSS KELOID、DIVINE AND DISSOLVE、DVNE、キング・ウーマン、アメンラー、アーン、さらにはコンヴァージとチェルシー・ウルフのコラボと、スラッジのタグをつけられそうなアーティストは実に7組も登場している。日本の同企画があれば、これらでランク・インするバンドはひとつもないだろうし、コンヴァージ以外は日本盤すら出ていない。ポスト・メタル色も強いDVNEなどは、名門［メタル・ブレイド］からのデビューなのだが。“メロディックでドラマチックな音楽が好まれる”とされるここ日本では、その対極にあるようなサイケデリックでモノトーンすぎる音楽は、ウケづらいのだろう。

さらにスラッジや、いわゆるドゥーム／ストーナー系の音楽（と言うかエクストリーム・メタル全般だが）は、マリファナでストーンして楽しむ音楽だという大前提もあり、そのあたりも文化の異なる日本では根付きにくい原因のひとつと考えられる。スラッジというスタイルは、メタルコアやブラック・メタルなど、あらゆる他ジャンルとも容易に結びつきやすく、欧米では幅広い層へとアピールするサブ・ジャンルなのだ。

†

それからもうひとつ、リストを眺めていて気づくのは、“そもそもこれメタルじゃなくね？”と突っ込みたくなるアルバムが散見されること。例えばPURTURBATORは、フランスのいわゆるシンセウェイブ系のアーティスト。メンバーがもともとブラック・メタルのバンドにいたり、アルセストのアルバムに参加したりはしているものの、出している音はメタルとは無関係である。

まあ、シンセウェイブはブラック・メタルのシンセ・パートだけを抜き出してできたというような側面もあるため、欧州ではこういったアーティストが普通にメタル・フェスに出ていたりもする。

ノルウェーのヴァードゥルナも、音だけ聴けば民族音楽だ。かつてブラック・メタル・バンド、ゴルゴロスの元ヴォーカリスト、ゴールが在籍はしていたのだが。LINGUA IGNOTAの新作も今年各方面で話題になったが、中身はまったくメタルではない。［サージェント・ハウス］の所属で、過去にはヘヴィなギターも使っていたりと、チェルシー・ウルフなんかと近いイメージなのだろう。この手のアーティストのファンには、メタル好きが多いのも事実。

エクストリームな方向にせよ、非メタル的な方向にせよ、正統派メタルからそれなりに離れたアーティストにも寛容な英〜欧州。2021年版も、そんな印象を受けるリストである。

11 RUINS OF BEVERAST

The Thule Grimoires

Nagelfar（ドイツ）のドラマーだったアレクサンダー・フォン・メイレンヴァルトによるブラック・メタル・プロジェクトの6作目。調性を気にせず明暗を揺らめく③の神々しさやトライバルな⑤、壮大な⑦など、その創造力に圧倒される。

12 ターンスタイル

Glow On

気の抜けたサンプラー・サウンドや生パーカッションなどもフィーチャーした、米5人組ハードコア・パンク・バンド。3作目となる本作は明るく溌剌でキャッチーなパンク・サウンドながら、④⑧⑭など練られた楽曲もあり侮れない存在である。

13 アーキテクツ

For Those That Wish To Exist

同名バンドが多くて困るが、本作は中堅UKメタルコア・バンドの9作目。ストリングスやEDM、ソフトなクリーン・ヴォーカルの導入など、メタルコアを軸に積極的に垣根を広げており、サム・カーター（vo）の存在感が光る。

14 SLEEP TOKEN

This Place Will Become Your Tomb

2019年発表のデビュー作も注目を浴びたイギリスの覆面バンドの2作目。リリカルなピアノ弾き語りの①、ヘヴィな②⑤⑦、エレクトロニカ的な③④など多彩な音楽性を、Vessel（vo）の情感溢れる歌声がまとめあげるクセになる一枚だ。

SLEEP TOKEN

15 カーカス
トーン・アーティライズ

2020年リリースのおもしろ邦題EPと同時期に録音されていた通算7作目で、④は同EP収録曲。レイドバックしたミドル・テンポ・パートの散りばめ方や、美メロというよりは情感に寄ったギターなどに今の嗜好が見える。正統派な⑩にはビックリ。

16 ウルヴズ・イン・ザ・スローン・ルーム
プライモーディアル・アーケイナ

アトモスフェリックなブラック・メタルを標榜しながら、ブラック・メタル独自のドグマとは距離を置く異色バンドの7作目。冷たい閉塞感より大地の雄大さを感じさせる⑥は、牧歌的な生活を営むアメリカ人ならではの表現かもしれない。

17 アット・ザ・ゲイツ
ザ・ナイトメア・オブ・ビーイング

北欧メロディック・デスの重鎮の通算7作目。あくまでもデス・メタルのアグレッションとスピードに軸足を置き、過度に美メロにおもねらない塩梅は見事。表題曲③や管楽器をフィーチャーした④⑤などにベテランの余裕と矜持を感じる。

18 アーン
Serpent & Spirit

2016年にロンドンで結成されたトリオ・バンドのデビュー作。90年代メタリカやマストドン、スラッジを消化したヘヴィなサウンドながらメロディを無碍にしない姿勢もあり、プログレッシブにリフが展開する③や⑧に次代の輝きを感じる。

19 ハロウィン
ハロウィン

カイ・ハンセン(g、vo)とマイケル・キスク(vo)が合流したファン待望の一枚。①⑩などの馴染みの良さはもちろんだが、現ラインナップとの化学反応も見事で懐古趣味のみに陥っていないのはさすがだ。⑫はその集大成とも言える一曲。

20 ヴァードゥルナ
Kvitravn

元ゴルゴロスのアイナル・セルヴィク(d)とゴール(vo:現在は脱退)を中心に始動したフォーク・バンドの5作目。アコースティック楽器のみにも関わらず、反復リズムと呪術的な"うたい"により、メタルに通ずる重厚なサウンドが堪能できる。

21 トリビュレーション
ホエア・ザ・グルーム・ビカムズ・サウンド

脱退したヨナタン・フルテン(g)に代わり、元エンフォーサーのヨセフ・トール(g)を迎えた5thアルバム。スウェディッシュ・フォーク/クラシカルなギター・メロディという骨子は不変で、盤石のゴシック・メタルを聴かせてくれる。

CARCASS

AT THE GATES

WARDRUNA

ジャンル別考察❶

ここ数年では王道／ベテランの活躍が目立つ？ 次に必要なのは、次代を築く若手バンドの出現なり！

分析：舩曳将仁

毎年恒例となっている英『METAL HAMMER』誌（以下英MH誌）の年間ランキング。非メタル系と言えるアーティストも積極的に取り挙げ、ヘヴィメタルというジャンルの領域を広げんとする同誌の果敢な姿勢が反映されているのが特徴だ。

それゆえに、王道のヘヴィメタル・バンド及びベテランのアルバムは、あまりランキングに入らないという傾向にある。本誌[Vol. 1（2020年3月発売）]と[Vol.5（2021年3月発売）]で、それぞれ2019年・2020年の英MH誌年間ランキングが紹介されているが、王道メタルはほぼ入っていない。そこからも、どちらかといえば伝統と保守を重んじる日本のメタル・ファンとの感覚の違いが出ていると言えるだろう。

そこでこの2021年のランキングを見ると、意外にも王道及びベテラン・バンドの存在が目立っていることに気づく。2020年ランキングでは８位だったトリヴィアムが２位、アイアン・メイデンが３位という、メタルコア及びベテラン・バンドのこの位置は衝撃的。どちらもアルバムのクオリティでねじ伏せたと言えるか。

マイケル・キスクとカイ・ハンセンが復帰した7人体制ハロウィンの19位も驚いた。このメンバーに期待することを完璧にクリアしていたアルバムで、日本では大いに話題となった作品とは言え、本企画の傾向を鑑みるにトップ20へのランクインは快挙だ。

ほかにも31位のザ・ワイルドハーツ、41位のパワーウルフ、42位のKK's プリースト……と、王道どころか、別の言い方をすればオールド・スタイルのヘヴィメタル／ハードロック・アーティストが奮闘している。ファンとしてはうれしくもあり、また純粋に、これも2021年メタル・シーンの潮流だったのだろう。

“異端的、アンダーグラウンド的、前衛的な個性派若手バンドがひしめいているなかに、王道のヘヴィメタル・バンドがしっかりと存在している”……これこそが健全なヘヴィメタル・シーンなのではないかと、改めてそんなことを感じさせる英MH誌の2021年ランキングだった。

唯一残念なのは、王道を標榜する若手の不在だろうか。活きのいい若手がドンドン出てきているエクストリーム系に比べると、そこは少し寂しいかも。

WHILE SHE SLEEPS

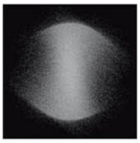
22 LINGUA IGNOTA
Sinner Get Ready

一昨年のランキングで6位を獲得した、アメリカの女性マルチ・インストゥルメンタリスト。多彩な声色による重層的なヴォーカリゼーションをドゥーミィに彩る③やフォーキーな⑧は、ロックとは言えないものの引き込まれる重厚さがある。

23 ホワイル・シー・スリープス
Sleeps Society

UKメタルコア・バンドの5作目。EDMテイストも取り入れた、激しくもダンサブルな楽曲はシェフィールド・スタイルとでも言うべきか。②⑥などを代表に全篇キャッチーなコーラスが光るが、フックのあるギター・リフも聴きどころ。

24 デフヘヴン
インフィニット・グラナイト



ベックなどと親交の深いジャスティン・メルダル・ジョンセンをプロデューサーに迎えた5作目で、シューゲイザー的なアンサンブルはそのまま、これまでのブラック・メタル色は一掃され、全篇穏やかなクリーン・ヴォーカルを打ち出している。

25 アメンラー
デ・ドアン

アナログLPでは2枚組の大作となったベルギーのドゥーム・メタル・バンドの5作目。カロ・タンゲ（オースブレイカーの女性vo）の参加も新たな色を加えているが、ひたすらヘヴィで壁のようなアンサンブルに加わった“静”の表現も鮮烈。

ジャンル別考察❷ デス／ブラック系バンドでは新顔が続々ランク・インを果たすも、ベテラン勢も意地を見せる！

分析：川嶋未来

毎度のことながら、今年もデス＆ブラックがたっぷりとランク・イン。と言うことで、まずはデス・メタルから見ていこう。

正統派オールドスクールでは、安定のハイ・クオリティ作品をリリースした大御所、カンニバル・コープスが堂々のランク・イン。もう少々メロディックなところでは、カーカスとアット・ザ・ゲイツといったベテラン勢が顔をそろえる。この2バンドは日本のTOP50リストにも入りそう。

フィンランドのスワロウ・ザ・サンの新作は、ランク・インも当然の会心の出来。ゴシック・デスとでも言うべきスウェーデンのトリビュレーションは、日本でももっと評価されていいはず。テクニカルなところでは、まさに元祖のシニックによる7年ぶりの新作がランク・イン。相次いだ（元）メンバーの急逝を乗り越えて制作された傑作と言えるだろう。

プログレッシブな作風が印象的なアメリカのRIVERS OF NIHILや、メロディックながら強烈すぎるテクで人気急上昇中、アイスランドのOPHIDIAN Iあたりが入っているのも目を惹く。グラインド寄りでは、相も変わらずのブルータルぶりが光ったアメリカのフル・オブ・ヘルがランク・イン。

†

デス・メタル以上にスタイルの拡散が見られるのがブラック・メタル勢だ。王道と言えるのは、大御所クレイドル・オブ・フィルスくらい。デフヘヴンはスペーシーなサイケ・ロック・アプローチという超方向転換が功を奏したか。WOLVES IN THE THRONE ROOMは、大自然を感じさせる壮大な作風が見事。DORDEDUは元NEGURA BUNGETのメンバーもいるバンド。怪しい民族楽器が多用されたオリジナリティ溢れる作風である。THE RUINS OF BEVERASTは、ナグルファーのドラマーだったアレクサンダーによるワンマン・プロジェクト。20年近く続いており、ゴスやポストパンクからの影響も顕著。

驚いたことに、今回のリストには、スラッシュ系が1枚もランク・インしていない。まあ、ビッグ・ネームでは、エクソダスくらいしかアルバムをリリースしていないということもあるのだろうが。ヴォイヴォド、デストラクション、クリエイターなどの新譜が予定されている本年に期待だ。

26 スワロウ・ザ・サン

ムーンフラワーズ

フィンランドのデス・ドゥーム・バンドの8作目。ストリングス・アンサンブルを導入し、静謐な美しさは増したものの、とにかく陰鬱で寂寥感の漂う作品。要所でグロウルが入るが、クリーン・ヴォイス主体で悲哀を際立たせている。

27 BACKXWASH

I Lie Here Buried With My Rings And My Dresses

昨年もランクインしたカナダを拠点とするザンビア人女性ラッパーの3作目。前作よりわかりやすくヘヴィ・ギター的サウンドを導入したトラックメイクもあり、③⑨⑩などはレイジ・アゲインスト・ザ・マシーンなどにも通ずるかも。

28 フル・オブ・ヘル

ガーデン・オブ・バーニング・アパリションズ

ノイズ表現も得意とするアメリカのグラインド・コア・バンド。5作目となる本作は、全12曲中9曲が2分以内と激烈なのはもちろん、そのなかでの巧みな展開や構築が光る。ブラック・メタル的⑧やメタル寄りの⑩など引き出しの多さも魅力。

29 シニック

アセンション・コーズ

盟友ふたりの死を乗り越えて発表された復活作にして通算4作目。激しさは抑え目ながら、エフェクティブなアンビエント・ヴォーカルとテクニカルなアンサンブルは健在で、宇宙的な音風景を描き出している。シンセ的ベースもいい存在感だ。

BACKXWASH

30 キング・ウーマン
Celestial Blues

女性シンガー・ソングライター、クリスティーナ・エスファンディアリを中心とするドゥーム・メタル・バンドの2作目。囁き主体のヴォーカルが祈りにも聴こえてくる②も秀逸だが、③や⑤などの思わず溢れ出る激情も印象的。

JINJER

31 ザ・ワイルドハーツ
21st センチュリー・ラヴ・ソングス

『P.H.U.Q.』(1995年)のアティテュードに回帰した10作目。激しくもポップという持ち味が存分に生かされており、ジンジャー(vo、g)の作曲センスに陰りは見えない。スレイヤー的リフからポップに展開する⑧などクセの強さも健在だ。

32 エヴリ・タイム・アイ・ダイ
Radical

残念ながら2022年1月に突如解散してしまった米メタルコア・バンドの、9作目にして最終作。持ち前の遠慮のないハードコア感に加え、⑧⑫などはエモーショナルなアプローチも功を奏していただけに、最終曲の曲名がなんとも悲しい……。

33 ジンジャー
Wallflowers

2008年にウクライナで結成されたメタルコア・バンドの4作目。タチアナ嬢のブルータルなグロウルも健在だが、ディーヴァ系とは異なるキュートなクリーン・ヴォイスも冴え渡り、表題曲⑧や⑨⑪などを異質に彩っている。

34 カンニバル・コープス
ヴァイオレンス・アンイマジンド

パット・オブライエン(g)に代わり、プロデューサーとして同バンドに関わってきたエリック・ルータン(g)が加入して制作された通算15作目。④⑥⑩などではルータンが作曲でも貢献し、盤石のスタイルに新たな切れ味をもたらした。

ジャンル別考察❸

メタルコア〜モダン系シーンでは2010年代から2020年代への移ろいが顕著に

分析:脇田涼平

2021年のモダン・メタル・シーンは、まさに“2010年代から2020年代へと時代が移り変わっていく”のを感じられる一年だったと言えるだろう。このチャートにランク・インした、モダン・メタルの中堅からベテランになったバンドたち、そしてフレッシュなバンドたちのラインナップと順位に、2020年代のモダン・メタルの未来が感じられる。

昨年のメタルコア・シーンを最も賑わせたSPIRITBOXのデビュー・アルバムが、さまざまなタイプのメタルひしめく本チャートのトップ5にランク・イン。メインストリームで成功しているアーキテクツやホワイル・シー・スリープスを抑え、プログレッシブ、メタルコア、デスコアを高次元で融合させ、スタイリッシュに昇華した現代メタルコアの最先端サウンドを鳴らすSPIRITBOXがこれだけ高く評価されたことは、ネクスト・ブレイクを狙うアンダーグラウンド・シーンのバンドたちにとっての大きな希望になった。

また、これまで市民権を得られなかったエクストリーム“すぎる”サウンドがわりとすんなり受け入れられ、高く評価されるようになってきたということも現代的な感覚と言えるだろう。ターンスタイルはハードコア・シーンから登場したオルタナティブ・パンクながら上位(12位)にランク・イン。

ほかにもドラゴンフォースを彷彿させるスピード・メタルとテクニカル・デス・メタルをクロスオーバーさせたOPHIDIAN I(48位)や、ノイズまみれのグラインド・コア/マスコア新星PUPIL SLICER(43位)までチャートに入ってくると予想できた人はいないだろう。従来の枠組みにある“メタルか否か”が最重要項目ではなく、メタルをベースに新鮮な感覚で新しいサウンドを作り出すバンドが2020年代は増え、人々の注目を集めメタル・チャートを賑わす存在となっていく予感がする。

新しい時代へと移り変わっていくなかで、ベテランたちも変化を恐れずさまざまな挑戦を見せてくれた。デスコアのトップに君臨し続けたホワイトチャペルがメタル・バラードをプレイしたり、トリヴィアムがコロナ禍におけるオンライン活動の成功例のひとつを教えてくれたり。今年に入りエヴリ・タイム・アイ・ダイが突如解散を発表したことは残念であるが、これもまた新しい時代へ移っていくということなのだろう。

BETWEEN THE BURIED AND ME

35 ビトウィーン・ザ・ベリード&ミー
Colors II

米中堅プログレ・メタル・バンドの10作目は、2007年リリースの同名作の続篇。ラテンな③、マイク・ポートノイを始めとするゲスト・ドラマーをフィーチャーしたドタバタ・カートゥーン・ミュージカル風の④など幅広い作風を聴かせる。

36 ジ・アームド
ウルトラポップ

米デトロイト出身のポスト・ハードコア・バンドの4作目。スウィートな①に虚を突かれるが、後続曲もアンサンブルはノイジィで激烈ながらキャッチーなメロディは一貫しており、アルバム・タイトルに偽りなし。⑤⑪は普通に名曲！

37 DIVIDE AND DISSOLVE
Gas Lit

チェロキー族の血を引くサックス兼ギター奏者と、マオリ族のパーカッショニストによる女性ドゥーム・ロック・デュオ。アンビエントと轟音ノイズ・ギターが"混じるでもなく、反発するでもなく"という独特のサウンドは極めてプリミティブ。

38 DVNE
Etemen Ænka

2013年にスコットランドで結成されたポスト・メタル・バンドの2作目。初期マストドン的なスラッジィでプログレッシブなサウンドながら、キーボードを効果的に使った壮大さも魅力。②⑩のスケールの大きさに新たな潮流の息吹を感じた。

比較・考察 6

ドゥームからグラインド・コア、ラップ系まで、女性シンガーが大活躍！

分析：舩曳将仁

ある意味"とにかく女性メタル・シンガーの躍進ぶりが印象的なランキング"にもなっている。

勢いのある若手バンドも多い。トリオ編成のPUPIL SLICERは、デビュー作『Mirror』が43位にランク・イン。ギター兼シンガーが女性ながら、性別を意識する前に激烈グラインド・コアで聴き手をぶっ飛ばす期待の新星だ。同じトリオでもカナダのSPIRITBOXは何と5位！　エヴァネッセンスと比較される音楽性で、メタル・シーンを引っぱってくれるはず。

キャリアとともに着実にクオリティを高めている存在も目立ち、なかでもEMPLOYED TO SERVEは4位という高順位。見た目は田舎の女の子風なジャスティン・ジョーンズのえげつないスクリームは、日本でもそろそろ注目されるのではないか。異色ダーク女性シンガーのチェルシー・ウルフとコンヴァージのコラボ作の7位も高い順位だが、これは両者の音楽性が理想的に噛み合った結果だろう。

クリスティーナ・エスファンディアリの陰鬱ウィスパー・ヴォイスが脳を揺さぶるドゥーム・メタルのキング・ウーマンは、個性的な音楽性を着実にスケール・アップさせた2作目で30位にランク・イン。本誌[Vol.5]の女性シンガー特集記事で筆者がイチオシしたウクライナ出身のジンジャーは33位。タチアナ・シュメイラックの類まれな表現力は全メタル・ファン必聴だ。

英MH誌イチオシのLINGUA IGNOTA、民族音楽系のヴァードゥルナ、ラッパーのBACKXWASHなど、女性メタル・バンドの多様化が顕著だ。日本でもその傾向は高まっていたが、パンデミックの影響もあってか、どこかブレーキがかかったような状態が続いている。それだけに女性シンガーの活躍ぶりが目立つ今回のランキングは何とも心強い。2022年は洋邦合わせた女性メタル・バンドのさらなる飛躍に期待したい！

KING WOMAN

比較・考察 7

これも日英の差異？英ランキングに入らなかった話題作とは

分析：荒金良介

本ランキングに入らなかったものの、素晴らしい作品がたくさんあった2021年。

まず、レッド・ツェッペリンの再来と言われ、2019年の初来日公演で度肝を抜くパフォーマンスを魅せたグレタ・ヴァン・フリートの傑作がスルーされている。また、イギリスのメディアなのにブレット・フォー・マイ・ヴァレンタインがトップ50に入っていないことにも驚いた。攻撃力マシマシの会心作だったのに、うっかり忘れていたとしか思えない。アーキテクツはちゃんと13位にランクインされているのに。

12月リリースということもあり間に合わなかったのか、ロカビリー・メタルを掲げるヴォルビートが抜けているのも残念。最高作だったから、なおさら悔しい。そして、ダークに振り切った作風でインパクトを与えてくれたアンドリューW.K.の名前も見当たらない。パーティ野郎とは一線を画したシリアスな内容で、楽曲の良さが光っていた。

この手は挙げ出すとキリがない。けれど、ランキング外の作品を探し出すことで、そのメディアの特性を逆照射する形にもなるだろう。日本人が選ぶメタルのトップ50を見たら、海外の人はおそらくビックリするに違いない。それと同じことだ。

話を戻そう。プログレッシブ・メタルの桃源郷を鮮やかに描いたレプラスも傑作を作りあげてくれたので、未聴の方はぜひ。

ほかにもバックチェリー、プリティ・レックレス、アスキング・アレクサンドリア、ベアトゥース、トム・モレロ、トマホーク、そして我が日本を代表する人間椅子の新作も文句ナシの出来栄えだった。2020年2月にイギリス、ドイツと初の海外ツアーを行なった彼ら。コロナが収束した暁には、再びヨーロッパ並びにアメリカなどをガンガン攻めてもらいたい。バンド側はやる気満々なのだから。

◀UK誌では表紙にもなっているブレット・フォー・マイ・ヴァレンタイン……なのに、トップ50には入らず。このあたりに“あくまでも個人の好みによる投票でのランキング”という面が表われているか。

▶ヴォルビートの新作『サーヴァント・オブ・ザ・マインド』は歴代No.1名盤とも言える内容だったが、発売が12月だっただけに、ランキング集計には間に合わず？

39 BOSS KELOID

Family The Smiling Thrush

イングランドで2010年に結成された、ストーナー要素も持ったヘヴィ・サイケ・バンド。こちらは5作目となり、70年代ロック的なサウンドの質感ながら、モダンとフォークを行き来する妙なリフ展開が新鮮で、マストドンやゴジラにも通ずるか。

40 PERTURBATOR

Lustful Sacraments

ブラック・メタル・バンドでの活動歴もあるフランスのエレクトロニック・アーティストの5作目。80年代SF／ホラー映画のサントラ感やデペッシュ・モード風のサウンドでメタル味は薄いが、浮遊感のある音像が妙にクセになる。

41 パワーウルフ

コール・オブ・ザ・ワイルド

キャッチーな歌メロと勇壮なストリングス＆クワイヤ。ドイツ中堅パワー・メタル・バンドの期待どおりの8作目。金太郎アメには違いないが、質が高いので文句のつけようもない。猛進楽曲群のなかで、フォーキーな⑥の爽快感が光る。

42 KK'sプリースト

サーモンズ・オブ・ザ・シナー

K.K.ダウニング(g)とティム“リッパー”オーウェンズ(vo)による、もうひとつのメタル・ゴッド。③⑨⑩の曲名など未練たらたらな趣もあるが、疾走感とツイン・リード・ギターは有無を言わさぬ説得力を持っている。

43 PUPIL SLICER

Mirrors

ロンドン出身のカオティック・ハードコア・トリオのデビュー作。マスコア的な幾何学リズムも用いて目まぐるしく展開する楽曲、紅一点ケイト・デイヴィスのテクニカルなギター・プレイと激情ヴォーカルがとにかく刺激的。

POWERWOLF

以降のメタル・シーンを彩る期待の新人たち！

分析：荒金良介

メタル界の新人という切り口で、ここでは1〜2枚のフル・アルバムを出しているバンドに限定して論じたい。

まず目を惹くのは、5位に堂々ランクインされたSPIRITBOXだ。あのアイレッスルドアベアーワンスの元メンバーふたりで立ち上げられ、カオスかつプログレ色の強いメタルコアを継承しつつも、透明度の高いオルタナ調の歌メロは絶品。ラナ・レーンに代表されるシンフォニック・メタル好きにもアピールしそう。

また、脱ブラックゲイズする前のデフヘヴンやアルセストを彷彿させるMØL、ロードランナーと契約したUNTO OTHERSが10位圏内。特に後者はタイプ・オー・ネガティヴを明るくしたゴシック色を浮かべ、アイアン・メイデンなどの王道メタルに通じるキャッチーさもある注目株だ。

BABYMETALと対バン経験を持つ覆面ユニット、14位のSLEEP TOKENも人気を高めている逸材。ZEAL&ARDORを彷彿させるソウルフルな歌唱力は耳に残り、またミステリアスなポスト・メタルは刺激的に響く。

18位から30位の間にはマストドン風味のスラッジ・メタルを掲げたアーン、フォーク要素やアバンギャルドな展開でアート性の高い曲調が目立つLINGUA IGNOTA、冷涼かつ陰鬱としたドゥーム・メタルで迫るキング・ウーマンが並ぶ。加えて、38位にプログレ／スラッジ・メタルで次世代を担うDVNEがいたりと、相変わらず多様なバンドが顔を揃えている。

個人的には43位に位置するPUPIL SLICERは、コード・オレンジやヴェノム・ポイズン好きにお薦めしたい激越ハードコアを鳴らしている。紅一点のケイト・デイビス（vo, g）による生々しいシャウトも迫力満点だ。こうした新人にも目配せした選出が実に嬉しい。

△2022年2月号（357号）での"NEW HEAVY"特集に合わせ、4種類の表紙が作られたが、その一角にも選ばれたSPIRITBOX（画像左）とSLEEP TOKEN（右）。今後のラウド・ミュージック・シーンを担う逸材としての、期待の高さがうかがえる。

44 TIMES OF GRACE
Songs Of Loss And Separation

キルスウィッチ・エンゲイジのジェシー・デイヴィッド・リーチ（vo）とアダム・デュトキエヴィッチ（g）によるプロジェクトの、10年振りの新作。コロナ禍による変化への感情を、レイドバック感もあるサウンドでストレートに表現している。

45 DORDEDUH
Har

Negură Bungetの元メンバーが2009年に結成した、ルーマニアのブラック・メタル・バンドの2nd アルバム。朗々としたクリーン・コーラスが印象的で、ピンク・フロイド的な⑤や叙情性溢れる⑦など、プログレ的な構成力も見事。

46 クレイドル・オブ・フィルス
エグジステンス・イズ・フュータイル

UKエクストリーム・メタル通算13作目であり、序曲の①からシンフォニックでゴシックな世界に引き込まれる。美と暴虐が交錯する④、雄大な⑦など期待を裏切らないクオリティで、ヒエロニムス・ボス的なアートワークも秀逸だ。

47 THE BODY AND BIG | BRAVE
Leaving None But Small Birds

THE BODYとBIG | BRAVEというふたつのエクスペリメンタル・ロック・バンドによるコラボ・アルバム。全体的にフォーキーな作風ながら、7分強を1リフで押し通す①やヘヴィな③⑤などはレッド・ツェッペリンの『III』に近いかも。

48 OPHIDIAN I
Desolate

2010年にアイスランドで結成されたテクニカル・デス・メタル・バンドの、9年振りとなる通算2作目。ドラゴンフォース的メロディアス＆ユニークなツイン・ギターがとにかく主張するなか、スパニッシュな⑥が味変としても印象的だ。

49 ホワイトチャペル
キン

米テネシー州出身のデスコア・バンド2年振りの通算8作目。②③⑦などヘヴィ＆アグレッシブな楽曲で魅せる一方、⑧から⑪を始め多くの楽曲でクリーン・ヴォーカルやアコースティカルなアプローチを導入。意外にも聴かせる作品である。

50 ドリーム・シアター
ア・ヴュー・フロム・ザ・トップ・オブ・ザ・ワールド

新たに設立した自身のスタジオ［DTHQ］にて録音された通算15作目。ジョン・ペトルーシが8弦ギターを導入した⑥、モールス信号的反復が効果的な20分超の⑦などが新機軸で、珍しくメジャーkeyの⑤も一服の清涼剤となっている。

THE 50 BEST ALBUMS OF 2021 から考察する 日英メタル・ミュージック・ムーブメントの同異点

トミー・モーリー

音楽専門誌にて、通訳／ライターとして活動。ギター歴25年にして、やっとエフェクター沼にハマりだす。80年代ボスの歪みペダルなど、巷で評価の高いヴィンテージのリサーチが止まらず、自分が高校生の頃はただの中古と見向きもしなかったのに、なんと深い世界だったのか。当時の自分に喝を入れたい気分なり。

STARS' WORDS

トミー・モーリー　シュザイの復習

EPISODE-8

I got stuck in something!

——ちょっと手こずっていたんだ!

By Steve Vai

当コラムでは、本誌通訳の私トミー・モーリーが、アーティストとの取材時に交わした会話のなかから、こぼれ話とともに、英会話として使える言い回しをピックアップしていきます。

正真正銘のギター・ゴッド、スティーヴ・ヴァイ氏の《Stars' Words》です。当コラムで取り上げてきたポール・ギルバートやイングヴェイに続く、待望のスーパー・ギタリストですね。

氏の最新アルバム『インヴァイオレイト』に関するインタビュー（次のページから！）では、昨今のコロナ禍で思うこと、手や肩の治療、音源制作の経緯などを独特の哲学的な節を交えて語ってくれました。氏の音楽に“スゲェ！”と感銘を受け10代を過ごした小生にとって、感動的な出来事となりました（THAT'S ALL RIGHT!)。

本インタビューはリモートで実施しましたが、所定の時間にサンダー編集長とPCの前でスタンバイしても氏は現われません。すったもんだの末につかまったのは1時間後……。しかし、さすが常に創作への情熱を欠かさない氏、直前まで作業を行なっていたようで、冒頭で謝罪をされたときの言葉が、今回のピックアップ・ワードである［stuck］です。

この［stuck］、我々日本人的に最もシックリくるのは“雪道で車がスタックしちゃった”という、＜ハマる＞を意味する“スタックする”ではないでしょうか？　英語的にもほぼこの意味合いで捉えてOK。

元来＜くっつく／留まる＞を意味する動詞［stick］の過去・過去分詞形ですが、氏が言ったように、形容詞的な意味合いで使われることが多い言葉です。また［stuck＋at/for/on/in/with］など、さまざまな前置詞と組み合わせることで、絶妙に使い方や意味合いが変わり、さまざまな熟語となっています。

例えば、電車が止まってしまい駅で立ち往生してしまえば［stuck at a station（駅で足止めをくらう)］、答えがなかなか出ないときは［stuck for an answer（答えに詰まる)］、意中のあの娘が頭から離れないときには［stuck with her（彼女にハマっている)］と、本当にいろいろな使い方ができてしまうわけですね。

以前［left over（残り物)］というビル・スティア氏のStars' Words（Vol.4）を取り上げた際、私はヴァイ氏のアルバム『Flexable Leftovers』が思い浮かびました。そして今回はU2の名曲「Stuck in a Moment You Can't Get Out Of」を思い浮かべました。ということは、次なるStars' WordsはU2なのか……！？

ではまた次号でお目にかかりましょう！

［stuck］＜動詞（過去形、過去分子）＞

【意味】＜はまり込む／行き詰まる／動きが取れない／困る＞

【語源】《stick》“貼り付く、くっつく”
＜動詞（現在形の活用）＞

例文

I'm stuck in a traffic jam!

（渋滞に巻き込まれちゃった！）

He's stuck with a difficult song.

（彼は難しい曲に手こずっている。）

Interview by Takahide "THUNDER" Okami
Translation by Tommy Morly
Photo by Larry DiMarzio、Christophe Pauly (LIVE)

STEVE VAI

スティーヴ・ヴァイ

これまで以上にライヴを意識した
10年ぶり描き下ろしアルバム！

実は、純粋な描き下ろし作品としては10年ぶりになるというスティーヴ・ヴァイのニュー・アルバム『インヴァイオレット』は、かなりライヴを意識して作った作品でもあるという。もちろんギター・ファンにとって刺激的なテクニックが含まれた楽曲群ではあるが、プレイヤーではなくとも引き込まれるナンバーが並んでいるのだ。コロナによって初期計画が変更となり、また制作前には肩の手術を行なうなど、ある意味イレギュラーな流れのなかでできあがったアルバムであるが、彼に新しい意識を芽生えさせたとも言える重要作になったのである。

『インヴァイオレット』
ソニー／ SICX-30133

"この状況をどう生かすか"を自問すれば
パニックにならずにいられる。

——今作『インヴァイオレット』は、実に10年ぶりの描き下ろしギター・インスト作となりました。コロナ禍での紆余曲折があり、この形になったと聞いています。そもそもは"ヴォーカルありアコースティック作"として進んでいたようですね。

『パッション・アンド・ウォーフェア』の25周年盤とともに『モダン・プリミティヴ』をリリースした際に、大々的なツアーをしてね。その後オランダのオーケストラとの共演に取りかかり、1年近く費やしたよ。そこから『リアル・イリュージョンズ』三部作構想の3作目を作るつもりで、たっぷりとヴォーカルを入れた濃密なアルバムを計画していたんだ。その最中にロックダウンを迎えて、僕らミュージシャンたちは皆壊滅的な状況に追い込まれた。

——世界中のミュージシャンが同様の状況となりました。

演奏の場を奪われた我々は新たなコミュニケーション方法を模索し、僕はファンに向けてSNSを介してアップロードすることにしたんだ。ここでは状況に抗わずに受け入れて、ポジティブな解決策を模索することが重要で、"この状況をどう生かすのか、どうすれば得るものがあるのか"と自問すれば、パニックや自暴自棄にならずにいられるんだ。

——さすが、冷静ですね。

そこで僕は三部作アルバムの計画を止め、ポッドキャストのように話をする映像をYouTubeなどで配信し始めてさ。それからギター・テクニックの開発を目指し、"ジョイント・シフト"という難度の高い技術を新たに身に着け、それは今作の「キャンドルパワー」となってビデオにもアップしているよ。

——そのキャリアを持って、なお新技術の練磨に励むというのがスゴいです。

さらに僕としては珍しいアコースティック・ギターの弾き語りで「ザ・ムーン・アンド・アイ」を披露してみたら、これもレスポンスが良かったんだ。ライヴではバンドのなかでこのスタイルをやったこともあったけど、アコギと歌だけのアルバムをずっとやりたいと思って長年曲を作ってきたから。やれる曲は限られるけど、僕は自分の声が好きで、アルバムを作るときだと感じたんだね。

——ただ、そのアコースティック・ギター演奏によって、腕周りに不調が現われたんですよね？

録音はけっこう進めていたんだけど、僕の肩が悲鳴を上げてしまって。5年くらい前から不調を抱えてきたけど、これは50年くらいヘンなスタイルでプレイしてきたからなんだろう(笑)。普段から健康な僕だけど、骨格の歪みが発生していたんだ。

——そして、手術に至ったという。

肩の手術をしてくれたナップ医師が着用させた三角巾を"ナップサック"と呼んでいて、片腕を釣った状態でギターを弾いたときに"片腕だけで曲を書くぞ！"と思い立ってさ。レガートでプレイするだけなら簡単だけど、曲として楽しめるものを目指し、映像を観なければ片手でプレイしているとわからないくらい質の高い曲にしたかったから。

——そして、収録曲のひとつである「ナップサック」が完成したんですね。

そのとおり。そして、これがきっかけでアコースティックからエレクトリック・ギターのアルバムに頭がシフトし、ツアーに出ることも思い描けてしまった(笑)。それからは『インヴァイオレット』に集中して、一気に作っていったという感じかな。前作から何年ぶりだってくらいスパンが空いているけど、さまざまなプロジェクトに参加している分、そんなに時間をかけて作った気はしないんだけどね。

何かを恐れてしまっては
ベストな決断は下せない。

——体のメインテナンスについて、もう少し話を聞かせてください。肩の手術とは別に、左手には"ばね指"の症状もあったそうですね。これも、これまで指に強烈な負荷をかけてきたことによるものでしょうか？

実は、かなりネックが太いアコースティック・ギターでストレッチ・フレーズの練習をして、指を痛めたことがあってさ。そのときはすぐに休ませたんだけど、数ヵ月後に指がヘンに曲がり始めて。次第に指が固まって自由に動かなくなったんだけど、肩の手術と同じ頃に治療を受けたら、翌日には問題なくもとに戻ったよ。まぁ 2020年の12月に受けた肩の手術はうまくいったんだけど、昨年の夏にオーブンからピザを出そうとしたときに、また別の個所の腱を痛めてしまってさ。

——な、なんと！

そこにトドメを刺したのが、ハイドラ(CDジャケットでも持っている3ネックのニュー・ギター）を使って演奏しようと試

みたことだった(笑)。この楽器は本当に巨大なマシンだから、普通のギターとは異なる弾き心地なんだ。1年半かけて250回のライヴをやる予定だったけどドクター・ストップがかかってしまい、ほとんどの公演を延期させることになってしまった。

――楽器演奏への支障は、さまざまなところに潜んでいるものですね……。なお、あなたと同じように体の一部に不具合を持ちつつ、その現状をごまかしながらプレイを続ける人は少なくありません。大きな治療に踏み切るかは悩めるところなのかもしれませんね。

みんな事情が異なるし、手の力だって異なるわけだから絶対的な正解はないよね。テニス・プレイヤーなら右手を、ギタリストなら左手を大切にしたいところだろうけど、実際どうするかはその人が決断しなければならない。しかし手術をしなかった場合、それによって逃すすべての機会を、その後いくつも目にしながら生きることになるだろう。

――治療を躊躇するべきではないと。

どちらにせよ、何かを恐れてしまってはベストな決断は下せないとハッキリ言えるね。自分の人生を歩むうえで何に価値を見出して生きるべきかを考えれば、手をどうするべきかの答えは自然と見えてくるだろうから。

――では本作作制前に手術をしていなかったら、別のアプローチやサウンドになっていたと思いますか?

少し変わっていたかもしれないし、「ナップサック」なんてなかっただろうね。でも僕がアルバムで伝えたいメッセージは、必ずしも特定の弾き方ではないと出せないわけじゃないんだ。メッセージはメロディや曲のなかにあって、どんなテクニックやサウンドでプレイしようともさほど影響するものではないさ。

――技術を聴かせているわけではない、ということですね。

激しくシュレッドする音楽で一瞬の興味を惹けても、それは記憶に残るものとはならないだろう。シュレッドとメロディのバランスを保つことが重要だ。だから細かい差異はあっても、メロディは同じものになっていたと思うね。

――だからこそ、ギターをプレイしないリスナーにも楽しめる音楽になっているとも言えそうです。意識的に、"ギターがわからない人も楽しめるように"とすることはありますか?

そういうのはないかな。"どんなリスナーをターゲットにするか"と意識することはリスキーでもある。"こういう人たちは、こういうのが好きなんだろ?"と狙っても、それがはずれる危険もある。僕はまず自分が納得するものや感動できるものを目指しているから。

僕のメッセージはメロディや曲のなかにあって、どんなテクニックやサウンドでプレイしようと、さほど影響するものではないさ。

――それが創作家の本来の姿ですね。

どんなアーティストも内なるクリエイティブを信じるべきさ。自分だけのユニークな方法で作品を作ると、そこには必ず歓びが存在し、完成した暁には自分の可能性が引き出せたことに満足できることだろう。そして情熱をかけて作った音楽からは情熱が発せられ、それに惹きつけられたオーディエンスは、本人にとっても意味のある人たちだと言える。

――それそこ、互いの正しい形というか。

もちろん僕の音楽だってすべての人に響くわけじゃないし、ビートルズだって響かない人はいる。ただ僕が目指したことはエレキ・ギターによる本当にラブリーなインスト・アルバムを作ることで、メロディで溢れ、あちこちで火花が散るような音楽を求めたよ。どの曲も自分にとって新たなチャレンジだったし、これは僕のファンが求める"第一に僕自身が満足できるもの"を作ったことにほかならないんだ。

――本人が納得していない曲は、ファンも聴きたくありませんからね。

そうさ。だから何よりもまずクリエイティブさを発揮させることがポイントで、それが成功するかどうかっていうのは、あとから自然とついてくるものだから。

「強烈なまでにクリエイティブでどんなリスナーにも届くことがしたいよ。」

――そんな本作のオープニング曲「ティース・オブ・ザ・ハイドラ」はSF映画のサウンドトラックを想起させるような、スリリングかつメロディアスな楽曲です。

そのとおりだね、ありがとう！

――その一方で、特に「アヴァランチャ」はビリー・シーンが参加していたりと、生バンドでのプレイを期待させる荒々しさがあります。本作は純粋なサントラ的インスト作を目指すだけでなく、ライヴ感もかなり意識したのでは？

まったくそのとおりだよ！　レコーディングの段階で、ステージのことはかなり意識していたね。僕の今までの音楽を聴けばわかるだろうけど、プロダクションを突き詰めた濃密なサウンドで、ライヴ向けとは言い難い曲も存在してきた。その点、今作はどの曲もライヴでプレイできるものを目指したから。アルバムだけじゃなくてライヴでも楽しんでもらえるよう、今後はそのライヴのやり方も変えていきたいと思っているんだ。

――それは今後のステージが楽しみになりますね！　そのほか初期から応援しているファンのなかには、アルカトラスやデイヴ・リー・ロス・バンドなどで活躍した姿を今も鮮明に覚えているという人も少なくないでしょう。あえて、ロック・バンド形態をイメージした作品を作っても、それはそれで大きな反響が得られるのでは？

僕は70年代にブラック・サバスやツェッペリン、ディープ・パープル、クイーン、キッスを聴いて育ち、ああいったエネルギーが好きだった。しかしそれ以前から両親が聴いていた『ウエスト・サイド・ストーリー』みたいなミュージカル音楽なんかも聴き、楽曲を意識した音楽性も身についていて。もちろんビッグなロック・バンドに参加したときは心から楽しんでいたけど、ヘンテコさも持ち込んでいたし、自分なりの音楽も温めていた。それらを『パッション・アンド・ウォーフェア』として世に出したとき、"誰っぽくもない"作品が想定外なほどに受け入れられたことに驚いたね。"こんな音楽を誰が聴くんだろう？　僕のキャリアはおしまいだ！"くらいに考えていたからさ。

――そうだったんですか。

それ以降、さまざまな人たちからレコーディング参加の依頼を受けて"ヴァイっぽさ"を披露してきたけど、今からビッグなロック・バンドへの参加となると逆戻りしているような気がして距離を置きたいかな。

――自分が主導でも？

バンド結成のオファーが来ることもあるけど、誰もが思い描くかつての幻影にすがりたいわけじゃないんだ。もしロック・バンドを組むなら、音楽性だけではなく、さまざまなところで波長が合わないといけない。共感できる音楽、それでいて強烈なまでにクリエイティブでどんなリスナーにも届くことがしたいよ。でもそうなると組みたい人が思い浮かばないし、それをやらせたがる人もいないだろう。だから僕はこのまま自分の音楽を追及していくことだけでハッピーなんだ。

――納得です。しかし先程の新しいライヴ形式、ぜひ早く生で観たいものですね。

僕もそっちに行く日が待ち遠しいし、むしろ近い内に日本に行くつもりだよ。2022年はそっちで『インヴァイオレイト』をプレイするよ。もし美しいメロディが好きで、ヘヴィ・ミュージックも好きな人なら気に入るはずさ。ぜひ君たちに会いたいと思うし、心からありがとうを伝えさせてくれ！

Interview & Photo by
Takahide "THUNDER" Okmai

NEMOPHILA

Hazuki
Haraguchisan
Tamu Murata

NEMOPHILA
Interview-01

SAKI × むらたたむ

**昨年12月に1stフル・アルバム『REVIVE』をリリースし、
翌1月にはLINE CUBE SHIBUYAでのフル・メンバー初有観客ワンマンをフルハウスとしたNEMOPHILA。
早くもメタル・シーンの台風の目と言える存在になった彼女たちだが、だからこそ、これからの歩み方が
重要となるのではないだろうか。ここまでの経験を経て、バンドは次の一歩をどう踏み出すのか。
まずはSAKIとむらたたむに、先のライヴについて、そして次の展開についての展望を聞いてみよう。**

昔ながらの洋楽テイストは残しても、日本的なメロディも残す。(SAKI)

――まずは改めて、フル・メンバーによる初のワンマンとなった1月9日のライヴの手応えをひと言ずつ聞かせてください。

むらたたむ　この状況のなかで、すごくお客さんが来てくださった……というのが、とてもありがたかったです。声こそ出せないけど、お客さんからの熱気が感じられて、フル・メンバーでの初ワンマンにしては、わりと良かったんじゃないかなと思います。

SAKI　本当にようやくだったので、まずは開催できたことが良かったなと。配信では披露したことはあるけど、実際にお客さんに聴いてもらうのが初めてという曲がほとんどだったので、そういう喜びもありました。

――それは会場に集ったオーディエンスにしてもそうですよね。

SAKI　ライヴDVDも何もないじゃないですか。お客さんにしても、どうノッたらいいか、みたいなところもあったと思うんです。それをお互いに作っていくような、今までにないおもしろさを感じましたし、まだまだ全然やれることはあるなとも感じましたし。そういう意味でも、１回きちんとライヴができたことは本当に良かったなと思います。

――昨年の12月中旬からは、再びコロナ感染者数が増加傾向となり、リハーサルなども予定どおりにやりづらい状況だったのではと想像するのですが。

むらた　リハーサルについての支障はそんなになかったかも。本番と同じくらい広いスタジオを使っていたので、密になることは全然なくて。みんなも体調管理とか頑張ってくれたし。

SAKI　ただ、日程が近づくにつれて感染者数が増えて、実際にできるのかどうか、というところでの不安はありました。

――またライヴの約ひと月前には、1stアルバム『REVIVE』のリリースがありましたね。本作へは、どういった反応が聞こえてきましたか？

SAKI　やっぱり初めてのアルバムだったので、"待ってたよ"と言ってくださる方がす

ここを成功させないと
今年はヤバい……
私はそう強く思っていた。
——— むらた

キャリアは違っても
バンドとしては同じところから
始めているので、そこはイチから
みんなで築き上げていく。
——— SAKI

ごく多かったと思います。時間をかけたということもあったんですけど、"NEMOPHILAはこういうバンドなんだよ"というのをしっかり示す一枚になったかなと。初めて聴いた人から"こういうバンドなんだね"というレスが多くて、それもすごくありがたかったですね。

――改めて、『REVIVE』では、バンドのどんな面がより出せたと思いますか？

むらた　いろんな曲が入っているけど、統一感がある作品になったとは思います。ドラマーとしては、ハードとかテクニカルというよりは、シンプルに叩く曲が多かったかな。

SAKI　メロディのさじ加減って難しいと思っていて。自分が作った曲でも、いわゆるJ-POPっぽいメロディにしないというか、そういうところは目指していたかもしれないです。昔ながらの洋楽ロックっぽいテイストは残して、でも日本的なメロディも残す、みたいな。ギターとしては、私もとにかくテクニカルにというより、どれだけ曲の個性を生かすかを考えたと思います。

――選曲としても、バラエティある候補のなかから、そういった点を考慮した楽曲を入れたという感じですか？

SAKI　結局シンプルな曲を入れたんだよね。メンバーが作ったデモには、もっとジェントっぽいものもあったんですけど、結果としてはシンプルでメロの強い曲を入れたというイメージが強いので。曲調としては、今後もまだまだいろいろできることはあるな……とは思っています。

mayuちゃんのテンションが上がるドラムが叩きたいな。（むらた）

――1stフル・アルバムが出たのちの今回のライヴで、ほとんどの人が初めて生の5人を観たという状況だったと思います。バンド側としても、お披露目ライヴだという意識はありましたか？

むらた　そういう気合いはあったと思います。でも"ここに向けて"というよりは、"ここを成功させないと今年はヤバいよ"という意識があった……あったと言うか、私はそう強く思っていたので、メンバーにもそのビームを発していました。みんなワクワクでもあるけど、"超気合い入れて1000%出し切んなきゃ"って、ちょっと冷静な目線もありつつ当日を迎えましたね。

――特にむらたさんとSAKIさんは、mayuさん、葉月さん、ハラグチサンに比べてキャリアがありますよね。その分、3人はよりプレッシャーを感じている部分もあったのかなと想像しますが、先輩から見てどうでしたか？

SAKI　思います。大丈夫かな？みたいな。たむちゃんが"ここ頑張んなきゃダメだよビーム"を発してくれていたので、私まで一緒に言っちゃうとヤバいかなかとも思ってはいました。3人がどう思っていたかはわからないですけど、気負っちゃってないかな……という不安があったりとか。

――バンドを高めるためには、必要なプレッシャーだとも思います。

SAKI　「Fighter」の合間にリズム・ソロを入れたんですけど、ハラちゃんがすごくプレッシャーを感じているのがわかったので。ヘンな話、"むらたたむとリズム・セクション"なわけで。

むらた　それは全然……感じませんでした！

SAKI　お姉さん、感じませんでした（笑）!? 「Fighter」のソロが終わったとき、ハラちゃんはステージ上ですごい泣きそうな顔してたの。本当はハイタッチで終わるところも抱きついていて。

――やりきって、感極まったという感じだったんでしょうね。

むらた　ただ、私は年上だけど、それは誤差の範囲だと思っていて。バンド・メンバーだから平等だと思っているんですね。"上の人が面倒を見て育てる"、"いろいろ考慮してあげる"みたいに思われがちなんですけど、そうとは全然思っていなくて。リズム・セクションを作るのもふたりで相談して考えるんですけど、ハラちゃんにも"私の変えてほしいところも言って"とは言っていて。

――それがギター・チームでは？

SAKI　ギターは秋山（作曲家、プロデューサー）さんもいてくださるので、私も含めて葉月ちゃんとも"ここはこうだよ"みたいな練習や打ち合わせは結構やりましたね。そういうのを積み重ねていくしかないと思うので、キャリアは違ってもバンドとしては同じところからNEMOPHILAを始めているので、そこはイチからみんなで積み上げていくものだと思うので。私もワンマンでは初めてのキャパシティだったので、今まで以上に気を使ってやっていました。

――"自分たちが引っ張らなければ"というより、"全員で足並みをそろえて"という感覚だったという。

むらた　そうですね、引っ張るというのはあ

まりないですね。みんなの戦意を奮い立たせるというか、モチベーションを上げるとか、そういう役割ができるといいなとは常に考えていました。

SAKI　私もそうなんですけど、根本的な成長って自分で気づかないとダメなことってあると思うんです。"あぁ、こっちのほうがいいんだ"とか、自分のなかで納得しないとできないと思うんですよ。だから、こちらから言うようなことは起きてはいなくて、バンドとして５人全員で進めていけたらいいなと思っています。

――当日の選曲も、当然ながら"今あるNEMOPHILAを満遍なく見せる"というものになりました。

SAKI　みんなでLINEでワーっと喋って、そこで決めたよね。当初は「Life」が最後じゃなかったり。オープニングを紗幕にしたいって提案してくれたのは葉月ちゃんだっけ？

むらた　そうそうそう。

SAKI　スモーク、レーザー、ヴィジョンとか、とにかく思いつく限りのことを言って、予算的にOKなのか検討して（笑）。そのなかで、紗幕でメンバーのシルエットにして、"シャウトで幕が落ちたらカッコよくない？"と。

――まさに、あの開幕でmayuさんのスクリームが轟いた段階で、"このバンドのライヴはスゴいぞ"と感じた人は多かったと思います。

SAKI　ありがとうございます。でも幕が落ちた瞬間に人がめっちゃいてビックリもしちゃいまして（笑）。

むらた　そこで初対面みたいなね（笑）。個人的には、冷静に叩けたので、そこは良かったなと思いますね。曲調にもよるんですけど、ステージ１本のなかでも"テンション超いい～普通～超いい"みたいな波はあるんですけど、総じて良くって。

――特にドラマーは後方からステージ全体が見えますが、メンバーの動きは気になるものですか？

むらた　いや～、気になりますね。みんなでアイコンタクトをするんですけど、そこから伝わるのは"いいぞ、いいぞ"という感じで。特にハラちゃんとはアイコンタクトをするんですけど、あの日彼女は輝いていました！

――なるほど……しかし、全員が輝いていましたよ！　そのなかでも、一番最初にオーディエンスに届くのは、やはりシンガーの存在感だと思います。その点、mayuさんの歌唱の安定感や迫力、存在感は想像以上で、CDを軽く凌駕しているな、と。

SAKI　いや、頑張ったんですよ。前から華があるなと思っていましたけど、ヴォイス・トレーニングの先生についたりとか、本当にいろいろ頑張っていたんです。緊張しているかと思っていたら、最初のMCで"こーんにちはー！"って錦鯉もやっていて、余裕あるんだなと。私的にはアレにツッコめなかったのが本気で悔しかったんですけど（笑）。

むらた　ずっと言ってるもんね……笑いにシビア（笑）。

――女性シンガーがハードなパフォーマンスをする場合、口調を荒げたり、男っぽい振る舞いをしたりなど、どうしても無理が見えてしまうバンドもありますが、それがまったくなくナチュラルにロックしているのも大きなポイントなのではと思いました。

SAKI　ハードなことをやっているからって、"お前らー！"、"イケんのか！"みたいなことを無理に言っている人も見るじゃないですか。だから"自然で良くない？"みたいなのは、NEMOPHILAを始めたときから言っている気がします。"無理してそっちに寄せよう"じゃなくて、"別に自然体でいいよね"って。mayuちゃんは本当にそうなので。

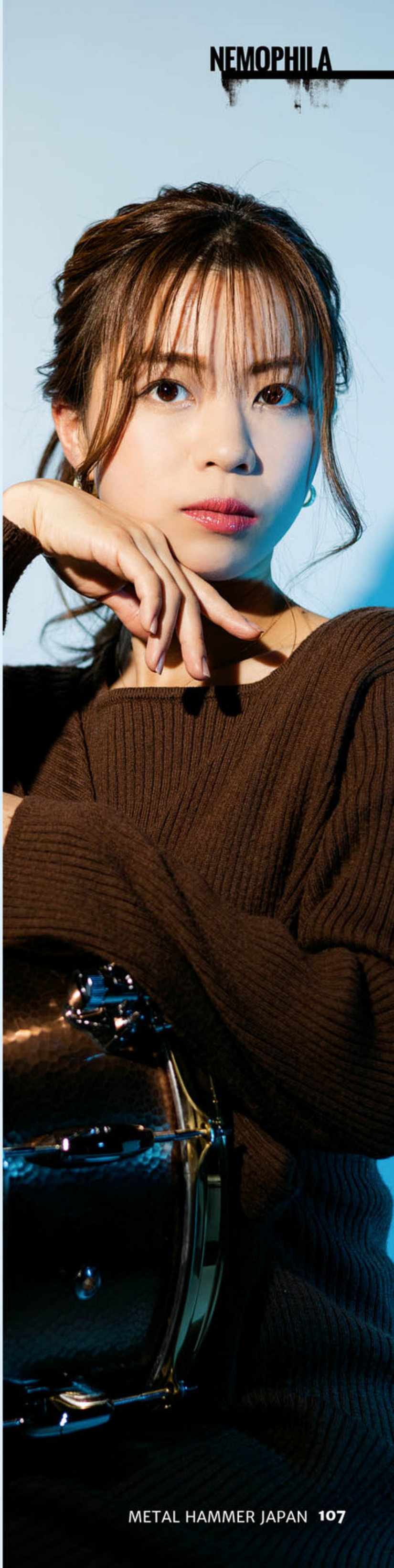
むらた　mayuちゃんは、実はすごくいろんなことを考えちゃう子なんですよ。いらぬ心配をする子で、以前の配信ライヴでも、けっこう反省をしていたみたいなんですね。でも、それもあってか発声の仕方がすごく変わったと言うか、腹から声がズドーンと出ているような発声になったと思っていて。LINEで感想を送ると、mayuちゃんは素直な子だから全部受け入れて、どんどん伸びていくんですよ。

――その人柄は、ステージからもにじみ出ていますよね。

むらた　実際ステージに立ってもスター性のあるパフォーマンスができる人なので、これからもどんどんスゴいことになるんじゃないかなって。そういう人の近くにいると"私もまだ伸びなきゃ"と思わされるし、テンション感がそのまま歌に出るので、mayuちゃんのテンションを上げるドラムを叩きたいなと思いますね。

こんなバンドさんが
出てくださるなんて
誰も予想できなかったんじゃ。(SAKI)

――ファンにとってはもちろん、本人たちに



とってもいろいろなことが見えたショウだったと思います。良かったところがある反面、今後成長するための反省点なども発見できたのでは？

むらた　それはもちろん。でも、言ったらダサくないですか（笑）？

SAKI　やっぱりお客さんも含めて、“最初のライヴ”として観てくださった点がいっぱいあったと思うんですけど、今後はそうじゃないものをもっと見せつけていきたいし、みんなで成長していきたいなと思いました。

——例えば個人的には？

SAKI　MC……かな。錦鯉は本当に。

——それをまだ言いますか（笑）。

SAKI　ハハハ、それは冗談として、MCでもっとお客さんを巻き込むことができただろうし。普通なら小さいライヴハウスでのツアーを経て、お客さん側の“NEMOPHILAはこういうバンドだから、こうやって聴こう”とか、自分たちも“NEMOPHILAのお客さんはこう”みたいなものができてくると思うんですけど、今回はそういうものがまったくなかったので、お互いに“どう出るんだ？”って、うかがっちゃった部分もあると思うんです。

むらた　それだ！　“うかがう感”をもっとなくせば良かったんだ。

SAKI　どうしても“初めまして感”が抜けなくて。ライヴをやっていないから、普通だったら“オイ！　オイ！”って盛り上がりそうなところも、みんな手を挙げていいものなのか、どうノッていいのか、静かに聴けばいいのか全然わからなかったと思うんです。

——それは、実際にそういう場をたくさん作っていく以外、構築する術はないとも言えますね。それこそ6月からスタートする《対バン・ツアー》は、お客さんとのグルーヴを作る大きなステップになるのでは。

SAKI　最初に氣志團さんが決まったと聞いて、“おおぉ！　本当に？”って。対バン・ツアーするよ、Zeppだよっていうのは聞いていて、とにかくみんなで一緒にやりたいミュージシャンをいろいろ言ったんだよね。しっちゃかめっちゃかに言いまくっていたら最初に氣志團さんがOKしてくださって、そこからいろんな方もOKしてくださって。こんなバンドさんたちが出てくださるなんて……という驚きがまず最初にありました。この対バンは、誰も予想できていなかったんじゃないかな。

むらた　確かに。きっと、みんなが“えぇー！”って思っただろうね。事務所のコネつながりじゃないんだ、みたいな。

SAKI　変な話、SHOW-YAさんとかGacharic Spinっていう声が多くて。確かに大好きな友達だったり大先輩だし、メタルはもちろん大事なんだけど、もっといろんな人を巻き込んで大きくなれたらいいのかなとも思っていて。

むらた　そもそも、対バン・ライヴだって全然してないもんね。

SAKI　してない。それこそ2019年の12月にGacharic Spinとやったツーマンが最後なんで。でもそのライヴは、NEMOPHILAにとってすごく大きかったなと思うんです。

むらた　大きかったね。みんな緊張していて、変にリキんでるみたいなのがあったもんね。

SAKI　10年以上やっているバンドの凄みみたいなものを隣で見て、もっとバンドとしてちゃんとやっていきたいよねって、5人で喋ったりして。あそこからまた意識が変わったと思います。

むらた　ボロボロにされた感がね……あのライヴはね。

SAKI　あそこで多分メンバーそれぞれに気づきがあったと思うし、そこで意識が変わったと思うんです。

——次の対バンでは、それこそ10年どころではないキャリアのバンドとステージをともにします。

SAKI　30年、40年……。

——しかも、それぞれのファンがいるなかであり、また両バンドのファンであっても、自然と内容を比べて観てしまうことにはなりますよね。1月のライヴ以上に気合を入れて臨まなくてはいけないと言えるのかも。

むらた　まさにそのとおりで、ライヴの場数も全然違うので。それこそ技術的なところもそうだし、ステージ上での環境づくりも絶対ためになることがあると思うし。それに加えてバンド感とか一体感、ステージング……それに今まではほとんどホームでのライヴしかしていないので、アウェイ感の

Live Information

来る6月には対バン・ツアーを決行！
《NEMOPHILA Zepp Tour 2022 ～虎穴に入らずんば虎子を得ず～》

インタビューでも語られているように、6 月にはジャンルを超えた先輩格を相手にした対バン・ツアーが行なわれる。
各シーンの強豪を前に、新たなNEMOPHILAは誕生するのか!? 見逃せないっ！

with MUCC
6月3日（金）
@Zepp Fukuoka
開場17:15／開演18:00
問 キョードー西日本
☎0570-09-2424（平日・土11:00～17:00）

with ラウドネス
6月11日（土）
@ Zepp Osaka Bayside
開場17:00／開演17:45
問 キョードーインフォメーション
☎0570-200-888（月～土 11:00-16:00）

with ROTTENGRAFFTY
6月24日（金）
@ Zepp Haneda（TOKYO）
開場17:45／開演18:30
問 DISK GARAGE
◎https://info.diskgarage.com
☎050-5533-0888（平日12:00～15:00）

with PassCode
6月10日（金）
@Zepp Nagoya
開場17:45／開演18:30
問 キサンデーフォークプロモーション
☎052-320-9100（全日12:00～18:00）

with 氣志團
6月18日（土）
@ Zepp Sapporo
開場17:00／開演17:45
問 マウントアライブ
◎https://www.mountalive.com/contact/

● SHOW-YA PRODUCE 『NAONの YAON 2022』にも出演！
【出演】SHOW-YA、杏子、相川七瀬、渡辺敦子（ex. PRINCESS PRINCESS）、富田京子（ex. PRINCESS PRINCESS）、NEMOPHILA、Gacharic Spin
4月29日（金・祝）@日比谷野外大音楽堂
開場 14:00 ／開演 15:00

お客さんとも対面しながら演奏するというのは、本当にいい成長の場だと思います。
SAKI　ただ本当に単純に、楽しみという気持ちもあるんです。ラウドネスは大きな意味では同じメタルかもしれないですけど、キャラクターは全然違うので。
むらた　変に萎縮しちゃったりとか、触発されて向こう側に寄り添って無理したりとか、そういうのがあったら逆に失礼だと思うので。それまでにNEMOPHILAというズドンとした柱を組み立てていかなきゃなとは思いますね。
――もちろん、対バン自体は今回だけのことではないと思うので、今後は例えばcoldrainやCrossfaithであるなど、世代の近いメタルコア系バンドとの共演も期待したいところです。mayuさんのパフォーマンスは、そのシーンのファンにもインパクトを残せるパワーがあると思います。
SAKI　1stのワンマンのときってSEもなかったので、coldrainの曲で入ったんですよ。もし一緒にできるならやりたいですよね。日本って、メタルとメタルコアって謎の分断が起きているので。
――まさに、その架け橋になれるのでは、と。
SAKI　Mary's Bloodをやっていたときも思ったんですけど、昔、洋楽メタルが好きだった方が戻ってきて今のメタルを聴いてくださることがすごく増えたと思うんです。ので、ぜひそのまま今頑張ってる若手のヘヴィメタルやメタルコア・バンド、ラウドロック・バンドもみんなに聴いてもらえるといいなと思います。もしNEMOPHILAがフェスを開けることになったら、みんな呼んじゃえばいいと思うし。ごちゃ混ぜで、PassCodeもいてラウドネスもいて、NEMOPHILAがそこの橋渡しができるような存在になれたら一番いいなと。
――今後、それができる稀有なバンドになる……と期待している人も多いのでは？
SAKI　そうですね、頑張りたいと思います！
――そしてもうひとつ、新作についても期待されていることと思いますが！
SAKI　どこまで言っていいのか……頑張っているし、なんだったら今やっていることもあるし、みたいな（笑）。ライヴがあるから制作活動は止まりますということは全然なくて、多分今から想像するに、死ぬほど忙しくなるんだろうなと思っています。
むらた　そうですね、労働基準法違反くらいな感じで頑張って働きたいと思います。
――ハハハ、ブラックな感じで。
むらた　もう、ブラック・メタルな自分たちを戒めてやりたいですよね（笑）！
SAKI　1stアルバムに入れなかった曲もあって、“あの曲も入れて！”みたいな声もすごくいただいたんですよ。基本的に私が書いた「Breaking Out」とか「Blooming」とか「Night Flight」って、ライヴ用として作ったんですけど、まだライヴでしかやっていない曲もあったり。ただ、詰めきれていない曲もあって……みたいなこともあるので、それがそのまま次に入るとは限らなくて。音楽面はシビアに作っていますので。
むらた　みんなも作っているもんね。
SAKI　そう、みんな作っているので……なんて言おうかな。
むらた　今答え出しちゃったようなもんですけど（笑）。
――まぁ、近い将来楽しみに……という感じですかね（笑）。
SAKI　そうですね、そんなに待たなくてもいいんじゃないですかって感じかもしれないです（笑）。
――ちなみに、『REVIVE』ではメンバー以外の作曲が多かったですが、次作ではメンバー曲も増えてくる……？
SAKI　これぱっかりは楽曲のクオリティとかバランスが大きいので、今の段階ではなんとも言えないです。
むらた　難しいですね。1stのときも私は“全員の曲入れろー！”って言っていたんですけど、“いや、まとまりを重視します”ということになり。今回もどうなるかはわからないですね。
――そんな新作も含めて、今後の活動も楽しみにしたいですね！
SAKI　そうですね、もう少ししたら、またなにかあるかもしれないよ……ということで！
むらた　対バンの時期はコロナがどうなっているのか……まぁ安全第一、健康第一で、健全な激しい曲をお届けします！

Interview-02

mayu × 葉月 × ハラグチサン

続いては、mayu、葉月、ハラグチサンの3人に登場してもらおう。
先のSAKI、むらたに比べトータル・キャリア的には浅いメンバーとも言えるが、
彼女たちはアルバム制作、そしてワンマン・ライヴにて何を得たのだろうか？
そして6月に控える対バン・ツアーでは、どんな姿を見せてくれるのか？

プレッシャーよりも よっしゃー！のほうが強かった。(mayu)

──1月9日の“フル・メンバー 1st 有観客ライヴ”は、かなり早い段階でソールドアウトとなり、メンバー的にも関心の高さが実感できたのではと思います。

葉月　“チケットが何枚出ていて”という事前情報はいただいていたんですけど、会場に行って椅子が並んでいるのを見ても、そのときは想像ができなくて。紗幕が降りた瞬間に“あ！　すごい”みたいな。大げさなんですけど、ステージで“これが息をしているってことなのかな”って、ミュージシャンとしての嬉しさを感じましたね。

mayu　私のなかでは“ライヴが終わってすごく感動した”じゃなくて、一番最初の紗幕がドンっと落ちたときの、皆さんが想像以上にいっぱいいたことに驚いたというのが、今でも一番の思い出になっているんです。その日を総合するインパクトというか、たくさんの人が応援してくれているんだ、というのを感じられたのが大きいですね。

ハラグチサン　一番最初に聞いたときは、まだ想像できない感じで、お客さんは本当に来てくれるのかな？という不安もあったんですけど……ライヴが始まって最初の紗幕が降りた瞬間、久しぶりということもあり“やばい、人が目の前にいるってこういうことだ”って。お客さんは“おうっ！”となったと思うんですけど、自分たちも“おうっ！”となっていて（笑）。

──SAKIさん、むらたさんも、その瞬間のことが印象に残っていると言っていました。大会場がフルハウスであるということは、ある意味プレッシャーにもなっていたのではと想像するのですが。

mayu　プレッシャーよりも、“よっしゃー！”のほうが強かったですね。日に日に数字が増えていって“ソールドアウトしたよ”って聞いた嬉しさのほうが大きかったので。空席を気にしてやるぐらいなら、満席のほうが気持ちも楽しいし嬉しいですから。

ハラグチサン　私は、逆にちょっとプレッシャーで……。ただプレッシャーには感じていたんですけど、逆にそう感じていないメンバーと話をすることで、ライヴが近づくにつれてだんだんと楽しみが勝っていきました。

──ファンのライヴへの期待は、その前段でリリースされた『REVIVE』への答えとも言えそうです。本作は、自分のどんな部分が強く出たアルバムだと思いますか？

葉月　ギターに関しては、昔からハードロック／ヘヴィメタルを聴いてきたので、その経験が生かせた曲もあったり。それとはまた別に、疾走感のあるキャッチーなメロディに自分のフレーズを入れるのがすごく楽しかったり。わりと息継ぎのないシュレッド系のギター・ソロはよく出ていると思うんですけど、ほかにも泣きのギターがあったり、いろんなエッセンスを入れていけたかなとは思います。

ハラグチサン　今回は、自分でも“そういうスタイルがあったんだ”と気づけるような、集大成みたいな感じになっていると感じました。今までやってこなかったプレイ・スタイルをどんどん取り入れている曲もあって。これから、もっと幅の広いベーシストになれるんじゃないかと。

──楽曲に自分を引き出してもらったという感じですか？

ハラグチサン　そういうところ、ありますね。もともとはツー・フィンガーでガンガン系だったんですけど、ここは全部サムでやってみようとか、ここはピックでギャンギャン弾こうとか、そういうスタイルがいろいろ散らばっている感じです。またテクニカルな部分もちょっとずつ……本当にちょっとずつ見えてきた感じはしています。

mayu　私も同じくです。“この楽曲を歌わなかったら、こういうアプローチはしなかっただろうな”ということがいろいろあって。レコーディング中もそうですし、リハを重ねてライヴで披露して、余計にすごくわかっていったんです。スクリームの出し方にも、最初からフル・パワーなのか、徐々に加速していくのかとか。

──歌っていくことで、どんどん自分のもの

ベースとドラムで練習を
するようになってから、
音もメンタルもいい方向に
変わってきて。

―― ハラグチサン

ジャンルも違えば経験値も違う
未知の対バンなんですけど、
意外にもプレッシャーには
感じてなくて。

―― 葉月

自分で自分を良くしようと
思わなきゃ、NEMOPHILAの
mayuは良くならない。

―― mayu

になっていったという。

mayu　課題が多いアルバムだったので最初は不安もあったんですけど、1曲1曲できていくうちに自分の曲になっていくのがわかりました。いろいろな曲調を歌っていくうちに、"歌い出しでブレスした瞬間に、その曲の空気感に入り込む"ということができるようになっていったというか。

――リハーサルについても、充分に時間を作れたという感じですか？

mayu　今回は1ヵ月前からステージを想定した広めのスタジオで横の動きやライン、お立ち台の高さなども確認できたので、充実したリハーサルができたんじゃないかなと思いますね。

――SAKIさんやむらたさんは、大きいステージの経験もあり、キャリアとしても先輩にあたります。おふたりからのアドバイスなどはありましたか？

ハラグチサン　たむさんとふたりでリズム体の練習をしたときは、音を合わせる以外にもいろんな話をしてすり合わせていったりとか。そういう機会が増えてからは、ミュージシャンとしても人としても、たむさんの話が自分にはすごいグサグサと刺さったりして。そのなかで自分を補正していくことがけっこう増えました。

――それこそ、むらたさんの家で一緒に練習をしたりもしたそうで。

ハラグチサン　そうですね、夜ご飯まで一緒に（笑）。ベースとドラムで練習をやるようになってからはいい方向に変わってきて、それは音だったりメンタルですごく感じています。

葉月　SAKIさんとはギタリスト同士なので、ライヴに関すること以外でも"ここどうしようか"とかLINEすることは多いんです。そういうときも、自分で気づいていなかったところをアドバイスしてくださったり、フレーズに関しても教えてもらうことが多々あり。私はいつもポワンとしているので、ちゃっきーさんとギターを弾いたり話しているときは、いつもシャキッとしなくちゃと思わされますね。

――お姉さん方は、引っ張っていってくれるタイプ？

mayu　どちらかというと、"一緒に"って感じで接してくれるイメージがあるかな。ただ、経歴を気にして……ということではないんですけど、"お姉さんチーム"って感覚もあるっちゃあります（笑）。

ハラグチサン　わかります～。

たくさんのお客さんを楽しませるためにも、もっと進化しないと。（ハラグチサン）

――今回のライヴで初めてプレイする楽曲もありました。オーディエンスの前で披露して、改めて発見できた曲の個性はありましたか？

葉月　声が出せない状況ではあったんですけど、「HYPNOSIS」～「GAME OVER」～「Creature」にかけては、ライヴでしか味わえないグッとくる要素が詰まっている場所だと知れました。こっちを見つめてくれる皆さんの表情や目が印象的で。

ハラグチサン　"ここはこういうノリだ"みたいなものは曲によって全然違っていて。"この曲はもっとこうしたほうがいいのかな"とか、ライヴをしたからこそわかる新しい発見がたくさんありました。

――また、やはり一番最初にお客さんの目がいくのはセンターにいるmayuさんのパフォーマンスで、それがまた非常に堂に入っていると感じました。ピッチ感も発声も安定していて、かつ立ち振舞もとてもロックで。これは一朝一夕では生まれないなと。

mayu　そうですね、以前は無理したほうがいいんじゃないかと思っていたんですけど、やっぱり今は体を第一優先にしないとちゃんと声が出ないということを知りました。例えば"ちょっと筋肉痛や肩こりがあるな"だけでも違うというのがわかってきたというか。それからはちゃんと基礎体力を上げるとか、ちゃんと朝起きて夜寝るとか、そういった生活を徹底するようにしてからだいぶ変わったし、何よりNEMOPHILAを始めてから一度も風邪をひいていなくて。

――それはいい効果ですね。ハラグチサンは10代の頃からmayuさんを知っていますが、当時と比べてどうですか？

ハラグチサン　当時もけっこう攻め攻めで（笑）。だから、あまり変わらず？

――ハハハ、なるほど。ただ、内面では大きな変化があったんでしょうね。

mayu　変化は、何よりも自分の好きなことという認識で、このバンドがやれていることと言うか。今みたいに自分が自分を良くしようと思わなきゃ、NEMOPHILAのmayuは良くならない。それは誰かに言われたことをやるのではなく、自分で決めなきゃいけないことで、そう思うと心的にも大人にはなりました。しかも、それが一番プレイにもつな

がるのかなと。
——ヴォーカルは、心の面が特に表に出やすいと言えるかもしれませんね。
mayu　心情の変化もそうだし、もちろん喉も歳をとっていくので、以前に比べれば今のほうが深みが出てきたかもしれないです。まぁ、スタイル的にはあまり変わってないかもしれないですけど（笑）。
ハラグチサン　うん、昔からイケイケなギャルのイメージ。でも優しくて（ニコ）。
——またメンバー自身が好きな要素として、"ゆるふわ"な演出が垣間見られるショウでもありました。ちょっとダンスがあったり……。
葉月　確かにそうですね。リハ中にじゃれ合ってたらできた、みたいな（笑）。
——セットの中盤に記念撮影があるっていう流れも初めてで。
mayu　なんか"じゃあ最後に写真！"って、ちょっと間延びしちゃう感もあるなと思っていて。私たちのなかで一番最後に「Life」を持ってきたのには意味があって。やっぱり激しいライヴをやったあとに"最後に「Life」を持って帰ってもらおう"という気持ちがあったので、そのあとに写真撮影ってなんだかもったいなくない？と。若干不思議な空気になったのを感じましたけど（笑）。
葉月　ライヴの最後にやるのは……というのは一致していて。確かに会場がドヨドヨしたのは感じましたけど、それはそれでいい思い出になりました（笑）。
——選曲ということでは、バンドの知名度を上げる要素にもなっているYouTubeでのカバーですが、結果的にはすべてオリジナル曲となりましたね。そのあたり、"自分たちの曲だけで勝負するぞ"という気持ちの表われなのかなとも。
葉月　そうですね。みんなそろっての1stワンマンだったので、"これがNEMOPHILAです"というのを示すために全曲オリジナルでやったということもあって、今回カバーは置いておこうかということになりました。
mayu　案は一応あったよね。
葉月　「明日なき戦い」はリハで弾いてもいたんですけど、結局はオリジナルでやろうということになり。
——ゆるふわなセクションがありつつ、全体としてはガシッとした迫力のある音を聴かせられたコンサートだったと思います。いいところが見えた分、今後の向上につながる反省点にも気づけたのでは？
葉月　もちろん個人としてのものもありますけど、ちょうどこの間、ライヴ映像を観ながらメンバー間で反省会もしたんですよ。
mayu　技術面は各々あるから、それは自分で噛みしめろみたいな。みんなで改善できることとして、やっぱりもっとライヴ慣れや場数を踏まねばならないね、という課題もあって。歌を歌っていて余計に思うんですけど、例えば「Fighter」にはみんなで腕を挙げるポイントがあるんです。ただ、そこにバラつきがあるのは、私がやったりやらなかったりだからだな……とか。私が常にそこで腕を挙げれば、"ここで挙げるんだ"って、みんなが理解してくれると思うんです。
——フロントマンの役割とも言えますね。
mayu　もちろん私たちが有観客でライヴをやっていないから定着していないということではあるんですけど、みんながノリを探っている感じから"これはもっと私たちが誘導しなければ"というのは感じたかな。
ハラグチサン　動画を観て、自分が思っているよりも動いていないな、とも思えて。たくさんのお客さんを楽しませるためにも、もっと進化していていかないとダメだなと思いました。
葉月　私は、"自分が楽しかった"というのが一番にあってしまったので。自分と来てくれたファンの人とが一緒に楽しかったを共有できるような、余裕と一体感がもう少し増せばなと思います。
——やはり、そのあたりも場数ということになりそうですね。総じて、今回のショウでは、NEMOPHILAのどういった部分が出せたと思いますか？
mayu　初めまして感が強かったので、これがNEMOPHILAですっていうのは確かに出せたとは思います。もしかしたら、もっとゆるふわな部分、もっと普段の私たちらしさも混ぜ込んでいくのもアリかなとは思いました。
葉月　mayuちゃんが言ったように、素から出る笑顔がみんなの魅力だと思っているので、ファンの人も笑顔になって、自分たちも笑顔で演奏してっていう部分も作っていきたいですね。
——ですね。ただ、その意見とは逆になってしまいますが、よりハードな部分を出すことで、もっとコア系の音楽が好きな人へもNEMOPHILAをアピールすることができるのではとも感じました。
葉月　確かに。サビにはJ-POPみたいなラインのある楽曲が多くて、なおかつイントロ

やAメロがめちゃめちゃハードで……NEMOPHILAはそのギャップがあるバンドだと思うので。

mayu　個人的にはすごくいいバランスだと思うんですけど、例えばスラッシュ・メタルやデス・メタル系が好きだっていう人にもアプローチできる瞬間があってもいいなとは思いますね。

いいところはそのまま残しつつ新しい部分も見せないと。(葉月)

――さて、経験値を上げるという意味では、格好のチャンスとも言える対バン・ツアーが決定しました。自分たちのステージではもちろん、共演者からはいろいろなものが得られることと思います。

mayu　どのアーティストさんにも共通しますが、グルーヴというか一体感でいうとバケモノ級の人たちで、それは今私たちが最も課題にしようと思っていることでもあって。対バンまでにそれを仕上げていかなければ、挑む意味がなくなる気がするし、それができたらNEMOPHILAはすごい急成長できるとも思うし。

ハラグチサン　今回、いろんなジャンルの方がいますけど、そのジャンルのなかのカッコいいバンドさんたちだと思っていて。だから私たちも、サウンドを聴いただけで“ロックだ、やっぱりカッコいいわ”と思ってもらえるようなバンドにしていきたいです。

葉月　ジャンルも違えば年齢も違って経験値もまったく違うので、未知の対バンなんですけど、意外にも自分的にはプレッシャーには感じていなくて。のほほんとしているからかな……それが自分のいいところでもあるかな、とは思いますけど（笑）。ただ、しっかりとジャンルやアーティストさんに向き合って、“いいライヴだったね”と帰ってもらえるようにしたいとは思っています。

――対バン相手についても、いろいろリクエストをしていたそうですね。

葉月　名古屋で共演するPassCodeさんは、初期の段階から対バンしたいって言っていて、それが叶ってすごい嬉しいんです！ PassCodeさんってかわいらしいキャラクターだけどサウンドは地獄のようにハードなので、“地獄のゆるふわvs地獄のゆるふわ”で、いろいろ吸収させていただこうかなと思っております。

mayu　一番最初にNEMOPHILAが出てきたのって《METAL WEEKEND 2019》での、ラウドネスさんの前座なんです。それが次は対バンでっていうのが、個人的にすごくエモくて。だからすごく嬉しいのと、でもヤバいなっていう……いろんな感情が入り混じってます（笑）。

――そのためにも、6月までによりパワーアップすることは必須ですね。また別の面として、今欧州では女性ヴォーカルのヘヴィ系バンドが非常に元気です。今後はそのあたりにも攻めていけるといいなとも。

mayu　もちろんです。日本人は子供に見られがちだし、私は特に小さいので、“こんな子が？”と思われているところを、ボコんとやりたいなと思っています（笑）！　それはプライドもありますし、そんな日も楽しみだなと思います。

――ぜひ、そんな姿が見たいですね。さて、お姉さんチームにもうかがったんですが、ライヴはもちろん、今後の新作も気になるところですが……。

葉月　ライヴもやるしレコーディングもしてリリースもして……常に全力で走っていきたいなとは思っていますね。

mayu　そうですね、期待していただいていいんじゃないかと（笑）。

――その作品では、どんなNEMOPHILAを見せたいですか？

mayu　もしそれが“2nd的”な扱いになるのなら、新たな一面というよりも、さらに深掘りしたNEMOPHILAを見せたいなとは思っています。

葉月　根本的なバンドのテーマである“地獄のゆるふわ”という部分は変えたくないので、いいところはそのまま残しつつ、やっぱり新しい部分も見せないといけないので。ミクスチャー的なものが入っていたり、ゴリゴリのハードロックもやっていきたいですね。個人的なことを言えば、もっと音楽的にも成長していきたいので、より新しい自分が見せられたらな、と思います。

ハラグチサン　個人的には、NEMOPHILAをもっとダークにしようという計画を進めています。ダークなものはより一層ダークに、エモいものはエモすぎて心が苦しくなるような、今までの曲たちよりもさらに攻めた曲を作っていきたいです。例えばmayuちゃんにずっとシャウトしてもらったり。

――きっと近い未来に……楽しみですね！

葉月　ぜひ、期待していてください。

mayu&ハラグチサン　お願いします！

NEW NOISE P.116
これが次代を彩る注目の激音だ！

DISC REVIEWS P.120
２月１日～４月30日リリースの新作をピックアップ！

METAL NEW GEAR P.124
メタル・ミュージシャンにお薦めのニュー・ギアを紹介！

Special Presents!

メタルハマー・ジャパン・オリジナルのスペシャル・アイテムをドドンとプレゼント！
希望者は右のQRコードからアンケートにお答えのうえ、希望アイテム（番号と商品名）を記入してください。
◎締め切りは［6月10日（金）］まで
当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
たくさんのご応募、お待ちしております！

①YOSHIKI
サイン色紙
＜2名様＞

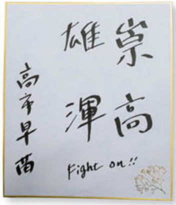
②アウトレイジ
オリジナルＴシャツ
＜1名様＞
※サイズはXL。

③Koie＆Teru（Crossfaith）
サイン色紙
＜2名様＞

④SAKI＆むらたたむ（NEMOPHILA）
サイン入り写真
＜2名様＞
※画像はイメージ。サインはあとから入ります。

⑤mayu＆葉月＆ハラグチサン（NEMOPHILA）
サイン入り写真
＜2名様＞
※画像はイメージ。サインはあとから入ります。

⑥YUHKI
サイン入り写真
＜2名様＞



⑦高市早苗
サイン色紙
＜1名様＞

...AND JUST A LITTLE INFO FOR ALL

海外シーンではすでに頭角を現わし、本邦でのブレイクも虎視眈々と狙うバンドたち。
そんな次代を彩る注目の激音をピックアップ！

『Fragments of a Bitter Memory』

DYING WISH

ダイイング・ウィッシュ

凶暴なるメタルコアとスウェディッシュ・メロデスを継承 女性ヴォーカルを擁するハードコア界の期待株！

ヘヴィ・ミュージック界の輝ける若きヴォーカリスト、エマ・ボスターを擁するダイイング・ウィッシュは、2018年にポートランドにて結成された。凶暴でエモーショナルな音はキルスウィッチ・エンゲイジといった2000年代のメタルコアやスウェーデンのメロデスを継承し、社会や政治不安への怒りをぶつけている。

彼らのブレイクは2018年にノックド・ルースが行なったライヴの前座に選ばれたことに遡る。ノックド・ルースのフロントマン、ブライアン・ギャリスが2ndアルバムのゲストとして誘うくらい、エマの歌唱は強く気に入られたのだ。それをきっかけにダイイング・ウィッシュは脚光を浴び、その後カウンターパーツの全米ツアーの前座にも選ばれ、ハードコア界の期待の新星となった。

2020年夏、ニュージャージーにて録音されたデビュー・アルバム『Fragments of a Bitter Memory』について、エマは**“3年前、バンドを始めた頃には作れなかった作品”**と表現する。

アルコール中毒の義父からの虐待という自身のつらい過去を綴った曲(④⑤)では、抑えきれない怒りと恨みを訴えながらも、そういった環境下で生き抜くために抱かざるを得なかった複雑な感情を表わしている。また③ではポートランドで発生した“ブラック・ライヴズ・マター運動”に参加した体験をもとに、政治的姿勢を明らかにしている。**“私たちは左翼的で、民主党よりも過激だと言えるでしょう。民主党だけではなく、リベラルなファシストたちとも相容れることはないと思う”**と自身の政治観についても語っている。

バンドの目標としてエマが願うのは、活動が少しでも長く続くことであり、そのためには音楽を作るための内なる原動力が必要だという。**“私たちは重要なトピックを声高に発していきたくて、メタル界で頻繁にうたわれている古臭いことばかりを訴えるつもりはない”**とつけ加える。

FOR FANS OF: ノックド・ルース、キルスウィッチ・エンゲイジ、ブリーディング・スルー

FROM MHJ スピード・チューンの上で女性ヴォーカリストのエマ・ボスターがグロウルを放つという、アーチ・エネミー的な要素も多分に持つ彼女たち。そこにメタルコア・ライクな緩急も取り入れられ、広い層に好かれそうな印象だ。ギターのキャッチー度は<中>ぐらい？

FATE GEAR

フェイト・ギア

『Killers in the Sky』

ファンタジック×アグレッション 日本発ガールズ・スチーム・メタル楽団！

元DESTROSEのMina隊長(g)が１年の休息を経て、2015年にスタートさせたFATE GEAR。作品ごとに乗組員(メンバー)を集め編成するこの"ガールズ・スチーム・メタル楽団"は、スチーム・パンクからインスパイアされ、ファンタジーの世界とメロディアスなメタルを融合したプロジェクト・バンドだ。

これまでに発売された作品でのサウンドとその世界観は欧米でも高く評価され、海外ツアーでも高い人気を得た。**"実際に、こんなにも自分たちのファンが海外にいたんだなと感動しました"**とMina隊長は嬉しそうに語ってくれた。

そんな彼女たちは、4月27日に新作EP『Killers in the Sky』を発売する。本作ではヴォーカル３名を含む計４名のゲストを招き、新たなサウンドを聴かせている。特にリード曲の「Live in blood」は、バンド史上最もメロデス色の出た一曲だ。**"アレキシ・ライホが亡くなってから、また自分のなかでチルドレン・オブ・ボドムのブームが再来したんです。今までになかったスピーディなメロデスになっているので注目してほしいですね"**。

さらに、今年の４月には３度目の海外ツアーも決定。**"演奏とパフォーマンスはレベルアップしているので、「日本のバンドはスゴいんだぞ！」と見せつけてやりたいです！"**。国内外を問わず幅広い活動を目標にする彼女たちに要注目だ。

FOR FANS OF：シーユースペースカウボーイ、DESTROSE、Disqualia、Mary's Blood

FROM MHJ　独特なコンセプトを持っている彼女たちの曲調は、ゲスト・ヴォーカリストによって、メロディアスからブルータル系まで幅広いので、各ジャンルのファンにハマる曲が見つかるはず。まずはその個性的なルックスに惹かれて聴いてみてもいいかも！

THOUGHTCRIMES

ソートクライムズ

2017年に解散したザ・デリンジャー・エスケイプ・プランのドラマー、ビリー・ライマーは創造の新たな捌け口としてソートクライムズを始動させた。

ビリーは**"俺はガキの頃にギターをやってたんだけど、そのときもドラムっぽくプレイしているなと言われていた。今も単に曲を書いたりパターンを考えるのを楽しんでいるだけだね"**と2019年発表したEP『Tap Night』の制作について振り返る。

ビリーを中心にニューヨークで結成された彼らはデリンジャーの流れを組む勢いのあるリフ、変拍子や激しいブレイクダウンなどを披露しつつも、メロディやグルーヴもたっぷりと聴かせている。一週間で録音したそのデビューEPについては、**"完璧にやろうなんて思わないようにしていた。そうしないといいアイディアを潰しかねないからさ。ただこれはEPだったからできたことで、再びこんな風にやりたいとは思わないと思う。ただ出来に関してはこの上なく誇りに思っているさ"**。

今年リリースが見込まれている1stフル・アルバムは、より大きく、より進化したものになる予定だと話す。**"俺らは確実にひと皮剥け、昔だったらできるとすら思わなかったことにもトライするようになったんだ"**と展望を語る。

元ザ・デリンジャー・エスケイプ・プランのドラマーによる 新たなハードコア・バンドが誕生

FOR FANS OF：ザ・デリンジャー・エスケイプ・プラン、エヴリ・タイム・アイ・ダイ、コウアレス

FROM MHJ　"そりゃそうだ、ビリーのバンドなんだから"という、90年代グラインド・コア的なサウンドを聴かせる彼ら。デリンジャーのイメージを求めて手にとって問題ないバンドだが、曲によってはかなり作風が違ったりも。彼の言葉どおり、次の1stフルでその本性が見えるか。

EXTINCTION A.D.

エクスティンクションA.D.

コロナ禍の影響から再出発！ 破壊的スラッシュでリスナーの首根っこをつかめ

“切磋琢磨し続けることによって成長を遂げる”という言葉は、まさしくエクスティンクションA.D.のことを表わしている。ニューヨーク州ロングアイランドのスラッシュ・バンドは、レーベルからの離脱、3rdアルバムのレコーディングの中止、ツアーのキャンセルなど、コロナ禍による影響を大きく受けた。その代わりに生み落とされたのは、リスナーに生まれ変わった印象を与える、破壊的なサウンドを詰め込んだ4曲入りEP『Chaos, Collusion, Carnage & Propaganda』である。

“俺らは歳を食って強情になり、あきらめることができなくなった。これは俺らの新たな一歩で、今までが拳の連打なら、これからは有刺鉄線やバットを手にして、ブレーキの壊れたバンで殴り込みにいくようなもんだ”と、リック・ヒメネス(vo／g)は笑いながら話す。

リモートでの制作となった、新レーベル[ユニーク・リーダー]からの本EPには、3曲のオリジナル曲と、光速でスピーカーを揺らさんばかりのセパルトゥラのカバー曲「プロパガンダ」が収録され、そこからはバンドの決意が感じられる。歌詞に絡みつく、切れ味のある鋭いリフはレイジ・アゲンスト・ザ・マシーンを彷彿させ、一聴すればオーディエンスが踊り狂うピットが思い浮かぶだろう。

“昔は手を振って呼び込む程度だったけど、今じゃ首根っこをつかんで「いいか、俺らに注目しやがれ！」って脅しているような感じだ。そして誰もが喉を押しつぶされても、喜んでいるのさ”。

FOR FANS OF：セパルトゥラ、イーヴァイル、ハヴォック、ヘイトブリード

FROM MHJ “メタル度の高いハードコア”という点で、ヘイトブリード・ファンにはドンズバとも言えそうだ。かつ、リック・ヒメネスの歌声が若干明るい印象もあるため、見た目ほど悪そうな音でもないという(笑)。曲調もキャッチーなので、CD以上にライヴでウケそうなバンドでもある。

POORSTACY

プアステイシー

中毒者続出！ アメリカ発の若手ニューメタル・サウンド

自信に満ちたフロリダ出身の22歳プアステイシーは、ジャンルを再定義するサウンドを持っている。そして、彼のフォロワーとなったアーティストが続出している。最新作『Party At The Cemetery』からの過激なシングル「Knife Party」では、ブリング・ミー・ザ・ホライズンのフロントマン、オリヴァー・サイクスが得意のスクリームを披露している。

彼を形成してきたのは幼き頃から聴いてきたディスターブド、スリップノット、マイ・ケミカル・ロマンスといったヘヴィなサウンドである。2020年にリリースしたデビュー・アルバムからのシングル「Darkness」は、まさに彼の現在のサウンドを当時から示唆していた。**“「どうすれば人気が出て、より多くストリーム再生されるんだ？」なんて一切考えず、ずっと好きなことを追求してきた。それが今回のアルバムへとつながったんだ“**と明かす。

FOR FANS OF：ブリング・ミー・ザ・ホライズン、ホット・ミルク、マイ・ケミカル・ロマンス

FROM MHJ 音色でヘヴィさを打ち出すというよりは、感情的な歌唱でエモーショナルさを訴えるプアステイシー。またテクノやEDMを取り入れた楽曲もあり、多面的なスタイルは2020年代らしいとも言えそうだ。日本市場的には、好き嫌いが分かれそう？

DOODSWENS

ドゥードスウェンズ

トントン拍子で頭角を現わした、ブラック・メタル界の新世代デュオ

このオランダ産デュオは一曲も録音することなく、ライヴを行なうことで話題のバンドとなっていった。**“俺らはジャムっただけで、それが人々の目に止まった。最初のライヴ後にやっとバンド名がついたくらいだ”**とドラマーのインゲ・ファン・デル・ゾンが振り返る。

その最初のライヴ音源がバンド初のデモとして2019年初にリリースされ、さまざまなフェスへの出演や名立たるバンドたちとの共演に結びついていった。

それから3年のときを経てリリースとなった1stアルバム『Lichtvrees』は、第二世代のブラック・メタルに影響を受けつつも、オランダのアンダーグラウンド・シーンを代表する作品となった。**“俺らは成長とともに音楽も変化した。サウンドを発展させるための時間もあったし、このアルバムには相当な想いも込めている”**とフランキー・ファン・バーグ(vo／g)は語る。

FOR FANS OF：ダークスローン、エンスローンド、ヴィーガドゥード

FROM MHJ ドラムの乱打に無機質なコードを乗せ、そこに陰鬱かつ平坦なグロウルを覆いかぶせる、初期ノルディック・ブラック・メタルの素養をしっかりと受け継いでいる。雑味のある生々しい音色も武器となっている。ギャップのあるMVもぜひ。

FRONTIERER

フロンティアラー

メタルコア×エレクトロのミックス・ノイズ DIY精神でファンの心をつかむか!?

フロンティアラーの音楽には激しいメタルコア、エレクトロニクス、エラーのようなノイズが混ざり合い、スリルと恐怖で満ち溢れている。**“俺らの好きなサウンドを混ぜ合って、音として吐き出したらこうなった”**と語るのは、バンド創設者ペドラム・ヴァリアーニ(g)だ。

2012年の結成以来、彼らはオンライン上でフォロワーを増やしてきた。最新アルバム『Oxidized』は数時間で売り切れ、2021年度はSpotifyにて100万回再生も記録。メインストリームにいながらも、彼らはDIY精神で活動を続けている。

“俺らは今までどおり口コミ・ベースでやっていくつもりなんだ。直接ファンとつながることで、彼らの興味を惹いたり信頼を得ることができる。こうやって得たハードコアなファンのなかには、俺らのほうが好きになってしまったヤツもけっこういるよ”と、活動の秘訣を教えてくれた。

FOR FANS OF：アイオン・ディソナンス、コード・オレンジ、ピューピル・スライサー

FROM MHJ デジタル音を巧みに活用するカオティック・コアは昨今の北米の流行とも言え、そのシーンへの新たなカンフル剤となりえるのでは。ただ、曲調のバリエーション(特にテンション感とヴォーカルの抑揚)が少ないので、数曲でお腹いっぱいになりそうな気も……。

TUSKAR

タスカー

自身の体験から絶望と希望を届ける ツーマン・スラッジ・メタル

ミルトン・キーンズ発スラッジ・デュオのデビュー・アルバム『Matriarch』は特別な一枚だ。これについて**“俺は昔薬物依存がヒドかったけど、トム(g)や友人たちの力を借りて抜け出せた。妹も同じ苦しみを味わい、母は癌を経験した。ドラマ並みの体験ばかりだったんだ!”**と、タイラー・ホッジズ(vo／d)が自身の体験を話してくれた。

“こういった体験をもとにして、ライヴ演奏では他者への慰めの気持ちを提供することを重要視している”とトムは言う。**“その場の人たちとどれだけつながれるかが大切で、そのために俺たちは生身の姿をさらけ出しているんだ”**。

そして絶望だけではなく、**“人生は悪いことが起こりもするけど、いいことだってあるんだ。俺らはリフや荒々しさ以外にもそういったことを共有したいのさ”**と本アルバムのもうひとつのメッセージを語ってくれた。

FOR FANS OF：マストドン、ビッグビジネス、バラ

FROM MHJ ドラマーがヴォーカルということで、まずライヴでの見え方が非常に気になる彼ら。まさにリフレインと言えるギターが腹にズシリとくるが、各楽曲の構成にも展開があるので、あまり“スラッジ”というジャンル表記にとらわれずに聴いてみてほしい。

『ロック・ビリーヴァー』
スコーピオンズ

ユニバーサル／ UICY-16053
発売中

①ガス・イン・ザ・タンク②ルーツ・イン・マイ・ブーツ③ノック・エム・デッド④ロック・ビリーヴァー⑤シャイニング・オブ・ユア・ソウル⑥セヴンス・サン⑦ホット・アンド・コールド⑧ホエン・アイ・レイ・マイ・ボーンズ・トゥ・レスト⑨ピースメーカー⑩コール・オブ・ザ・ワイルド⑪ホエン・ユー・ノウ(ホエア・ユー・カム・フロム)
ボーナス・トラック⑫シュート・フォー・ユア・ハート⑬ホエン・トゥモロー・カムズ⑭アンリーシュ・ザ・ビースト⑮クロッシング・ボーダーズ⑯ホエン・ユー・ノウ(ホエア・ユー・カム・フロム)(アコースティック)⑰アウト・ゴー・ザ・ライツ

FOR FANS OF：AC/DC／シン・リジィ、ゲイリー・ムーア／初期ナイト・レンジャー

ロックを信じ続けて50年
エネルギー満載で放たれる7年ぶりのニュー・アルバム！

さかのぼること5年半、[ラウドパーク16]で一番快活にロックしていたのはスコーピオンズだった……と自分の記憶には強く残っている。もちろんほかにもたくさんの素晴らしいバンドがそれぞれ強烈なステージを観せてくれたが、“キャリア45年になろうとしているバンドが、今もこんなパンチのあるショウをやるのか”と驚いたのだ。そしてそこから月日は経ち、彼らは本2022年、ついにデビュー50周年を迎えた。そしてリリースされたのが、19枚目のスタジオ作となる『ロック・ビリーヴァー』だ。

1曲目を聴くだけで、文頭の印象は間違っていなかったと納得できるほどロック＆スウィングしまくっている。そうさせた大きな要因だと思われるのが、母国ドイツのスタジオにて、ライヴ録音したという制作プロセスだろう。同じ曲だったとしても、パートごとに録るのとバンドで合わせながら録るのとでは、まったく違うグルーヴになるということが顕著に出ていると感じられる。

では楽曲の雰囲気は、と言えば、スコーピオンズらしいやや影のある曲から、アルバム前半における80sアメリカン・ハードロック調のものまで、いい意味で幅があるようにも感じられる。③「ノック・エム・デッド」はまさに西海岸的空気も感じられ、コーラスのキャッチーさからも、こののちのツアーでの定番曲になるだろうと確信する。⑥のヘヴィなリズムも、ぜひ生で体感したいものだ。

やはりタイトルどおり、“ロックを信じる者”だからこそ出せる音なんだな……と痛感させられた、大ベテランのエネルギーあふれる一枚だ。

（岡見高秀）

マーシャル製イヤフォン[MOTIF A.N.C.]でも聴いてみた！
▶本機についてはP.127でもチェック！

ルドルフと言えば(昔は)マーシャル！　ということで、マーシャル印のイヤフォンとの相性は……当然バッチリだ(笑)。とは言え、もちろんギターが特に目立つわけではなく、全体が歯切れよく、⑧ではベースのうねりも重厚に再生。これが初期音源になるとどうなるか気になるところ。

『ターボライダー』
レックレス・ラヴ

マーキー／ MICP-11670
発売中

FOR FANS OF: オジー・オズボーン／クラッシュダイエット／ヒート

1980年代をリスペクト！
グラム・メタルがレトロ・ポップに？

フィンランドを代表するグラム・メタル・バンド、レックレス・ラヴが、6年ぶりにニュー・アルバムをリリース。

これまでのイメージで本作を聴いたら、必ず“あれ？”と思うはず。今までのグラム・スタイルから一新、1980年代のメロディック・ロックをベースにレトロ・ポップ調を大量に取り入れることで、彼の年代へのリスペクト精神をたっぷりと聴かせているのだ。また全篇で聴けるアクセントの大きい8ビードもより1980年代を彷彿させ、オモシロい一作となっている。

ただし、それでもバンド本来の音色を捨てたわけではなく、ヘヴィかつハードな部分もしっかり融合させ、秀逸なギター・ソロも健在。①を聴くだけでもその絶妙なミックスがわかるだろう。

またレジェンド、オジー・オズボーンの代表曲「月に吠える」のカバー曲である⑤もお薦め。原曲を忠実に再現しつつ、アルバムを一貫するエレクトロ音も取り入れ、彼らの色も存分に楽しめるアレンジに仕上がっている。（王彦蓉）

『オルタネイト・リアリティーズ』
H.E.R.O.

ソニー／ SICX-178
3 月 16 日発売

FOR FANS OF: ディジー・ミズ・リジー／ブリング・ミー・ザ・ホライズン

内面の闇と真摯に向き合い
強度に磨きをかけた生命力に脱帽

冒頭曲「グラヴィティ」からして、ゴジラのごとき硬質のヘヴィネスを叩きつける。MEWのヨハン・ウォーラート(b)を正式メンバーに迎えた本3rdアルバムは、クリストファー・スティアネ(vo、g)の家族関係におけるトラウマを扱ったシリアスな歌詞が主題になっている。ゆえに甘美なポップ・ナンバーは後退し、現４人の生々しいシルエットが浮上したアグレッシブな演奏が大きな聴きどころである。そのうえで、クリストファーの伸びやかな美声はヘヴィな音像に埋もれることなく、キャッチーなきらめきで聴き手の心をつかんでくる。

バンド・サウンドありきで、従来のエレクトロ要素はアクセサリー的に導入しながらも、相変わらず高水準をキープした粒揃いの楽曲に驚くばかりだ。特に壮大なスケールで迫る④「オキシゲン」でのファルセットを巧みに使ったハイ・トーン・ヴォイスが素晴らしく、個人的にお気に入り。また、日本盤ボートラ2曲も出来が良く、⑫「イズ・イット・ミー・ユーアー・ルッキング・フォー」もお薦め。（荒金良介）

『ル・バル・デ・オーンブル』
マニガンス

スピリチュアル・ビースト／ IUCP-16352
3 月 16 日発売

FOR FANS OF: ガンマ・レイ／ガルネリウス／ワーロック

世界観はそのままに
新たに女性ヴォーカルを迎えた7th作

フランスのメロディアス・ハード、マニガンスの7枚目のスタジオ・アルバムが3月16日にリリースされる。本作のポイントは、何といっても初めて女性ヴォーカルを迎えての作品になったということだろう。とは言えカリーヌ・ピントはとてもパワフルな歌声の持ち主で、楽曲の世界観とも非常にマッチしており、前作までのサウンドはそのままに新たなバンドの形として楽しむことができるはず。

代表曲⑤は、イントロのオルゴールが止んだ直後、一気にハイ・ゲイン・ギターで楽曲に引き込まれる。またギター・ソロは全体を通してテクニカルなプレイとメロディアスな展開が絶妙なバランスで構成されており、こちらもぜひ注目して聴いてもらいたいポイントのひとつだ。個人的にお気に入りな楽曲は⑦で、リズミカルなバッキングの上で繰り広げられていくふたりのギター・ソロは聴きごたえ充分。

日本盤では、なんと⑤を日本語で歌唱している⑬とライヴ音源の⑭も収録される。（原見理香）

『ウォー・オブ・ザ・ワールズPt2』
マイケル・ロメオ

ソニー／SICP-6437
3月23日発売

FOR FANS OF：ドリーム・シアター／イングヴェイ・マルムスティーン

**多彩なギター・リフが堪能できる
プログレ・ギター好き必聴の1枚**

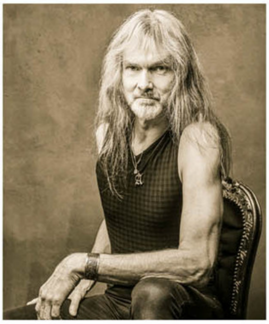
プログレッシブ・メタル・バンド、シンフォニーXのギタリスト、マイケル・ロメオの新たなソロ・アルバムが3月23日に日本先行で発売される。

前作の『Pt.1』に連なるとされる本作だが、厚みのあるストリングスの上に展開していく彼の世界観はまるで映画のサウンドトラックのようで、全篇を通して前作よりさらに洗練された印象を受けた。

すでにシングルとして公開されている②では、早速疾走感のあるヘヴィなリフと、テクニカルでヴォリュームたっぷりなギター・ソロを堪能できる。また特に惹かれたのは④「Metamorphosis」で、シンセとユニゾンでスタートするリフは近未来的なカッコよさがあり、Bメロで一度拍子が変わるエモーショナルな盛り上がりの演出も秀逸だ。

初回盤はインスト・バージョン付属の2枚組。ギターをじっくり聴き込むことで、本篇とは異なる発見ができるはず。また、日本盤にはボーナス・トラックとしてあの『ゴジラ』のテーマのカバーも収録。　（原見理香）

『レヴェル・イン・タイム』
アルイエン・アンソニー・ルカッセンスズ・スター・ワン



ソニー／SICP-6444
3月23日発売

FOR FANS OF：アヴァンタジア、エイリオン／ティモ・トルキズ・アヴァロン

**A・A・ルカッセンのプロジェクトが
約12年ぶりに復活！**

元ヴェンジェンスの作曲家兼マルチ奏者のアルイエン・アンソニー・ルカッセンのメタル・プロジェクトのひとつスターワンが、通算3作目となる新作を完成させた。前作『ヴィクティムズ・オブ・ザ・モダン・エイジ』以来、実に約12年ぶりとなる。コンセプト作ではないようだが、時間旅行や時空移動などがテーマであり、前2作同様にSFをモチーフとしたアルバムだ。

スターワンの魅力のひとつは多数のゲスト参加で、ギターにスティーヴ・ヴァイ、エイドリアン・ヴァンデンバーグ、マイケル・ロメオ、シンガーにジェフ・スコット・ソート、トニー・マーティンなど有名どころが参加している。ジョー・リン・ターナーがヴォーカル、イエンス・ヨハンソンがシンセ・ソロを手掛けた「ザ・イヤー・オブ'41」など、豪華な組み合わせによる腰の据わったヘヴィメタルが楽しめる。

［ディスク2］には、［ディスク1］と同じ曲の"シンガーが異なるバージョン"が収録され、その個性を聴き比べてみるのもおもしろい。　（舩曳将仁）

『Parrhesia』
アニマルズ・アズ・リーダーズ

**プログレッシブの最前線であり
叡智が詰まった不思議な音たち**

世界中のギター・キッズに影響を与えているトーシン・アバシ(g)を中心に、変則的なリズムや予測不能な展開を正確無比なテクニックで実現しているアニマルズ・アズ・リーダーズ。

今回の新譜ではMVも重要で、映像を用いることで楽曲をより立体的な形で組み立てている。精緻なロー・カットが施されたクリスピーなギター・サウンドのなかで、前作に比べてきらびやかな上モノ・フレーズが複雑なリズムと音階で重ねられており、いつも以上に対位法を感じさせる楽曲が多い(②③⑤⑥)。これにアート集団NOHBORDSによる前衛的な映像作品が立体交差するため(特に②)、バンドの持つ神秘的な世界観を多面的に受け取ることができる。

ハヴィエル・レイス(g)とマット・ガーストカ(d)によるリズム・セクションのなかで、アバシらしいシュレッドも楽しめる作品ではあるが、今回は1枚を通して"難解だけどピタっと一致する不思議な音たち"を複雑に楽しんでほしい。　（原田右恭／[Next Guitar Hero is…]プロデューサー）

ワーナー
3月25日発売

FOR FANS OF：メシュガー／ポリフィア／People In The Box

[MOTIF A.N.C.]でも聴いてみた！

ローからロー・ミッドに軸を据えたようにミキシングされている本アルバムに対して、いい意味で帯域の分離感が感じられた本機。"ベースがどう動いているか？"、"ドラムがどんな音作りをしているか？"がハッキリ理解でき、気になるギター・サウンドも、楽曲に馴染む感じで心地よく聴き続けられた。バランスのとれたモニタリングに適したイヤフォンだと言えそうだ。

『ノクターナル・クリーチャーズ』
ボマー

マーキー／ MICP-11697
3 月 25 日発売
FOR FANS OF: アイアン・メイデン／ヘラコプターズ

シンガロング必至の鮮烈なメロディに酔うヴィンテージ・ハードロックの新鋭！

スウェーデン発の新人による1stアルバムは、重厚なコーラス・ワークを含めて良質なハードロックをかき鳴らしている。同郷のバックヤード・ベイビーズ、ハードコア・スーパースターの血筋を受け継ぐ北欧ロックンロール・タイプの②「ツァラトゥストラ」みたいな楽曲があるかと思えば、③「フィーヴァー・アイズ」ではシン・リジィっぽいツイン・リード、また⑤「ア・ウォーク・オヴ・タイタンズ」においては初期レッド・ツェッペリンを彷彿させる湿り気満載のNWOBHM臭を放つなど、自身のルーツを楽曲に散りばめたバラエティ感を誇る。

耳馴染みのいいキャッチーなメロディ・ラインも印象的で、正統派からメロハー好きまで射程に入れたポピュラリティの高い楽曲が並んでいるため、多くのリスナーに刺さりそう。まだ未知のポテンシャルを秘めているので、真価が問われるのは次作以降かもしれないが、期待のニュー・フェイスと言えるだろう。突き抜けたサビが鮮烈な⑥「ザ・タイガー」のような王道曲も推したい。（荒金良介）

Live

“オフィシャル・ブート・ライヴ盤”第2弾は現メンバーによる初の全米フル・ツアーから!

キッスの“オフィシャル・ライヴ・ブートレッグ”の第2弾が発売中だ。今回パッケージされたのは、2004年に行なわれた《ロック・ザ・ネイション・ツアー》より、ヴァージニアビーチ・アンフィシアターでの一夜。

本ツアーの特徴は、なんといっても“現キッス”のメンバーによる初の全米フル・ツアーということだろう。セットリストは王道の人気曲を的確にセレクトという感もあるが、やはりトミー・セイヤーの活きのいいプレイが加わったことで、この時期らしいエモーションのある演奏が聴ける。

リリースのフォーマットはストリーミングや配信はもちろん、CD、通常のアナログ盤からカラー・レコードまで、キッスらしいマニア心くすぐる展開となっている。特にカラー・レコードは限定とのことで売り切れには注意を！

『オフ・ザ・サウンドボード：ライヴ・イン・ヴァージニアビーチ 2004』
ユニバーサル／ UICY-79923/4
（2 枚組 SHM-CD ／初回生産限定盤）
発売中

Tribute

ザック、王者、スラッシュ、マーティ、マイク・ポートノイ……レスリーに影響を受けた豪華ミュージシャンがトリビュート

2020年末に75歳で亡くなったマウンテンのギタリスト／ヴォーカリスト、レスリー・ウェスト。1970年代アメリカン・ハードロックの礎を作ったバンドのひとつであり、現役のメタル系ミュージシャンにも彼に影響を受けた人物は多い。

そんな彼のソロ、マウンテン、ウェスト・ブルース＆レイングといったキャリアを網羅するトリビュート作が、この『レガシー：トリビュート・トゥ・レスリー・ウェスト』だ。前述のとおり影響力の大きいレスリーだけに、参加者も豪華。ザック・ワイルド「ブラッド・オブ・ザ・サン」、イングヴェイ「ロング・レッド」、スラッシュ「ミシシッピー・クイーン」……と、どのトラックも個性的な仕上がりとなっている。

マウンテン世代ではない若いリスナーにも、これを機会にぜひレスリーの世界観に触れてみてほしい。

『レガシー：トリビュート・トゥ・レスリー・ウェスト』
ソニー／ SICX-179
3 月 23 日発売

試奏・文：梶原稔広（ALHAMBRAのギタリスト。専門学校にて後進の指導にも携わるほか、教則本も執筆）
加藤ゆい（マスタリング・エンジニア。ジャンルを問わず、さまざまな音源を担当する）
写真：鈴木千佳

IBANEZ

RG PREMIUM 2022 NEW MODEL
RGT1221PB-DTF

価格：220,000円（税込）

Specifications

ボディ：ポプラ・バール（トップ）、アメリカン・バスウッド（ボディ）
ネック：メイプル＆ウォルナット（7ピース／スルーネック）
指板：エボニー
フレット数：24
ピックアップ：ディマジオ製The Tone Zone（リア）、同Air Norton（フロント）
コントロール：ヴォリューム、トーン、アルター・スイッチ、5ウェイ・ピックアップ・セレクター
ブリッジ：モノ・レール
カラー：コスモ・ブラック
付属品：専用ギグ・バッグ

演奏性とキレを両立するスルーネック・モデル

世界中のメタル・ミュージシャンが愛用するアイバニーズより、RGシリーズの新たなモデルが発売された。今までもビギナーからプロまでを虜にしているRGだが、本モデルの大きな特徴は、これまでの多くのRGで採用されてきたボルトオン・ジョイントではなく、スルーネック方式が採用されたことだろう。

スルーネックになったことでハイ・ポジションでの高い演奏性を獲得し、同時に豊かな鳴りとサステインを得ることにも成功している。また一般的にスルーネックはアタックが若干弱く、歪ませたときの倍音が出すぎて音が多少にごる傾向にあるが、こちらは倍音豊かでハイ・パワーなディマジオ製ピックアップの良さを生かしつつも、クリアでコントロールしやすい音色を出す。

アタック感もボルトオンに引けを取らないので、音の分離がしにくい低音部のスピード・リフなどもしっかりと出力。サウンドメイクに妥協することなく、爆音＆ハイ・ゲインでもキレのいい伸びやかなトーンが演出可能だ。

モノレール・ブリッジとロック・ペグの採用でチューニングの安定性も申し分なく、比較的軽量なボディはステージでの軽快なパフォーマンスも約束してくれるだろう。（梶原）

▲ミニ・スイッチの切り替えにより、太く存在感のあるタップ・サウンドを含む合計10パターンのバリエーションが出力できる。

●問い合わせ：星野楽器販売
☎0561-89-6900
◎https://www.ibanez.com/jp/

IK MULTIMEDIA

AMPLITUBE X-DRIVE

価格：50,820円（税込）

●問い合わせ：株式会社フックアップ
☎03-6240-1213
◎https://hookup.co.jp

Specifications

コントロール：モデル、プリセット、パラメーター、ドライブ、ベース、ミドル、トレブル、ヴォリューム、フット・スイッチ×3
入出力端子：インプット、アウトプット、CAB SIMアウト、ヘッドフォン・アウト、MIDI イン／アウト、EXTコントロール、USB
外形寸法：175（W）×145（D）×58（H）mm
質量：906g
電源：付属

▲さまざまなシチュエーションを考慮した多様な入出力端子。MIDIを使いほかの機材との連携や、USBを使ったDAWでのレコーディングもOK。

ドライブ・サウンドのタイムマシーン・ボックス

DAW用プラグイン・エフェクトAmpliTubeで有名なIK Multimediaが、ストンプ・ボックスを4機種発表。今回紹介するのは、そのなかでもメタル・ギタリストにお薦めのドライブ・ペダル。赤いルックスと液晶の表示も赤なのがカッコいい!

先に“DAW用で有名な〜”と書いたが、実機であるこちらは、DAW未経験者はもちろん、DAW上で作り込んだサウンドをステージで遜色なく再現したい人にピッタリな一台。同社があえてハードにしたのも、より多彩な現場での活用を考慮した結果だろう。

本機には歴代のドライブ・サウンドをほぼ網羅した16種類の歪みタイプが内蔵されていて、大きく分けると“ブースター”、“ファズ”、“オーバードライブ”、“ディストーション”となり、そのどれもが非常に高いクオリティになっている。気になる歪み量も80sメタルからモダン・ヘヴィネスまで幅広い歪みを創出できるので、これだけ持って行けば、どんなメタル・バンドにも対応できるだろう。まさにドライブ・サウンドのタイムマシーン・ボックスである。

また非常に使い勝手が良く、各歪みの役割もわかりやすく好みの音をすぐに作れる印象。アンプの歪みとの合わせ技もいいし、リターンに本機の純粋なサウンドを入力するという使い方もいいだろう。

デジタル機材使用時に心配なレイテンシーも気にはならず、タイトな刻みやシュレッド・プレイにも正確に反応してくれる。（梶原）

BOGNER
ECSTASY MINI HEAD

価格：49,500円（税込）

●問い合わせ：株式会社ミュゼット・ジャパン
☎03-3526-6298
Ⓒhttp://www.musette-japan.com

▲サイズも小さく2kgに満たない軽量設計。スタジオやライヴハウスなどへも気軽に持ち出せる。

Specifications

コントロール：ヴォリューム、プレゼンス、トレブル、ミドル、ベース、ゲイン、バリアック・オン／オフ、ゲイン+／−、ミドル・フリケンシー・スイッチ、プリEQスイッチ
入出力端子：インプット、センド、リターン、スピーカー・アウト×2
外形寸法：240（W）×120（D）×133（H）mm
質量：1.8kg
電源：付属

小さな筐体に隠された魅惑のハイ・ゲイン・サウンド

ブティック・アンプを代表するボグナーから、フラッグシップ・モデル［Ecstasy］をターゲットにしたミニ・サイズのアンプ・ヘッドが発表された。

まずは、とても小ぶりで軽量なのにビックリ。しかし、マニア心をくすぐるコレクターズ・アイテム的なモノかと思いきや、実際キャビネットから出力されるサウンドは、いい意味で期待を裏切るナイスなドライブだった!

フロントのコントロール部は同社の大ヒット・ペダル［Ecstasy Red & Blue］にゲインと中域のキャラクターをセレクトするスイッチを搭載したイメージで、サイズ感以上のバリエーション豊かな音色を得ることができる。［VARIAC］スイッチで、あの"ブラウンなサウンド"も堪能できるのだ。

またオーガニックながら粒の細かいモダンな歪みまでカバーするので、本アンプのみで幅広いメタルがプレイできるという印象。自宅で小音量での芳醇なドライブから、大型キャビネットにつないだリッチなサウンドまで、使える用途の幅も広い。

リア部にはスピーカー・アウト（最大2台のキャビネットを使用可能）とセンド&リターンを装備しているので、ディレイ&リバーブを効かせた80sメタル・スタイルも再現可能!

小型ながらもメーカーの自信がうかがえるクオリティは流石のひと言。カラー・バリエーションもあるので、インテリア的な使い方も想定して選びたいところだ。（梶原）

MARSHALL
MOTIF A.N.C.

価格：25,980円（税込）

●問い合わせ：完実電気株式会社
◎https://kanjitsu.com

▲1回の充電で、最大約4.5時間の再生が可能。充電ケースを使えば最大約20時間の再生もOKと、長持ちバッテリーも魅力だ。

Specifications

形式：ダイナミック型
連続再生時間：約4.5時間（ANC オン）／約6時間（ANC オフ）
フル充電時間：約3時間（イヤフォン／充電ケース）
重量：約4.25g（イヤフォン片耳）／約39.5g（充電ケース）
付属品：イヤー・チップ（S／M／L）、USB Type-C充電ケーブル

王道アンプ・ブランド名を冠した楽曲の制作意図を正確に伝える一台

“大型アンプの代名詞”マーシャルと、小型ワイアレス・イヤフォン。並べてみるとアンバランスなイメージだが、本機はそれを拭い去ってしまうほどの高い完成度だった。

まず重要になる装着感だが、耳に収まる部分が小さくデザインされているので、男女問わず利用できる印象。また、必須機能とも言えるノイズ・キャンセリングだが、本機搭載のANC（アクティブ・ノイズ・キャンセリング）は周囲の音を完全に消すことがなく、都市部では量感の多い低域を程よく減衰させることで、自然かつストレスなく音楽が楽しめるようになっている。

肝心の音質面では、高域にわずかな色づけが感じられ、そこが楽曲の旨味をより強調しているという具合。例えば80年代メタルならば、この時代の特徴でもあるダイナミクスに溢れたミックスに没頭できる。90年代は録音技術も高まっている時期であり、バランスのいい迫力のある演奏にグイグイと引き込まれた。2010年代は“音圧戦争中”と言える時期で、その音圧を高めた音源も忠実に再生してくれるので、大音量でプレイしてもその作品らしい音のまま楽しむことができるだろう。

ギター・アンプ・ブランドの名を冠してはいるものの、特定の楽器を誇張することなく楽曲の制作意図が正確に伝わるよう作られたイヤフォンでもあり、なおかつ、小さな筐体のなかに“マーシャル魂”がしっかりと存在している製品と言えるだろう。（加藤）

METAL HAMMER メタルハマー・ジャパン Vol.9 JAPAN

Rittor Music Mook

電子版　2022 年 4 月 1 日　第 1 版発行
（底本　2022 年 4 月 1 日発行　第 1 版 1 刷）

【発行所】
株式会社リットーミュージック
〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町一丁目 105 番地
https://www.rittor-music.co.jp/

発行人　松本大輔
編集人　野口広之

【本書に関するお問い合わせ先】
info@rittor-music.co.jp
本書の内容に関するご質問は、E メールのみでお受けしております。メールの件名に『メタルハマー・ジャパン Vol.9（電子版）』と記載してお送りください。ご質問の内容によりましては、しばらく時間をいただくことがございます。なお、電話や FAX、郵便でのご連絡、本書記載内容の範囲を超えるご質問につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

編集長
岡見高秀

編集スタッフ
王 彦蓉

海外渉外担当
平井潤

表紙デザイン
村藤治（RAD）

表紙写真
Koh Hasebe/Shinko Music/Getty Images

デザイナー
山田直登（株式会社ナックスタイル）
辻井知（Design Works SOMEHOW）
石原崇子

電子版制作　大日本印刷株式会社

©2022 Rittor Music, Inc.

＊本書記事／写真／図版などの無断転載・複製は固くお断りします。
＊この電子書籍は固定レイアウト形式で作成されています。
　文字の拡大・縮小や、検索、ハイライトなどの機能は利用できません。
＊電子版は紙版とは異なる部分があることをご了承ください。

▲寅年一発目の発刊ということで！　いや〜カワイイ♪　自分の子が一番カワイイってこういう気持ちなんですね（笑）。
（王）

HAMMER　FUTURE

本書の記事は、Future plc グループ企業である Future Publishing Limited, UK 1983 が著作権を保有またはライセンスを受けている Metal Hammer から翻訳または複製されています。 Metal Hammer は Future Publishing Limited の商標またはライセンスを受けているものです。Used under license. All rights reserved.
　Future plc グループが発行する本雑誌およびその他の雑誌の詳細については、http://www.futureplc.com へアクセスください。